

靈界物語 特別篇 山河草木 入蒙記

出口王仁三郎

目次

第一篇 日本より奉天まで

第一章 水火訓

第二章 神示の經綸

第三章 金剛心

第四章 微燈の影

第五章 心の奥

第六章 出征の辭

第七章 奉天の夕

第二篇 奉天より洮南へ

第八章 聖雄と英雄

第九章 司令公館

第一〇章 奉天出發

第十一章 安宅の關

第十二章 焦頭爛額

第十三章 洮南旅館

第十四章 洮南の雲

第三篇 洮南より索倫へ

第一五章 公爺府入

第一六章 蒙古の人情

第一七章

明暗交々めいあんこもこも

第一八章

蒙古氣質もうこきしつ

第一九章

假司令部かりスーリンフ

第二〇章

春軍完備しゅんぐんくわんび

第二一章

索倫本營ソロンほんえい

第四篇

神軍躍動しんぐんやくどう

第二二章

木局收ヶ原ムチズがはら

第二三章

下木局子しもムチツ

第二四章

木局の月ムチのつき

第二五章

風雨叱咤ふううしつた

第二六章

天の安河あまやすかは

第二七章

奉天の渦ほうてんうづ

第二八章

行軍開始かうぐんかいし

第二九章

端午の日たんごひ

第三〇章

岩窟の奇兆がんくつきてう

第五篇

雨後月明うごげつめい

第三一章

強行軍きやうかうぐん

第三二章

彈丸雨飛だんぐわんうひ

第三三章

武装解除ぶさうかいぢよ

第三四章

龍口の難たつのくちなん

第三五章

黄泉歸よみがへり

第三六章

天の岩戸あまいはと

第三七章

大本天恩郷おほもてんおんきやう

第三八章

世界宗教聯合會せかいしうけうれんがふくわい

第三九章

入蒙拾遺 にふもうしふゐ

入蒙餘録 にふもうよろく

大本の經綸と滿蒙 おほもと けいりん まんもつ

世界經綸の第一歩 せかいけいりん だいいつぽ

蒙古建國 もつこけんこく

蒙古の夢 もつこ ゆめ

〵  
〵  
〵  
〵  
〵  
〵  
〵  
〵  
〵  
〵

第一篇 日本より奉天まで

第一章 水火訓

神の稜威も高熊山の  
神徳四方に三葉彦  
黄金世界を開かむと  
告ぐる夕の月の空  
小判千兩掘出して  
三千世界の蒼生を  
天國淨土に救はむと  
七つの春の彌生空

山の麓に生れたる  
神の精靈を相宿し  
こがねの鷄黎明を  
干支に因みし十二の日  
神の御國に獻り  
浦安國の心安き  
一二三四五六七  
富士の高根に仕へたる

松岡神使が現はれて

朝な夕なに身魂をば

守らせ玉ひ二十まり

八つの御年も如月の

白梅かをる夕月夜

うづの靈地に伴ひて

現幽神の三界の

其眞相をつばらかに

すべての業放擲し

不二の神山に參まうで

神のみいづを身に受けて

心の色も丹波の

再び郷里に立返り

西や東や北南

神のまにまに全國に

教を傳達したりけり

明治は三十一年の

文月下旬となりければ

神の御言を畏みて

西北さして出でてゆく

西の御空を眺むれば

半國山は巍然と

雲を壓して聳えたち

東に愛宕の靈峰は

城丹兩國睥睨し

南に妙見聳え立ち

北に帝釋大悲山

などの峻峰青垣を

めぐらす中の穴太より  
北へ北へと歩を運ぶ

浮世はなれし坊主池  
心も高砂池の邊を

辿りて數多の信徒を  
救ひやらむと只一人

小松林の神靈に  
送られ乍ら進み行く

小林小河鷹林  
千原川關のりこえて

虎天堰に來てみれば  
竝木の松の片ほとり

いとも小さき一つ家が  
物淋しげに建つてゐる

渴を醫せむと門の戸を  
くぐつて茶湯を求むれば

此家の妻と思はしき  
一人の婦人が現はれて

かけた茶碗を揺る様に  
ガチャガチャと喋り出す

ガチャガチャ話を聞きつけて  
やおら腰掛はなれつつ

船井の都會八木の町  
道の廣瀬や鳥羽の里

風さへ暑き室河原  
小山松原乗越えて

花の園部に安着し  
暫しはここに歩をとどめ

観音坂くわんのんざかや須知町しうちまち 蒲生野がまぶのこえて檜山ひのきやま

歩みあゆも一二三いちにさんの宮みや 神歌しんかを歌うたひ聲こゑさへも

枯木峠かれきたうげや榎山えのきやま 大原神社おほはらじんじやを伏拜ふしをがみ

臺頭だいとう須知山すちやま乗のりこえて 風吹かぜふきわたる小雲川こくもがは

風かぜにゆるるる竝木松なみきまつ 水無月みなつき神社じんじやを右みぎに見みて

國照姫くにてるひめのあれませる 裏町館うらまちやかたに着つきにけり

あゝ惟かむながらかむながら神々かみ々々 神かみの使命しめいの重おもくして

二十五年にじふごねんの其間そのあひだ 艱難かんなん辛苦しんくを堪たへ忍しのび

時節じせつ來きたりて神業しんげふの 實現じつげん間際まぎはとなりければ

言靈ことたまわけ別の精靈せいれいを 身魂みたまにみたし眞澄ますみわけ別

名田彦なだひこ守高もりたかり兩人ふたりを 添そへていよいよ大海たいかいを

渡りわた蒙古もうちこの大原野だいがんや 神政しんせい成就じやうじゆの先驅さきがけと

大活躍だいくわつやくを始はじめたる 神靈界しんれいかいの物語ものがたり

時節じせつ來きたりて説ときそむる 大國常立大御神おほくにとこたちおほみかみ

神素盞鳴の大御神

恩頼をくだしまし

うまらにつばらに真相を 述べさせ玉へと願ぎ奉る。

國照姫は國祖大神の勅を受け、水を以て所在天下の蒼生にバプテスマを施さむと、明治の二十五年より、神定の靈地綾部の里に於て、人間界の誤れる行爲を矯正し、地上天國を建設すべく、其先驅として晝夜間斷なく、營々孜孜として、神教を傳達された。水を以て洗禮を施すといふは、決して朝夕清水を頭上よりあびる計りを云ふのではない。自然界は凡て形體の世界であり、生物は凡て水に仍つて發育を遂げてゐる。水は動植物にとつて缺く可からざる資料であり、生活の必要品である。現代は仁義道德廢頽し、五倫五常の道は盛に叫ばれると雖も、其實行を企てたる者は絶えてない。神界に於ては先づ天界の基礎たる現實界に向つて、改造の叫びをあげられたのである。國常立尊の大神靈は精靈界にまします稚姫君命の精靈に御靈を充たし、豫言者國照姫の肉體に來らしめ、所謂大神は間接内流の法式に依つて、過去現在未來の有様を概括的に傳達せしめ玉ふたのが、一萬卷

の筆先となつて現はれたのである。此神諭は自然界に對し、先づ第一人間の言語動作を改めしめ、而して後深遠微妙なる眞理を萬民に傳へむが爲の準備をなさしめられたのである。凡て現世界の肉體人を教へ導き、安逸なる生活を送らしめ、風水火の災ひも饑病戰の憂もなき様、所謂黄金世界を建造せむとするの神業を稱して水洗禮といふのである。

國照姫の肉體は其肉體の智慧證覺の度合によつて、救世主出現の基礎を造るべく、且其先驅者として、神命のまにまに地上に出現されたのである。國照姫の命のみならず、今日迄世の中に現はれたる救世主又は豫言者などは、何れも自然界を主となし、靈界を從として、地上の人間に天界の教の一部を傳達してゐたのである。釋迦、キリスト、マホメツト、孔子、孟子其他世界の所在先哲も、皆神界の命をうけて地上に現はれた者であるが、靈界の眞相は何時も説いてゐない。釋迦の如きは稍靈界の消息を綿密に説いてゐるやうではあるが、何れも比喻や偶言、謎等にて茫漠たるものである。其實、未だ釋迦と雖も、天界の眞相を説くことを許されてゐなかつたのである。キリストは、吾が弟子共より天國の状態は如何に

…と尋ねられた時、地上にあつて地上のことさへも知らない人間に對し、天國をといたとして、どうして天國のことが受入れられうぞ」と答へてゐる。神は時代相應、必要に仍つて、教を傳達されるのであるから、未だキリストに對して、天國の眞相を傳へられなかつたのである。又其必要を認めなかつたのである。然るに今日は人智漸く進み、物質的科學は殆ど終點に達し、人心益々不安に陥り、宇宙の神靈を認めない者、又は神靈の有無を疑ふ者、及無神論さへも稱ふる様になつて來た。かかる精神界の混亂時代に對し、水洗禮たる今迄の豫言者や救世主の教理を以ては、到底成神成佛の域に達し、安心立命を心から得ることが出來なくなつたのである。故に神は現幽相應の理に仍つて、火の洗禮たる靈界の消息を最も適確に如實に顯彰して、世界人類を覺醒せしむる必要に迫られたので、言靈別の精靈を地上の豫言者の體に降されたのである。

曾てヨハネはヨルダン川に於て、水を以て下民に洗禮を施してゐた時、今後來るべき者は吾よりも大なる者である。そして吾は水を以て洗禮を施し、彼は火を以て洗禮を施すと豫言してゐた。それは所謂キリストを指したのである。併し乍

らキリストはヨハネより水の洗禮を受け、之より進んで天下に向つて火の洗禮を施すべく準備してゐた時、天意に依つて、火の洗禮を施すに至らず、遂に十字架上の露と消えて了つたのである。彼は死後弟子共の前に姿を現はし、山上の遺訓なるものを遺したといふ。しかし此遺訓は何れも現界人を信仰に導く爲の神諭であつて、決して火の洗禮ではない。故に彼は再び地上に再臨して火の洗禮を施すべく誓つて昇天したのである。火の洗禮と云つても東京の大震災、大火災の如きものを云ふのではない。大火災は物質界の洗禮であるから、之は矢張り水の洗禮といふべきものである。火の洗禮は靈主體從的の神業であつて、靈界を主となし、現界を從となしたる教理であり、水の洗禮は體主靈從といつて、現界人の行爲を主とし、死後の靈界を從となして説き初めた教である。故に水洗禮に偏するも正鵠を得たものでないと共に、火洗禮の教に偏するも亦正鵠を得たものでない。要するに靈が主となるか、體が主となるかの差異があるのみである。

茲にいよいよ火の洗禮を施すべき源日出雄の肉體は言靈別の精靈を宿し、眞澄別は治國別の精靈を其肉體に充たし、神業完成の爲に、野蠻未開の地より神教の

種子を植付けむと、神命に仍つて活動したのである。あゝ惟神靈幸はへませ。

(大正一四・八・一五 松村眞澄筆録)

## 第二章 神示の經綸

明治の末葉大正の初期にかけ、思想混亂の極に達せる現實界に向かつて、一大獅子吼をなし、神教を四方に傳達したる結果、恰も洪水の氾濫して大堤防を破壊するが如き勢を以て勃興したる天授の聖教、三五の聖團、其大本所在地と聞えたる綾の聖地 佛徒の所謂靈山會場の蓮華臺、キリスト教徒の最も憧憬して已まざるパレスチナの聖場、オレブ山、エルサレムの聖地にも比すべき 神の本宮、桶伏山を中心とし、宏壯なる殿堂、錦の宮を建設し、四百四十四坪の八尋殿に於て、盛に主神の聖教を傳達し、既成宗教の上に卓越して、世界萬有愛の教旗を翻へし、自轉倒島を初め、地上の世界に無数の崇信者を有する三五教の根源地、八

尋殿に於て、恆例の節分祭が執行された。此節分祭はキリスト教の所謂逾越祭の如きものである。此殿堂は五六七神政に因みて五六七殿と稱へられてゐる。國照姫は地上に肉體を以て生存すること八十餘年、大正七年陰曆十月三日神諭を書き了つて昇天し、其聖靈は稚姫君命と復歸し、天界に於て神政を行ひ、其遺骸は天王平の奥津城に永眠してゐる。國照姫の後繼者はすでに二代三代と立並び、神教を傳達することとなつてゐる。

源日出雄は神示によつて、明治三十二年聖地に來り、水洗禮の教務を補佐し、大正十年迄神業を續けてゐた。此間殆ど二十四年、高姫の精靈の宿りたる徳島お福、菖蒲のお花、高村高造、四方與多平、鷹巢文助、其他數多の體主靈從派に極力妨害されつつも、凡ての障壁を蹴破して、十年一日の如く、神教に従事した。梅村信行、湯淺仁齋、西田元教などの輔けはあつたが、分らずやの妨害最も甚だしく、大いに神業の進展を阻害した。

大正五年の末頃から鼻高學者等が續々と聖地に來り、大正十年に世界全滅の却託を並べ、一夜作りの靈學を稱導し、三五の聲望をして、一時は天下に失墜せし

めた。其結果は大正十年に於て、有名なる大本事件を勃發し、次いで桶伏山、錦の宮の、亂暴至極な取毀ちとなり、源日出雄等は一時獄に投ぜられ、いかめしき閻魔の廳に引出されて、善惡邪正を審判さることとなつた。此事件に肝をつぶし鞆丸の宿換さした學者連は、數十萬圓の負債を投付け、日出雄以下の純眞なる神の子を、千丈の谷間につきおとし、知らぬ顔の半兵衛をきめこみ、第二の計畫を立て、迷へる少年をかり集めむとし、心靈會なるものを組織したが、天は斯かる暴虐を許さず、一時其傘下に集まれる猛者連は四方に散逸し、今や孤立無援の境地に立ち心靈と人生なる孤城に隠れて、切りに三五の本城に向つて征矢を放つてゐる。此間日出雄は桶伏山の山下、祥雲閣に於て、萬有愛の教旗を翻し、三五の神教を傳ふべく、神示の靈界物語を口述發行し、天下に宣傳せしより、教勢頓に回復し、何れも其教理に歡喜雀躍し、洋の内外を問はず信者は日に月に蝟集し來り、昔日に優る大勢力を醸成した。源日出雄は節分祭の濟んだ後、壇上に立ちて一場の演説を試みた。

天地萬有を創造し玉ひし獨一眞神主の神を齋きまつる今日は、一年一回の最も

聖き祭典日であります。殊に大正十三年二月四日の節分祭は、天運循環して、甲子の聖日でありまして、吾々人間としては、十萬年に一度より際會することの出来ない、最も意義ある主の日であります。大神の愛善の徳と信眞の光に充たされたる各國各地の役員信徒諸氏が、神縁相熟して、此八尋殿にお集まりになり、吾等と共に芽出度き大祭典に、奉仕さるることを得られましたのは、至仁至愛の主の神様の御恵みに外ならないことを、皆様と共に感謝せなくてはなりません。御承知の通り、教祖國照姫命に懸らせ玉ふた神様は、宇宙の創造者、天地の祖神大國常立尊でありまして、明治廿五年正月元旦、心身共に淨化したる教祖は稚姫君命の精靈を宿され、前後未曾有の聖教を、一切の衆生に向つて傳達されたのは、吾々人類の爲には、實に無限絶大の賜物であります。主の神様は嚴靈稚姫君命の御精靈に其神格をみたされ、地上の神人たる清淨無垢の靈身三五の教祖の肉體を終局點として來らせ玉ひ、間接内流の形式に仍つて、大地の修理固成の神業を、三界の衆生に對し洽く傳達すべく現はれ玉ふたのであります。其初發の神諭には

三千世界一度に開く梅の花、良の金神の構ふ世になりたぞよ、須彌仙山に腰を

かけ、三千世界を守るぞよ』と大獅子吼をされてゐます。此神示を略解すれば、三千世界とは、神界幽界現界の三大境界であり、過去現在未來をも指して居ります。梅の花の梅は言靈學上、工と云ふことになる、工は萬物の始、生命の源泉であり、用は「ス」といふことになり、又は一切統一の意味であります。又は清浄潔白スミキリの意味ともなる。花とは初めて成るの意であり、最初の意味であり、教祖の意味ともなる。主の神が空前絶後の大神業をいよいよ開始し、最初の御理想たる黄金世界を地上に完全に建設し玉ふといふ芽出度き意味であります。良といへば東北を意味し神典にては日の若宮の方位であり、萬物發生の根源であつて太陽の昇り玉ふ方位であります。また良といふ字義は良めとなり初となり固めとなり永しとなり、世の終りの世の初まりの意味となります。金神といふ意味は賣卜者の云つてある方除けをせられたり、崇り神として排斥せられてゐるやうな人間の假りに造つた神の意味ではなく、尊嚴無比金剛不壞の意味を有し、三界をして黄金世界に完成し玉ふ救ひの神といふ、約り言葉であります。

須彌仙山といふのは、佛經にある假想的の山であつて所謂宇宙の中心を指した

ものであります。日月星辰が此須彌仙山を中心に行進し、須彌仙山には三十三の天があるといつてゐるのを見ても、無限絶對なる大宇宙の意味であることが明瞭となつて來ます。此須彌仙山に腰をかけた良の金神が守ると宣示されたのは、實に驚嘆すべき大神業の大完成を豫示されたもので、萬有一切は此大神の愛善の徳と信眞の光に浴し、現幽神三界に亘り、永遠無窮に眞生命を保ち、歡喜に浴することを得るのであります。太古に於ける現世界の住民は何れも、清淨無垢にして、智慧證覺にすぐれ、愛の善と信の眞をよく體得し、直接天人と交はり、靈界も現界も合せ鏡の如く、實に明かな莊嚴な世界であつたのであります。それより追々と世は降つて白銀時代となり、八岐大蛇や醜狐が跋扈し始め、智慧證覺は漸くにしてにぶり出し、降つて赤銅時代黒鐵時代と益々現實化し、妖邪の空氣は天地に充滿し、三界に紛争絶間なく、今や泥海時代と墮落して了つたのです。佛者は之を末法の世といひ、基督教は地獄といひ、神道家は常暗の世と稱へてゐます。地上一切の民は仁慈無限の大神の恩恵を忘却し、自己愛的行動を敢てなし、互に覇を争ひ、權利を獲得せむとし、排他と猜疑と、呪咀と惡口のみを之れ事とし、佛

者の所謂地獄餓鬼畜生修羅の慘状を現出することとなりました。此に於て國祖の神靈は此慘状を座視するに忍びず、神より選ばれたる清淨無垢なる靈身國照姫命をして神意傳達の機關となし、萬有救済の聖業を托されたのであります。故に三五の教は根本の大神の聖慮を奉戴し、神界より此地上に天降し玉へる十二の神柱を集め、靈主體從的國土を建設し、常暗の世をして最初の黄金世界に復歸せしむる御神業に仕へまつるべき大責任をお任せになつたのであります。今や天運循環の神律によつて、世界各地に精神的救世主が現はれてをります。就いては日出雄も主の神の神示に従ひ、到底此小さき教團のみの神柱となつてゐることは出來ない様になりました。今日の人間は口先では實に勇壯活潑な、鬼神も跣足で逃げるやうな大氣焰をはき、メートルを上げてゐる者もありますが、愈々實地となつた時は龍頭蛇尾に終るのが一般の傾向であります。今日の人間は凡てが卑劣で柔弱で、小心で貪欲で、我利我利亡者で、排他的で、眞の勇氣がありません。かかる汚穢陀羅昏迷の極度に達した人心に活氣を與へ、神の聖靈の宿つた活きた機關として、天晴れ活動せしめむとするには、先づ第一に勇壯活潑なる模範を示し、各人間の

心の岩戸を開いてやる必要がありませんので、國照姫命は荒波猛る絶海の孤島冠島、沓島などに、小舟で渡り、荒行をなし、或は鞍馬山の幽谷其他の靈山靈地へ自ら出修して、信徒の肝を大ならしめ、有爲なる信者を作り、社會の爲に至誠を盡さしめむと努められたのであります。乍併元來臆病神の巢窟となつてゐる人間は盲聾同様で、國照姫命の聖跡をふんで、其實行を試みた者は一人もなかつたのであります。勿論開祖の行かれた冠島沓島や鞍馬山へ參拜して御神業が勤まつたと思つてゐる分らずやは相當にありました。けれども其精神を汲取つて其道に大活動を續けようとする勇者は一人も出なかつたのであります。此體をみて憤慨した日出雄は三五の信徒を始め自轉倒島の人間及世界の人間に模範を示す爲に、神示を畏み、蒙古の大原野を先づ第一に開拓すべく、大正六年の春より、祕かに其準備に着手して居りました。古語にも南船北馬といふ語があります。どうしても東北に進むのには馬に乗ることが必要である。故に日出雄は此年より準備の一端として、四頭の馬を飼育し、背の高い馬、低き馬、おとなしき馬、はげしき馬を乗こなし、時の到るを待ちつつあつた。そこへ神示の如く、大正十年辛酉の年に至つ

て、事件の爲再び天下の大誤解をうけ、行動の自由を失つたので、意を決し、此世界の源日出雄として活動せむと思つてゐます。どうか諸子は其の考へを以て神業に奉仕されむことを希望致します。』  
と結んで降壇した。源日出雄の心中には既に既に神命を奉戴し、空前絶後の大業を今や企てむとし、満月の如く絞つた弓の矢は近く放たれむとしてゐたのである。

(大正一四・八・一五 松村眞澄筆録)

### 第三章 金剛心

錐囊中にあれば必ず穎脱し、空氣球に熱を加ふれば膨張して破裂せざれば止まず、熱烈なる信仰と燃ゆるが如き希望と抱負は、日出雄の肉體をかつて遂に大本と云ふ殻を打破つて脱出せざるを得ざらしめた。

ポンプも強力なる壓迫によつて瀧の如く空中に水柱を立て、油は壓搾器に押へつけられて滲み出る、僅かに五尺の空殻に宇宙我にありの精魂を宿しその放出を防ぐに苦心すること、ここに五十年。山も裂けよ、岩も飛べよ、天を地となし、地を天となす日出雄が心中の抱負の一端は、ここに蒙古人となつて現はれたのである。

明治三十一年以來、教養して来た役員信徒の靈性を一々點檢すれば、愚直と因循固陋排他と誇大妄想狂と罵詈讕謗等、あらゆる惡徳の暗影を現はすのみにて、眞の勇なく智なく愛なく親なし。あゝ斯如ならば蜺貝を以つて大海の水を汲み出し、その干るを待つが如く、駱駝を針の穴に通すが如く、たとへ數萬年を費すと雖も、その獲得する所は苦勞と失敗とにして寸效なきを看破した日出雄は、先づ第一に神の島と聞えたる筑紫島に渡りて阿蘇の噴火口を探り、三韓征伐に由緒ある息長帯比女命の入浴されしと傳ふる杖立の靈泉に心魂を清め、志賀瀨川の清流に襖をなし、鏡の池の清泉に己が姿を寫し眺め、阿蘇の噴煙の如く大氣焰を吐き乍ら九州一の都會熊本城外に立歸るや否や、山本權兵衛内閣の出現、東都の大震

災大火災のいたるに會ふ。あゝ世界改善の狼火は天地の神靈によりて揚げられたり。奮起すべきは今なり。重大なる天命を負ひ乍ら、何を躊躇逡巡するか、日本男子の生命は何處にあるかと、日出雄の精靈は彼の肉體を叱咤するのであつた。日出雄は勿々として従者と共に聖地に歸り、世上の毀譽褒貶を度外におき、一切の因れより離れ、人界を超越して愈神業遂行の腸をきめた。その結果、支那五大教の提携となり、朝鮮普天教との提携となり、國際語エスペラントの宣傳となり、精神的世界統一の一步を走り出した。舊習に因はれ不徹底なる信仰上よつぱらつた役員信徒の中には、男らしくもない、蔭に潜んで、ブツブツ小言を云つてゐるものも澤山に現はれた。今迄獨斷的排他的氣分に漂ひ、高き障壁や深き溝渠を繞らしてゐた大本の信徒團體も、此時よりやや解放氣分となり、圏外の空氣を多少吸収することとなつたのも、全く日出雄の英斷的行動によるものであつた。開祖の神諭に曰く、

三千世界の立替立直し、天の岩戸開き、神は小さい事は嫌ひである、大きな事を致す神であるぞよ。役員信者は胴据ゑ、大きな腹で居らねば到底神の思惑は立

ためぞよ。サツパリ世の洗替であるから、小さい事を申して居つては、いつ迄も世は開けぬぞよ。此ものと思ふて神が綱かけて引寄して見ても、心が小さいから、肝腎の御用の間に合はぬぞよ。誠のものが三人あつたならば、三千世界の大望は成就いたすぞよ」

と示されてある。あゝ偉大なるかな、高遠なるかな、神の宣示よ。大神の神示を徹底的に理解したる日出雄の身は、有司の誤認によつて極刑五年の懲役を云ひ渡され、大坂控訴院に控訴し、厳正なる裁判を受け、嚴重なるその筋の監視を受けてゐた。新聞雑誌の日々の銃先揃へての大攻撃、世間の非難、役員信者の反抗離背、加ふるに財政の壓迫、かてて加へて大國賊、亂臣賊子、大山師、大馬鹿者、曰く何、曰く何、あらゆる悪名を附與せられ天下皆是れ敵たるの境涯にあつた。されど日出雄の肉體は小なりと雖、彼が心中にかかへたる天下救済の抱負と信念は火も焼く能はず、水も溺らす能はず、巨砲も之を粉碎し得ず、鬼、大蛇、虎、熊、唐獅子、駒、數百千の攻撃も意に介するに足らなかつた。現代人より見て如何なる悲運の域に沈淪するとも大困難に陥るとも、その精神を翻さず、強き者に

は強敵あり、大なる器には大なる影のさすの見地に立ち、寧ろ之を壯快となし天下を睥睨してゐた。

凡ての人間には、何れも長所と短所とがある。各人は各人の短所を見て口を極めて非難攻撃し、吾意に合はざるを見て罵詈雑言し排斥するものである。人はその面貌の異なる如く愛善の徳も信眞の光もその度合がある。従つて智慧證覺も優劣等差がある。おのが小さき意志に従はしめむとして、之に和するものを善人となし、和せざるものを悪人と見なすのは凡人の常である。大本の役員信者にも、世間の御多分に洩れず此種の人物が蝟集して居た。日出雄は各人特有の長所短所を知悉してゐる。故にその長所を見て適材を適所に用ゐむとした。頑迷固陋にして小心翼翼たる凡俗的役員信者の目には、日出雄が人を用ゆる點に於て大いに不平を漏してゐる。故に日出雄が近く用を命ずる役員は一般の目より不正者或は悪人と見えたのである。乍然神界の御用は人間の意志に従ふべきものでない。神の命じ玉ふ人物こそ神の御用をつとむるに適したものである。因襲や情實や外形的行爲を見て人を左右すべきものでない、敢然として所信を遂行してこそ初めて神業の一

端に奉仕し得らるるのである。

多数者の非難を斥け、エス語を採用しブラバサを以て之が普及の主任に任じ日支親善の楔たる五大教道院を神戸に開き、隆光彦を以て主任者となし、蒙古の開發には眞澄別を參謀長となして時代進展の擧を進めたのである。

扨て蒙古入に就いては、昨冬王仁蒙古入記と題し靈界物語第六十七卷に編入した。乍然翻つて考ふれば種々の障害のため、事實を闡明するの便を得ず、不得已上野公園著として天下に發表する事としたのである。故に本卷は六十七卷の代著として口述し専ら内面的方面の事情を詳記する考へである。文中變名を用ゐたのも思ふ所あつての故である。

讀者幸に諒せられむ事を。

(大正一四・八・一五 北村隆光筆録)

大正十三年新二月四日は大本の年中行事の一なる節分祭に相当し、翌五日は舊曆甲子の正月元日に相当する吉辰である。然し中國曆に従へば二月四日が正月元日となつてゐる、この方が正當らしい。そして本年の甲子は中國曆によれば十二萬年に只一度循環し來ると云ふ稀有の日柄であつた。二月五日即ち舊正月元日早朝より元朝祭を行ひ、天地四方を拜し、聖天子の仁徳を感謝するのを恆例としてゐる。そして甲子は即ち更始に國音相通じ、百度維れ新なる年だと云はれてゐる。この日各國各地より集まり來つた役員信徒は元朝祭を終へ、殆ど人に對し障壁のない日出雄の身邊を、夜の更くる迄取りかこんで神界の經綸談を聞いて居た。下つて正月五日信者も追々と歸國し、さしもに廣き教主殿も洪水のひいた跡のやうに閑寂の氣が漂うた。午後八時頃、教主殿の奥の間、ランプの光り幽かなる一室に金泰籃の机をとりまいて眞澄別、隆光彦、唐國別の三人と共にヒソヒソと海外宣傳の評議をやつてゐた。明晃々たる三日月は四尾山の頂に沈んで、何處ともなく膚寒い風が裸木の立ち竝んだ神苑を吹き渡つて居る。唐國別は且て海軍に奉仕し、その官は大佐であつた。日出雄は陶器の火鉢に手をあぶり乍ら、

眞澄別さん、朝鮮普天教の方や北京行の結果は、どうになりましたか聞かして貰ひたいものですな

眞澄別「ハイ、御命令を頂きまして唯夫別を伴ひ先ず朝鮮へ神の使節として往來せる金勝玟、田炳徳その他二三の普天教信徒に迎へられ、朝鮮鐵道に乗つて大田驛につき、ここにて普天教幹部金正坤氏と布教傳道の件につき懇々と談じ、金、田二氏の案内にて井邑なる同教本部に參着、教主車潤洪氏と徹夜快談致しました。が、車氏は、かねて聞き及びしに違はざる立派な神柱で、同教の動機や教理等は、その活動舞臺を朝鮮においた迄で、全く大國常立尊様の御經綸に奉仕してゐる人ですから、その教理や事情に於ては今改めて御報告申上げる迄もなく、貴方は御存じの事と思ひます。ただ車氏は神界の御都合により因縁上の關係とでも申すものか、あつぱれ表面に立つて社會的に活動するは甲子の年と同教の神示に定められてあるさうですが、之と同時に日出雄先生にお目にかかり御意見を聞いた上でなくては、公然神業の完成に向つて進まれる譯には行かない事になつてゐるさうです。その筋の誤解や俗人の中傷等もあつて、朝鮮獨立の陰謀團のやうに見做さ

れ、聖地の如く數多の警官に踏み込まれ、非常な迷惑を感じた經緯もあり、それ故車氏は時節の到來する迄多數の信者にでも顔を見せないやうに、山深く分け入り、世間にかくれて神界の經綸を進めつつあると云ふ状態でありますが、右の次第で兔に角當分の處、大本と云ひ普天と云ふのも、各その出現地に於ての稱へであつて畢竟同一の神の教でありますから、相互間の諒解も十分に出來たので精神的、内分的に提携聯合して歸國しました。又北京では主として大學教授やその他の思想家達と交遊し、互に意見の交換をなし大本の教理を詳細に述べた所、彼等も非常に感服し、再會を約して一旦袂を別つて歸りました。五大教道院、悟善社その他の宗教團體は隆光彦さまが交渉の任に當つて居られるので、私は手をつけないで置きました。只將來の参考に資するために、北京の宮城や萬壽山ラマ寺等を興味を以て調べて參りましたが、實に立派なものでありました。又唯夫別は車教主と相談の上普天教の役員格として姓名を金仁澤と改めて殘留させる事と致し、當分金氏指導のもとに朝鮮語を修得し、交換的にエスペラントを教ふる事に取計つておきました。申しおくれましたが、普天教々主の方から日本の方へ伺ひます

のが神様の經綸から云つても本意ですけれども、當分は前陳の通りの事情でございますから、恐入りますが日出雄先生に何とか御都合をつけて、一度お越しを願はれますやう、頼んでは下さいませぬか。さうせなくては表立つて活動するを許されませぬですからと云つて、鶴首して待つてゐます」

日出雄「自分も一度侍天教の教主宋秉駿伯と大正六年の夏提携して以來、會ふゐないから機會を得たら一度會ふて今後の宗教的活動方法につき懇々と相談して見たいと、かねて思つてゐた矢先、朝鮮普天教と提携の出來たのを幸ひ、萬障を繰合して渡鮮して見たいと思つてゐるが、何分御承知の通りの身の上だからその機を得ず今までグズグズしてゐたのだ。乍然人間には一日も暇と云ふ事がないものだから、思ひきつて渡鮮しようかとも考へてゐる。支那の五大教との提携が完成した暁だから、濟南母院の參拜をかね悟善社へも行つて見たいと考へてゐる。幸ひ隆光彦さんが歸つて來たから同教の内情も聞いた上、斷行してもいい」

隆光彦「節分祭をあてに倉皇として支那から歸つて以來、節分祭のため各地信徒の來訪で寸暇を得ず復命をおくれてゐました。昨冬十一月參綾した五大教の代表

者侯延爽氏と一緒に支那に渡り、先づ北京道院を訪ねました。道院のすぐ近くの  
ガーデンホテルで盛大な歓迎會を開いて呉れ、その席で侯氏は大本と開祖様の事  
から、相共に思想善導の大道に相握手するに至つた経緯を語り、私も亦大本の歴  
史から聖師様の事を語り、日支親善や共存共榮の根本義は精神的に兩國民の結合  
を見なければならぬと答辭をかねて述べておきました。道院は御存じの通り佛教、  
儒教、道教、基督教、回教の五大教の統一親和を圖るもので、その宗旨の教義  
は我大本と全然相似たものでありますから、要するに同じ主の神様の御經綸にな  
つたものと考へます。前國務總理たりし錢能訓氏や陸軍元帥、國務總理代理江朝  
宗氏、王芝祥氏等の高官を始め、各方面人士の歡迎を受け、又悟善總社の幹部や  
萬教大同會の袁華瀛氏とも會見した處、何れも皆是非一度聖師様に渡支を願はれ  
ますまいか、幸にお越を願ふ事を得れば道院は勿論悟善社の建物を提供し度いか  
らと云つて、やみませぬでした。どうか綾部の御都合さへつきますれば、一度お  
越しになれば、嘸、皆が満足される事と存じます。お待ちしてゐるのは五大教計  
りぢやありません。濟南、南京、上海と私の通過した處どこも聖師の名を聞いて

御渡支を渴望して居ります。私は主として北京と濟南本部に滞在し、支那五大靈山の一たる泰山に登り、曲阜の孔子廟に詣でて歸國致しました。北京道院の乩示によりますれば来る舊二月朔日に神戸市外六甲村で開院式を開く事になつてゐますから、その前に聖師様のお供をして再び支那へ行き度いと思つてゐます」

日出雄「それは非常に好都合だつた。支那、朝鮮を、それでは一度旅行してその道の主なる人々と世界平和のため、人類愛のため、深き御神慮のある處を語り合ひ、世界宗教統一の第一歩を踏み出すことにしよう、その時は是非眞澄別、隆光彦兩氏も同道して欲しいものだ」

眞澄別「普天教の話もあり、又私も一度道院の幹部連と熟議を凝らして見たいから是非同行を願ひませう」

日出雄「これで教主輔に法學士、支那語學者と三拍子揃つた、鬼に鐵棒だ。あゝ前途の光明は確に輝いてゐる。時に唐國別さん、奉天に水也商會と云ふ軍器店を出してゐられるさうですが、支那の事情は餘程詳しいでせうな」

唐國別「海軍を退職してから何でも支那大陸で一儲をしようと思ひ、先づ上海に

商館を開いて見た處、いろいろの事情があつて百萬圓の金を儲け損ひ、間もなく上海の商店を閉鎖し、張作霖の昵懇者と稱する者よりすすめられ、張作霖の軍隊に武器を供給するため奉天平安通りに水也商會を開設する事になりました。然し之も、どうやら自分の技術を盗まれる位が落かも知れませぬ。ついては聖師がよいよ渡支されるとなれば一つここに面白い事業が横たはつてゐますが、一應聞いて下さいませまいか、今晚伺つたのはこの件につき御意見を承り度いと思つたからです」

日出雄「臍の緒きつて初めての海外旅行であり、奉天市街も日本人が行つてから非常に開けたやうに聞いても居るし、同地の支部へも立寄つて見たいとも思つてゐる。丁度よい都合だ。そして貴下の話と云ふのは、どう云ふことですか」

唐國別「私は此大晦日の夜に聖師に書いて頂いた、

日地月合せて作る串團子星の胡麻かけ喰ふ王仁口

と云ふ半折の書を表装して商會の床の間にかけておいた所、河南督軍趙倜の軍事顧問をつとめてみた岡崎鐵首と云ふ日本人がやつて来て、その掛物に目をつけ、大變に喜び、こんな大きな事を書く人はよほど變つてゐる。この歌が大變氣に入つた。今私は張作霖の内意で裕東印刷所を開設しその技師長となつて勤めてゐるが、印刷所の開設された動機は、實に注意深い酔にも蒞弱にも行かない張作霖の大秘密に屬するもので、やがて雪解けともなれば奉直戦が再び起る形勢だから、その時に必要な軍票を三千萬圓ばかり印刷するためです。然し吾々は奉直戦などは如何でもいいです。日本の國威が上り滿蒙に流浪してゐる不逞鮮人を安氣に生活させてやりさへすればいいのです。犬養先生や頭山先生、内田先生、末永節その他の名士連と謀り肇國會と云ふ高麗國の建設を圖り、末永は東京方面での事務をとり、私は滿州に渡つて内密にその準備をやつてゐるのです。此際蒙古の大廣野を開拓し日本の大植民地を作つたら國家の爲になるだらうと思ひます。こんな大事業は吾々凡夫が何程よつても到底着手することも出来ない。そして最も人心を收攬するものは宗教より外ないと考へ、内地の既成宗教家の頭を説いたが、

何奴も此奴も口先ばかりで實行する勇氣のない糞坊主や偽キリストばかりだ。大谷光瑞でも内地では豪僧のやうに云はれてゐるが、南洋へ行つては失敗し、印度からは追拂はれ、本願寺を追出され、船を作つて天津と上海の間を往復してゐるが、それも在留日本人の一部に信用を保つて居る丈で、評判程の事もない憐れ至極の状態です。どうです唐國別さま、貴下は大本信徒の一人でもあり幹部の方でもあるやうですから、私の意圖を日出雄聖師に會つて相談しては呉れませぬか等と、いろいろの面白い計畫を話しました。さて聖師様、兔も角も今度渡支されたら水也商會に立寄つて鐵首に會つて貰へますまいか」

日出雄「ヤア兔も角も鐵首は面白い事を云ふ男だ。自分も實は紅卍字會へ行くと

はホンのつけたりだ。廣袤千里に連なる蒙古の大原野に一大王國を建設し度いと

思つてゐるのだ。乍然表面は紅卍字會、普天教行としておかう」

唐國別「鐵首も今のお言葉を聞いたら喜ぶでせう。蒙古の大原野に新王國を建設するについては、今から十年以前に七萬の精兵をつれて内外蒙古に進出し、庫倫を

ついでに一時驍名を馳せた盧占魁と云ふ大英雄が一度聖師に會見し、意見が合ふ

たら天下のために大活動をやつて貰ひ度いものだと渴望してゐます。大神の御經綸の一端を實行するには實に絶好の機會と思ひますが、聖師のお考へは如何でせうかな。

日出雄「盧占魁は蒙古の英雄、馬賊の巨頭と云ふ事は世間周知の事實だ。乍然大本の教主輔、しかも無抵抗主義を標榜して萬有愛の實行を天下に示さむとする自分としては、馬賊の巨頭と提携するのは考へ物だと思ふ。小膽なる大本信者の誤解を受け、教團の破壊者と睨まれるかも知れない。なるべくはそんな危険な方法を採らずに精神方面のみでやつて見ようと思ふ。第一馬賊と云ふ名が大變面白くない感じを與へるぢやないか」

(大正一四・八・一五 北村隆光筆録)

## 第五章 心の奥

日出雄は唐國別の談を聞いて暫く俯いて考へ込んだ。日出雄の心天に忽ち大光明が輝いた。滿州や蒙古に活動して居る馬賊といつても、決して一般人の考へて居るやうな兇惡亂暴の者計りでもあるまい。中古我國の元龜天正の頃の群雄が割據して居たやうなもので、規律整然たるものであらう。決して人の財寶を掠奪したり、殺人強姦などを行ふものではあるまい。兔に角徳を以て馴づけたなら、虎でも狼でも心の底より歸順するものだ。殊に蒙古の馬賊に至つては、弱者を助け狂暴なる者を誡め、社會の弱き人民を保護する任に當ると聞いて居る。政治の行届かない蒙古の廣野では馬賊も一つの政治的機關だ。今日滿州王をもつて自任して居る東三省の保安總司令である張作霖だつて、張宗昌だつて、其他の名ある督軍達は皆馬賊から出て居るのだ。これを考へても馬賊は決して日本の山賊や泥棒のやうなものではあるまい。一層のこと盧占魁と提携して蒙古に新疆に王國を建設し、日本魂の本領を世界に輝かすのも男子として面白い事業だ。併し馬賊といつても種々の種類があつて、掠奪のみを以て事とする小トルの團體もある。善惡正邪の混淆して居る世の中だ、天下の大事と思へば小さいことに齷齪して居る譯

には行かぬ。盧占魁の如き天下に驍名を馳せた馬賊の頭目は、決して人民を苦しめるやうなことはせないだらう。彼と宗教家とが提携したつて別に不都合はあるまい。大神業の御經綸に奉仕する一步としては止むを得ない今日の場合だ。廣大なる地域を有する蒙古に一大王國を建設すると云ふ計畫は、事の成否は別として、日本男子としては實に壯快極まる試みだ、宗教家だと云つて神前に拍手し祝詞のみを上げて居るが藝でもあるまい。萬有愛の主義からは是非決行して見よう。心境を一變し、宗教的に世界の統一を圖り地上に天國を建設する準備として先づ新王國を作り、東亞の聯盟を計るのが順序だらう。あゝ思へば實に壯快だ。腕が鳴り血が踊るやうだ。言語學の上から見ても、古事記の本文から見ても、蒙古は東亞の根元地であり、經綸地である。日本人は昔から、義勇の民が開國以來未だ一寸の地も外敵に侵されないと云つて自慢して居るものがあるが、併し吾々の祖先は蒙古軍の爲めに拭ふべからざる大國辱を受けて居るのだ。元寇の役はどうだつた。國內上下擧つて蒙古襲來の聲に震駭し恐怖し、其度を失ひ、畏多くも龜山上皇は身を以て國難に當らむことを岩清水八幡に祈願し給ふた結果、全國の各大社には

奇瑞續出して遂に伊勢の神風となり、蒙古は十萬の軍を西海の浪に沈めた事は元明史略其他の史實にも明記され、生命を全ふして歸り得たるもの僅に三人といふことだ。併し乍ら我國は是をもつて日本男子の武勇を誇る事は出来まい。日本を守りたまふ神明の加護と畏多くも龜山上皇の宸襟を惱まされたその結果である。日本は神國、神の守りたまふ國で、決して外敵の窺ふことの出来ない磯輪垣の秀津間の國、細矛千足の國と誇つて居るが、今日の日本の現状は外敵に對しさう樂觀して居られるだらうか、軍器の改良された今日では、少々の神風位で敵艦を覆すと云ふ事は到底不可能であらう。又そんな神頼み計りやつて居て實行せないならば、到底國を保つ事は出来ないだらう。扨て吾々の祖先が蒙古十萬の大軍に脅かされた末代の大國辱を回復し、建國の精神と國威をどうしても一度中外に發揚して我歴史の汚點を拭はねばなるまい。宗教的、平和的に蒙古を統一し、東亞聯盟實現の基礎を立て見たいものだ。自分は今日黑雲のかかつた、世人から疑を受けて居る身の上である。此際グツグツせず思ひ切つて、驚天動地の大活動をやつて見たいものだ。盧占魁に會つたらば屹度自分の意志を受け入れるであらう。自

分は今裁判の事件中だが辨護士の話によると、本問題は神靈問題だから二年や三年の中には到底解決がつくまいとのことだ。これの解決を待つて居ようものなら、我民族は日に月に窮地に陥るばかりだ。世界到る所排日問題は勃起し外交は殆ど孤立して居る。今の中に我同胞の爲に新植民地でも造つておかねば我同胞は遂に亡ぶより外はない。併し乍ら大本信徒にこんな事を云はふものならそれこそ大騒動だ。併し面白い、ひとつやつて見よう乗るか反るかぢや。元より身命を神に捧げた自分だと大覺悟を究めたのである。

大本は野火の燃え立つ如くなり風吹く度に擴がりてゆく  
この度の深き經綸は惟神只一息の人心なし  
神の世の審判に今や逢坂の人は知らずに日を送りつつ  
いつ迄も醜の曲神の荒びなば危ふからまし葦原の國  
世の中の移らふ状をながめては起つべき時の來るを悟る  
排他的既成宗教はあとにして開き行かなむ海の外まで

吹かば吹け醜の木枯強くともわれには春の備へこそあれ  
白妙の衣の袖をしばりつつ世を歎かな隠れたる身も  
思ひきや御國の爲に盡す身をあしさまに云ふ醜のたぶれら  
身も魂も囚へられたる吾なれど心は廣し天國の春  
機の緯織る身魂こそ苦しけれ一つ通せば一つ打たれつ  
神業をなすのが原の玉草は踏まれ蹂られ乍ら花咲く  
天地の神に仕へて日の御子に赤き心を盡し奉らむ  
身はよしや虎伏す野邊に果つるとも御國の爲に命惜まず  
故郷にのこせし母を思ふ間もなく盡す神國の爲  
月は今地平線下に潛みつつ世の黎明を待つぞ床しき  
惟神眞の神の定めてし人の出でずば國は危ふし  
花見むと出でしにあらず野の櫻吾衣手に香をな送りそ  
言靈の助け天照る日の本はすべての國を知らず神國  
天津日も只一つなり地の上も一つの王で治まりて行く

皆人の眠りにつける眞夜中にさめよと來鳴く山郭公  
郭公聲は御空に鳴きかれて月の影のみあとにふるへる  
國のため盡す谷間の眞人を雲井に告げよ山郭公  
心のみ誠の道にかなふとも行ひせずば神は守らじ  
言擧げの條は數々ありながら暗夜をおしのわれぞ甲斐なき  
君の爲御國の爲に眞心を盡して後は津見に問はれぬ  
吾を知る人こそ數多ありぬれど我魂を知る人は世になし  
西東南も北も天地も擔なうて立てる神の御柱  
世の爲に盡す心の數々を誰も白波の立ちさわぐなり  
現し世に生るも神の御心ぞまかるも神の恵とぞ知れ  
そよと吹く風にも聲のあるものを神の御聲の聞えざらめや  
夜な夜なに詣うであつき涙しぬ神座山の荒されし跡に  
わが涙こりては霖雨雪となり泉となりて御代を清めむ  
神の御名を世界に廣く現はして永久に生きなむ律に死すとも

いにしへ  
古のエスキリストも嘗めまじきその苦しみを吾に見る哉  
たらちね  
足乳根の老います母を偲びつつ出で行く吾は涙こぼるる  
ぬれぎぬ  
濡衣のひる由もなき悲しさに霧島山の火こそ戀しき  
つきひと  
月一つ御空にふるひ地に一人友なくふるふ吾ぞわびしき  
しりぞ  
退きも進みもならぬ今の世は神のみ獨り力なりけり

(大正一四・八・一五 加藤明子筆録)

## 第六章 出征の辭

たいしやうじふねんにぐわつじふににち  
大正十年二月十二日、  
いんれきしやうぐわついつかせいてんはくじつ  
陰曆正月五日晴天白日の空に上弦の月と、  
たいはくせい  
太白星は白晝  
さんぜん  
燦然として浪花の空に異様の光輝を放ち、  
てんち  
天地の變動を示してゐる。このひひでを  
おほさかし  
は大坂市の玄關口梅田驛頭に、  
たいしやうじふねんにちしんぶんしやちやう  
大正日々新聞社長として社務を總理してゐた。

此日は例の大本事件の勃發した日であつて、日出雄は同新聞社より京都府警察部へ招致され、次いで京都地方裁判所豫審判事の形式的取調を受けて京都監獄に投ぜられた。大本にとつて實に印象深い日であつた。此天空に於ける異様の現象は之に止まらず、下つて大正十三年二月十二日、而も同日の天空に橢圓形の月と太白星が白晝燦然と輝き出した。日出雄は天空を仰いで去る大正十年の二月十二日を追懷せずには居られなかつた。而も滿三ヶ年を経た同月同日の白晝に、天空に同様の異變あるは決して只事ではあるまい。愈々自分が神命を奉じ萬民救済の爲、人類愛實行の爲、天より我にその實行を促すものと考へたのである。これより彼は俄に渡支の決心を定め、今夜の中に出發せむことを數名の側近く侍する役員に告げた。あまり急激な彼の宣言に侍者は稍狼狽の氣味であつた。けれ共彼は神命を信じ、是非今夜出發せむと決心した上は、彼の平素のやり方に對し到底その考へをひるがへすことは出来ない事を知つてゐた。

和知川の清流、竝木の松を逆に映し、魚は松樹の枝に躍つてゐる。颯々たる松風の音、水面に魚鱗の波をただよはしてゐる。その傍に悄然として建てる祥雲閣

は、彼が病軀を横へて十萬枚の原稿を口述したる靈界物語の發祥地であつた。

此日彼は俄に旅行の決心を定め、祥雲閣の主人中野岩太氏に別れを告ぐる爲、二三の從者と共に訪ねて來た。東京より來合せてゐた佐藤六合雄、米倉嘉兵衛、米倉範治を初め、十數人の熱心なる信者が期せずして集つて來た。此時彼は神示の經綸實行の一步を進むべく蒙古人の決心を打明け、且つ一場の演説を試みた。彼の演説、

「神縁に依つて私が茲に神の經綸の一端に奉仕し、今晚を期して愈々渡支渡蒙を執行せむとするに當り、招かずしてお集りになつた諸氏は必ずや神界の深き經綸の絲に引かれて、お出になつた方々と固く信じます。我大本は既成宗教の如く、現界を厭離穢土となし未來の天國や極樂淨土を希求するのみの宗教ではありません。國祖の神の仁慈無限なる神勅に依り、日本神州の民と生れたる我々皇國の臣民は、此の尊き大神様の御神示を拜し、上は御一人に對し奉り、下は同胞の平和と幸福の爲めのみならず、東亞諸國竝に世界の平和と幸福を來すべき神業に奉仕せなくてはならない責任を持つてゐるのは大本信者でありませう。御神示にある

通り「大正十年の節分が済みたら、變性女子の身魂を神が人の行かない處に連れ行くぞよ」とお示しになつて居ることは、皆さま御承知のことと思ひます。その神示は毫末の間違ひもなく、二月十二日私は御承知の京都監獄に投ぜられたのでありました。そして又本回も節分祭のすみた十二日に、人のよう行かない處へ行かねばならぬ神の使命が下つて來たやうに考へられてなりませぬ。私は日本建國の大精神を天下に明にし、萬世一系の皇室の尊嚴無比なる事を治く天下に示し、且つ日本の建國の精神は征伐に非ず、侵略に非ず、善言美詞の言靈を以て萬國の民を神の大道に言向和すにある事を固く信じます。凡て世界の人民を治むるは武力や智力では到底駄目です。結局は精神的結合の要素たる、凡ての舊慣に囚はれざる新宗教の力に依るより外はないと信じます。

つらつら現今の我國情を考へて見まするに、我國の人口は年々七十萬宛の増加を以て進みつつあると統計學者は云つて居ります。此割合で進んで行けば大正三十一年には七千七百萬の同胞となり、同じく五十一年には一億餘萬人に達すると云ふ計算になります。兔に角我國人口の増加は年々の事實の證明する處であつて、

これに要する食糧品たる米麥が、現に年々七八十萬石の不足を告げつつある事も亦事實である以上、此人口と食糧との不均衡は、我國存立の上に於て一問題たらねばなりませぬ。國內現在の未墾地を開拓し耕地の整理を徹底的に斷行すれば、約二百萬町歩の水田火田が得られ、二千萬石の米麥の増収が出来るとの説もありますが、乍然此開墾や整理は何時になつたら完成されるでせうか。假令我官民が熱誠努力の結果、幾十年かの後にそれが完成されるものとしても、その時には人口は既に一億以上になつてゐる筈であります。此の人口と食糧との均衡が依然として保たれるでせうか。國家の前途を案ずれば百千年の長計を前途とせねばならぬ。一時の糊塗策は決して國家永遠の存立を保障することは出来得ないでせう。乍然我國の植民政策はかかる基調から發足してゐるやうであります。殊に我國國家將來の存立及發展に就ては單に米麥が満足に得らるのみではすまされませぬ。日進月歩の世界の前途には、鋼鐵や綿類や毛布皮革等を主として幾多の物資が無限に需要さるる事は、今日に於ても明なる題目であるのに、我國に於ては之を將來に充實せしむべき安全なる政策が立つて居りますか、實に思ふて見れば心細い次第

であります。一朝有事の時に、海外からその供給を断たれたならば、我國は如何なる方法を以てその需要を充たす事が出来やうか、思うて此處に至れば、實に慄然たらざるを得ないのであります。我國爲政の局に當る人々は國家の前途を焦慮した結果、植民政策なるものを立て、過剰の人口を他に移して、その移住者の生活の安定を得せしめむとして居ります。

先づ第一に合衆國の如き異人種憎惡に富んでゐる國土の外、メキシコや、南米や、南洋諸島を目的としてゐるやうですが、國家萬年の長計からすれば、此等の遠隔の諸地方へ農耕移民を送つた計りでは濟みますまい。我接境の比隣には國家としての支那や露西亞があり、相互の關係は善にもあれ、惡にもあれ到底離るべからざるものがあります。又我領土内には朝鮮あり、その將來については所謂識者と云はるる人々が不斷に頭をなやましてゐるやうです。我皇國がその永遠存立を安全ならしめ、關係諸國と共に共存共榮の福利を樂しまむとすれば、是非とも之に添ふべき一大國策を樹立せなくてはなりません。所謂帝國の滿蒙政策は即ち此目的精神から立てられたものであります。蓋し滿蒙の地はその位置が

支那本部と露領シベリアとの中間にはさまり、我朝鮮とは鴨綠の水を隔てて相連つてゐるのみならず、あらゆる産業の資源備はらざるなく、開發の前途は實に春風洋々の感があり、而も近世の歴史的關係は必然的に我皇國がその開發任務を負はねばならぬやうになつたのであります。故に今我國が上下一致努力して既定の開發策を徹底せしむるには、我對支政策全部の基調を滿蒙におくことにより、行詰つた日支關係の現状を相互的に善導し得ると共に、將來永遠の圓滿策を樹立する事が出来るでせう。又ロシアとの交渉の中繼點とする事が出来るでせう。鮮人多數に生活の安定を得せしめて、朝鮮統治上の有力なる補助とする事も出来るでせう。人口食糧調節の上にも實に偉大なる效驗をなし得らるでせう。又我重要物資の供給地たらしむる事も出来るでせう。我皇國國防の第一線要地たらしむる事も出来るでせう。乍然滿蒙の經營は議論と實地は大變に徑庭がある。如何なる有識者の徹底せる立策と雖も、肝腎要のその人を得ざれば到底完成するものではない。渺々として天に連る滿蒙の大沙漠、此處には無限の富源が天地開闢の當初より委棄されてある。此の蒙古の大平原こそ天が我國に與へたる唯一の賜物でな

ければならぬ。

我國の爲政者が滿蒙開發策として滿鐵を敷設し、鄭家屯や、洮南府や、パイ  
タラの東蒙古の一部に少し計り手をつけてある位では、到底此開發策は物にはな  
らないであらう。どうしても我皇國存立の爲、東亞安全の爲、世界平和の爲に、  
我國が率先して天與の大蒙古を開拓せなくてはならない位置にある事を私は固く  
信じます。そしてその目的を達するには、舊慣に囚はれざる新宗教の宣傳を以て  
第一の手段方法と考へるのであります。我國に於ける既成宗教の現状を見れば、  
宗教の發展どころか、現状維持に汲々たる有様ではありませぬ乎。氣息奄々とし  
て瀕死の境にある我國の既成宗教が、如何にして此大事業に着手するの餘裕があ  
りませう。又一人の英雄的宗教家の輩出せむとする氣配もなき、我國の瀕死的宗  
教に頼るの愚なる事は言をまたないであります。故に私は日本人口の増加に伴  
ひ發生する生活の不安定を憂慮し、朝鮮に於ける同胞の安危を憂ひ、次いで東亞  
の動亂の發生せむ事を恐るるのあまり、愈々神勅を奉じて徒手空拳二三の同志と  
共に長途の旅に上らむとするのであります。私は御承知の通り支那語も蒙古語も

皆目知りませぬ。さうして蒙古は我國の面積に比べて殆ど十六倍の面積があり、その民は慄悍にして支那民衆の古來恐怖する獐猛の民である。加ふるに馬賊の横行甚しく、旅人を掠め生命を奪ひ、日支人の奥地に入るものは一人の生還者もな  
いと傳へられてゐる蒙古の地に、大膽と云はふか、無謀と云はふか、殆ど夢に等しい經綸を胸に描いて出て行く私としては、實に名状すべからざる感慨に打たれるのであります。然し乍ら私は天地創造の神を信じます。天下萬民の爲に十字架を負ひあらゆる艱難を嘗め、生死の境に出入することを寧ろ本懐とするものであります。今の時に於て滿蒙開發の實行に着手せなくては、金甌無缺の我皇國も前途甚だ心細い事になるであらうと憂慮に堪へないのであります。吾々は神の國に生れ、神の國の粟を喰み、神の國の大君に仕へ、神に選ばれたる民として、今日の世界の現状を坐視するに忍びないのであります。どうか今此の席にお集りになつた神縁深き諸氏は、今回の私の遠征の首途に對し御諒解あらむことを希望致します。云々

と述べ終り、記念の爲とて祥雲閣の襖に左の如き文章ともつかず、詩ともつか

いやうな文字を書いた。

推倒全身之智勇。開拓萬里之荒原。神龍雖潛淵。曷池中物。天運茲循環來而。代  
にははりてこうげふをじゆりつす。ああほくもうのせんきやう。さんがさうもくせいさうをこらし。くわんこしてわがしんぐんのいたるをたいばうす。えいゆう  
天地樹立鴻業。嗚呼北蒙之仙境。山河草木凝盛裝。歡呼而待望我神軍到矣。英雄  
のしんじまたまたさうくわいにあらずや。之心事亦々非壯快哉。

又彼は發車の間際まで、嬉々として快活に東亞の經綸を談じつつ頻りに筆紙を  
またかれ。はつしや。まぎは。きき。くわいくわつ。とうあ。けいりん。だん。しき。ひつし  
動かして居た。傍より伺ふ者の目には、寸時の後に海外萬里の未開國に向つて出  
うご。あ。かたはら。うかが。もの。め。すんじ。のち。かいぐわいばんり。みかいこく。むか。しゆつ  
發する人の態度とは見えなかつた。彼が出發の際に詠んだ澤山な歌がある。その  
ぱつ。ひと。たいど。み。かれ。しゆつぱう。さい。よ。たくさん。うた。あ。その  
中の一書を左に紹介しやう。  
なか。いつしゆ。さ。せうかい

日地月星の團子も食ひ飽きて今や宇宙の天海を呑む

ここに至つて彼の心理状態の益々異状なるに驚かざるを得ない。神か、魔か、

人か、誇大妄想狂か、二重人格者か、將又變態心理の極地に達せる狂人か、殆ど評するの言葉も出ない。

(大正一四・八・一五 加藤明子筆録)

## 第七章 奉天の夕

東魚來つて西海を呑む。日西天に没すること三百七十餘日、西鳥來りて東魚を喰む。

右の言葉は、聖徳太子の當初百王治天の安危を鑑考されて我が日本一州の未來記を書きおかれたのだと稱せられ、我國古來聖哲が千古の疑問として此解決に苦みて居たのである。日出雄は右の言葉に對し、我國家の前途に横たはれる或物を認めて、之が對策を講ぜねばならぬことを深く慮つた。

彼は眞澄別と唯二人、二月十三日午前三時二十八分聖地發列車上の人となつた。

驛に見送るものは湯淺研三、奥村某の二人のみであつた。いつも彼が旅行には大本の役員信徒數十人、或は數百人の送り迎へのあるのを常として居た。然るに此日は唯二人の信徒に送られて行つた事は、此計畫の暫時他に漏れむ事を躊躇したからであらう。列車は容赦なく龜岡驛に着いた。前日から龜岡の大道場瑞祥閣に出張し諸般の準備を調べて居た名田彦、守高の兩氏は、此處に搭乘して同行四人相携へて京都驛に着いた。而して米倉嘉兵衛、米倉範治が列車に乗込んで居た。京都驛に着いて朝飯を喫し、吹雪に曝されて一時間餘り西行列車を待つた。茲には唐國別夫妻が先着して居た。各望遠鏡を一個宛携帯し、手荷物は大トランクに納め、茲に一行五人は唐國別夫人や、米倉嘉兵衛、範治に袂を分ち、汽笛の聲も勇ましく西下する事となつた。

十三日午後八時關釜連絡船昌慶丸に搭乘した。天地の神明はこの一行の壯圖を擁護するものの如く、關釜間の航海は極めて平穩であつた。翌十四日午前八時釜山港に無事上陸し、十時發朝鮮鐵道の一等室に納まりかへつて奉天に向ふ事となつた。車中には本莊少將及び日出雄、眞澄別、唐國別の三人であつた。而して名

田彦、守高の兩人は二等室の客となつた。二月十五日安東縣の税關も無事通過して、午後六時三十分奉天平安通りの水也商會に入る事を得た。彼が車中に於ける和歌の一二首を紹介する。

蓬來の島をやうやく立出でて見なれぬ國の旅をなすかな

水也商會に到着すると、先着の隆光彦、萩原敏明及び數名の店員が停車場に出迎へた。待設けて居た滿州浪人の岡崎鐵首や佐々木彌市、大倉伍一の三名と、揚萃廷と云ふ人が訪ねて來た。三人は日出雄に對し、先づ初對面の挨拶を了はり、十年の知己の如き打ち解けた態度にて、滿蒙の現状や、肇國會の主意や蒙古事情などを滔々と辨じ立てたのである。

岡崎「私は日露戰爭に従軍したきり支那に留まつて、第一革命から引續き東亞の爲に、革命事業にのみ熱中して居る者です。併し支那人は個人としては生活して行くだけの力は持つて居るが、國家とか國體とかとして生存する資質が具はつて

居りませぬ。それ故に幾度革命を行つても、骨折損の疲勞儲けとなつて了ひ、實效を收むる事が出来ないであります。支那と云ふ國は頭から日本を馬鹿にして居る、さうして自分に利益のある事業と見れば喉を鳴らして飛びつくが、其利益と相反する場合は義理も人情も捨てて直ぐ離れ去つて了ひます。併しながら日本と支那は唇齒輔車の關係があり、何うしても互に手を携へて國運の發展を圖らねばならないのです。日本の爲政者の中では日支親善とか、共存共榮とか種々の支那の御機嫌取りの文句を竝べて居るものがありますが、支那人は却つて此言葉に對し嫌忌の情を抱き且つ侮辱するやうな傾向を持つて居ります。何うしても支那人の目を醒まし、日本と相提携して行かねばならぬと云ふ理由を徹底的に悟らしむるには、普通の計畫では駄目です。東三省の張作霖だつて、直隸の呉佩孚だつて、表に親日派を標榜して居るが、其内心は決して然うではない、政治上の便宜の爲に或時機迄親日を装ふて居るのです。現に張作霖の顧問となつて居る日本人も澤山ありますが、肝腎の相談事は日本人以外の顧問と密議し、義理一遍の報告を日本の顧問にする位のものではありません。是を見ても癢に觸るのは支那の日本に

對する遣り方でありませう。

それだから支那人を心底より我帝國に倚らしむるには、彼の最も難治として居る蒙古に於て一大新王國を建設し日本の威力を現はしてからでなくては、何時までかかつて支那は日本に信賴しないだらうと思ひます。

それ故自分等は犬養先生や、頭山先生、内田先生、末永節等の國士と計つて、肇國會なるものを創立し、肇國會の徽章を二十萬個許り朝鮮、滿州、西比利亞方面にバラ撒いて大に畫策して居るのです。大體日本政府殊に外務省の腰が弱いものだから、到底吾々の計畫は成功しない。そこで何うしても東亞の聯盟を計るには蒙古に根據を置かねばならぬ。蒙古は最も古い國で喇嘛教の盛んな土地です。而して蒙古人は支那人や露西亞人を非常に嫌つて居る。彼等は日本人と何うかして完全な提携をなし、殆んど亡國に瀕せる蒙古を再興せむと焦慮して居るのです。吾々滿州浪人の生命とする所は、蒙古の大平野に新王國を建設するにあるのです。慄悍なる蒙古人を心服させるには何うしても宗教で無くては駄目です。何うか先生濟南行きも結構でせうが、それは後に廻して兎も角蒙古の一部なりとも探檢し

て貰ふ譯には行きましますまいか。決して之は一個人の爲めではない、我同胞一般の安全の爲め、東亞の民衆の爲めですから」

日出雄「お説を承はつて私は益々入蒙の決心が固まつたやうです。併し乍ら五大教道院紅卍字會や、悟善社から迎ひに來て居ますので、隆光彦さんに一歩先へ行つて貰ひ、準備の整つた上先づ北京濟南に出張したいのです。而して何うしても神戸道院の開院式には歸らなくてはなりません。僅か半月斗りの間に蒙古にも行き、北京、濟南にも行くと云ふ事は到底出來ません。今回は蒙古のお話を聞いただけに止めておいて、最初の目的たる北京、濟南に旅行したいと思ひます」

隆光彦「先生、是非北京濟南の方から片附けて貰ひたいものです。侯延爽に先生のお出になる事を、前以て發電しておきました、此處で貴方を取り逃がし蒙古にやつては、紅卍字會の諸氏に對し私の顔が立ちませぬから、蒙古は後に廻して貰ひたいものです。道院の開院式には先生が歸つて居られねば遠近の信者が非常に力を落しますから」

日出雄「それもさうだな。乂示によつて神戸道院の責任統掌に任ぜられて居るの

だから、此方を後にする事は出来ないだらう

岡崎「それもさうでせうが、北村さまは副統掌ぢやありませんか、統掌に差支の

あつた時務を代辨するための副統掌でせう。國家の一大事には代へられますま

い、まげて蒙古人を願ひたいのです。そして蒙古の英雄、馬賊の大頭目たる盧占

魁が、もう既に既に先生のお出を待つて居ますから、是非共今晚の中に面會して

頂きたいものです。此處に居られる揚萃廷氏は舊は某縣の知事を勤めて居た人で、

今は某新聞記者です。此人が盧占魁の代理として見えたのですから、盧氏の心も

酌み取つて枉げて入蒙して頂きたいものです

日出雄「盧は蒙古の英雄だと云ふ事は豫ねて聞いて居ますが、滿蒙に於ける盧の

勢力は何んなものでせうか

岡崎「盧の位置は日本人で云へば伊藤博文の様な名望家です。そして蒙古の王族

や、住民や、馬賊などは盧占魁を救世主の如く尊敬して居ます。子供が泣いた時、

盧が來ると云へば子供が泣きやむと云ふ如き勢力で、澤山の部下を有し、其部下

は盧の爲めには一つよりない命を捨てても構はないと云ふ位ですから、彼をお使

ひになつて、マホメツト式に蒙古に大本王國を建設し、帝國の新植民地を拓く事に努力せられたならば屹度成功するでせう。肇國會に於ても此事業に付いては全力を傾注して居ますが、何分中堅となつて蒙古に進出する人物が無いので困つて居るのです」

日出雄「私は單なる宗教家であつて政治に疎く、且つ軍隊に關する知識はゼロですから駄目だらうと思ひます」

岡崎「先生そんな御心配はいりません。何と云つても數萬の部下を有する蒙古の英雄を従がへて行くのですから、屹度目的は成就するでせう。先づ大庫倫を根據とし新疆を手に入れ赤軍を言向け和はすには、盧占魁位適當な人物はありますまい。ナア佐々木、大倉、さうぢやないか」

と二人の滿州浪人を顧みた。

佐々木、大倉の兩人は、

「成程君の云ふ通りだ。是非共先生と盧占魁との提携を願ひたいものだ。世間の奴は吾々が先生と共に行動するのを見て、滿州浪人が又日本の宗教家を喰物にし

よると云ふ連中があるかも知れないが、吾々は決して左様な人物ではありませぬ。其處等にゴロついて居る滿州ゴロとは些し違つた考へを持つて居ます。何うか岡崎の説に賛成して貰へますまいか」

日出雄は暫く考へた後、面を輝かし乍ら、

「實は私も日本の官憲や有識階級及び日本人の大多數から、大本事件の突發によつて大なる誤解を受け且つ壓迫を加へられて居るのです。夫れ故是非共私は此際一つ國家の爲めになる大事業を完成して、日頃主張せる愛神、勤王、報國の至誠を天下に發表し、今迄の疑惑を解くべき必要に迫られて居ります。現代の内憂外患交々到り、國難來の聲喧びすしき我皇國の爲め、東亞の平和的聯盟を實現する爲め、神様の御經綸を遂行せなくてはならないのです。今の時に當つて帝國の爲め、一身一家を賭して大經綸を行はねば、我國家の前途は實に憂ふべき運命に見舞はれはしないかと憂慮して居るのです。兔に角其盧占魁の宅に參り同氏の意見を聞いた上で決定する事に致しませう」

一同は同夜八時半二臺の自動車を連ねて奉天城小南邊門外、盧の公館へと馳せ

つけた。

(大正一四・八・一五 筆録)

第二篇 奉天より洮南へ

第八章 聖雄と英雄

寒月<sup>かんげつ</sup> 沔<sup>つ</sup> 渡<sup>さ</sup> り、 烈風<sup>れつふう</sup> 吹<sup>ふ</sup> 荒<sup>あ</sup> ぶ 奉天<sup>ほうてん</sup> 日<sup>に</sup> 本<sup>ほん</sup> 租界<sup>そがい</sup> を 離<sup>はな</sup> れて 二<sup>に</sup> 臺<sup>たい</sup> の 自<sup>じ</sup> 動<sup>どう</sup> 車<sup>しゃ</sup> は、 まつしぐらに 東三省<sup>とうさんしやう</sup> 陸軍<sup>りくぐん</sup> 中將<sup>ちゆうじやう</sup> 盧占魁<sup>ろせんくわい</sup> が 公館<sup>こうくわん</sup> に 着<sup>つ</sup> いた。 一方<sup>いつぱう</sup> は 大本<sup>おほもと</sup> の 前<sup>ぜん</sup> 教<sup>けう</sup> 主<sup>しゆ</sup> 輔<sup>ほ</sup> 大怪物<sup>だいくわいぶつ</sup> と 仇名<sup>あだな</sup> を と った 源<sup>みなもと</sup> 日<sup>ひ</sup> 出<sup>で</sup> 雄<sup>を</sup>、 一方<sup>いつぱう</sup> は 陸軍<sup>りくぐん</sup> 中將<sup>ちゆうじやう</sup> で 蒙<sup>もう</sup> 古<sup>こ</sup> の 英<sup>えい</sup> 雄<sup>いゆう</sup>、 馬賊<sup>ばぞく</sup> の 大<sup>だい</sup> 巨<sup>きよ</sup> 頭<sup>とう</sup> 盧占魁<sup>ろせんくわい</sup> と の 會<sup>くわい</sup> 見<sup>けん</sup> で あ る。 眞<sup>ます</sup> 澄<sup>すみ</sup> 別<sup>わけ</sup>、 岡崎<sup>おかざき</sup> 鐵<sup>てつ</sup> 首<sup>しゆ</sup>、 唐<sup>からく</sup> 國<sup>くに</sup> 別<sup>わけ</sup>、 佐<sup>さ</sup> 々<sup>さ</sup> 木<sup>き</sup> 彌<sup>や</sup> 市<sup>いち</sup>、 大<sup>おほ</sup> 倉<sup>くら</sup> 伍<sup>ご</sup> 一<sup>いち</sup>、 揚<sup>やう</sup> 萃<sup>すゐ</sup> 廷<sup>てい</sup>、 守<sup>もり</sup> 高<sup>たか</sup>、 名<sup>な</sup> 田<sup>た</sup> 彦<sup>ひこ</sup>

の面々は、盧氏の公館にストーブを中に置き、圓形の座を作つて椅子に腰打掛け、蒙古進出の英雄的協議に耽つた。佐々木は支那語を能くするので、彼が日出雄と盧との通辨を勤めた。

佐々木は盧占魁を指さし、

「先生、此方が盧占魁さんです」

日出雄「成程、一見しても目元の凜とした英雄的人物だ。此男ならば何も云ふに

及ばぬ、一切萬事を委任せやう。眞澄別さん、あなた何う考へますか」

と眞澄別を顧みた。眞澄別は微笑し乍ら「宜しからう」と答へた。盧は日出雄に

向つて云ふ。

「私は十年前に七萬の精兵を引率して、大庫倫市を占領しました。其時は二十九歳でした。それから新疆を取り雲南迄活動しました。それから奉直戦争にも參加した事もあります。私が上海にゐる時孫逸仙に會ひ、先生の御高名を承はり、機會があらば御面會を願ひたいと常に憧憬して居りましたが、機縁が熟したと見えて、今日拙宅に於て先生に面會する事を得たのは、私に取つては光榮の至りです。

どうか私をあなたの下に使つて下さい。屹度貴方の目的に叶ふべく活動をしてお目に掛けるでせう」

日出雄「相互に協心戮力、東亞存立と開發の爲に盡しませう」

二人の應答は之にて濟んだのである。宗教界の英雄と馬賊界の英雄とが肝膽相照して空前絶後の大業を企圖したのは、實に小説的趣味を帯びて居るやうだ。

日出雄と守高、通譯の王元祺は盧氏の公館に宿泊する事となり、其他の人々は水也商會其他を指して歸つて行く。正月十一日の月光は西の空に傾いてゐる。

二月十六日盧の公館に於て内外蒙古の救援軍組織に付き、志士の會合があつた。午後八時頃唐國別、眞澄別其他の志士は會議の大略を報じて來た。其會議の結果は、先づ張作霖の諒解を得ること、武器を購入する事及び大本喇嘛教を創立し、日地月星の教旗を翻へして日出雄は達賴喇嘛となり、眞澄別は班善喇嘛となり、盧占魁を従へて蒙古に進入する事であつた。

元來蒙古は支那の屬邦である。そして一百六名の蒙古王は北京に參勤交代を行つてゐる。日本人が支那の領地に日本宗教を開く事は條約上許されてゐない。併

しながら彼は支那の新宗教五大教の高級宣傳使である。それ故彼が蒙古に宗教を  
宣布するのは公然の權利であつた。日本は佛敎家や神道家が支那に渡つて布敎宣  
傳をやつて居る者も澤山あるが、それは在留日本人に限られてゐる。支那人に宗  
敎を宣傳する事は許されてゐない。そして日本在留民の一部に宗教を吹込んで  
る位が關の山である。彼日出雄は五大教の宣傳使たるを以て容易く宗教宣布をな  
す事を得る地位にあつたのは、今回の企に對して最も好都合であつた。協議の結  
果盧占魁の命に依つて、揚萃廷は喇嘛服や附屬品を調製すべく、急遽北京に赴い  
た。日本人井上兼吉は盧占魁等の命に依つて、哥老會の殘黨揚成業其他の大頭株  
に對し、盧氏が擧兵入蒙の報告を兼ね應援を求むべく、綏遠ならびに歸化城方面  
へと出て行つた。揚成業は哥老會の大頭株であつて、一萬七八千の部下を有し、  
盧の今回の壯擧に對し極力後援せむ事を誓つたのである。  
有志は蒙古進出の準備の爲東奔西走し、北京に走る者、蒙古に使用する者、日本  
に歸る者など大活氣が湧いて來た。越えて二月二十八日民國十三年正月廿四日、  
愈々東三省保安總司令張作霖より、盧占魁將軍に對し、内外蒙古出征の命が下つ

て来た。同志の面々は欣喜雀躍して今更の如く早速諸般の準備に着手せむと揚々として四方に飛んだ。軍隊を十個旅團となし、日地月星を染抜いたる大本更始會の徽章を旗印となし、それに第一旅團より第十旅團迄の刺繡を施したる軍旗や司令旗を誂へる事となつた。そして大本喇嘛教旗として日地月星を染抜いた文字無し神旗も共に調製する事と定めたのである。何れも意氣天を衝き已に滿蒙の天地を併吞して了つた様な慨があつた。彼源日出雄が盧の公館に滞在中、試に作つた詩がある。此詩は彼の計畫の一部を現はして居る如うだから、左に摘載しておかう。

天時地利得人和

今丈夫救民立霸

是宇宙神聖之命

義軍嚮處若破竹

王仁有一萬精兵  
鳴盛哉神軍陣形

樹仁義旗進故州  
山河草木靡威風

防寒旅裝漸調了  
神兵猛虎破竹勢

奧蒙荒原將跋涉  
旗鼓堂々進庫府

內外蒙古惟神州  
勿躊躇蒙古丈夫

正義軍旅有天佑  
勝利都城在庫府

山河千里奉天空  
神英雄連馬爲出陣

日月星辰同蜻州  
蒙古荒原靡英風

神が表に現はれて  
高天原より降り来て  
神馬に鞭ち進み行く  
進めよ進めいざ進め  
神に叶ひし汝等の  
山河草木ことごとく

善惡正邪を立別ける  
寒風荒ぶ荒野原  
仁義の軍に敵は無し  
神は汝と俱に在り  
勇氣は天地に充滿し  
靡き伏すなり神軍に。

仁義の旗を押立てて

進む吾等は神軍ぞ

來れよ來れ皆來れ

故國に仇なす曲神を

千里の外に追散らし

祖先の造りし神州を

神の稜威に回復し

都を中央に奠めつつ

上は活佛諸王より

下蒼生に至る迄

救はむ爲めの此軍

神は吾等と俱にあり

人は神の子神の宮

神に従ひ進む身は

如何なる曲も障らむや

進めよ進めいざ進め

仁義の軍に敵はなし。

路は三千六百里 奉天城を後にして  
王仁の率ゐる義勇軍 獅子奮迅の勢で  
悍馬に鞭ち進み行く。

我は神軍王天龍 皇天皇帝の勅を受け  
獅子奮迅の勢で 仁義の軍を守りつつ  
神のまにまに進み行く。

道は九千八百里 奉天城をあとにして  
一萬有餘の神卒は 轡を竝べて進み行く

寒風烈しき外蒙地

如何なる敵の來る共

我には神の守護あり

進めよ進め快男兒

勇めよ勇め神軍士。

日出雄は大本喇嘛教の經文を、盧公館内に於て神示に依り認めた。

彌勒如來精靈下生印度靈鷲山成長顯現東瀛天教山將以五拾貳歲對衆生說明苦集滅道開示道法禮節再臨而顯現佛緣深蒙古爲達賴喇嘛濟度普一切衆生年將五拾四歲。

ヒマラヤの山より降り靈の本に育ちて今や蒙古に現はる

三柱の御子を引連れ降りたる達賴は彌勒の下生なりけり

興安嶺山秀生み出す瑞御靈蒙古に再び現はれにけり

観世音最勝妙智大如來救世の爲に達頼と化現す

掌中に五大天紋皆流紋固く握りて降る救世主

基督の聖痕迄も手に印し天降りたる救世の活佛

神素盞鳴尊の聖靈、萬有愛護の爲め大八洲彦命と顯現し、更に化生して釋迦如來と成り、印度に降臨し、再び昇天して其聖靈蒙古興安嶺に降り、瑞靈化生の肉體に宿り、地教山に於て佛果を修了し、蜻州出生の肉體を藉りて、高熊山に現はれ、衆生を救ふ。時に年齒將に二十有八歳なり。二十九歳の秋九月八日更に聖地桶伏山に坤金神豊國主命と現はれ、天教山に修して観世音菩薩木花姫命と現じ、五拾貳歳を以て伊都能賣御魂（彌勒最勝妙如來）となり、普く衆生濟度の爲め更に蒙古に降り、活佛として、萬有愛護の誓願を成就し、五六七の神世を建設す。

南無彌勒最勝妙如來謹請再拜

瑞靈貳拾八歳にして成道し、日州靈鷲山に顯現し、三拾歳にして彌仙山に再臨し、三十三相木花咲耶姫と現じ、天教山の秀靈と現じ最勝妙如來として、五拾貳歳圓山にて苦集滅道を説き道法禮節を開示す。教章將に三千三百三十三章也。五拾四歳佛縁最も深き蒙古に顯現し、現代佛法の邪曲を正し、眞正の佛敎を樹立し、普く一切の衆生をして天國淨土に安住せしむ、阿難尊者其他の佛弟子の精靈隨從す。將に五六七の祥代完成萬民和樂の大本なり。

惟神靈幸倍坐世

南無最勝妙如來

斯かる大活劇の脚色最中に日出雄は優美なる詩句に筆を動かす餘裕を綽々として有つて居た。

静かなる夜

静かな夜なり  
メリメリと

氷の解くる音に  
暖い春が流れる

あゝ何といふ  
嬉しい音だらう

花笑ひ  
蝶舞ふ

天國浄土の  
出現も

やがて近いだらう。

渤海灣の氷  
日々に解けて

海神の奏づる  
神祕の曲

浪の中から  
長閑に聞える

あゝ嬉しい  
勇ましい

春の曲  
陽炎が静に燃える。

私わたくしの昨今さくこん

私わたしの脳裡なうりの 暗黒あんこくから明あかるみへ  
勇いさましく雄々ををしく 煙けむりの様やうな  
期待きたいが流ながれて ぐるぐる廻まはる  
走馬燈そうまつとうのやうに 聖地せいち母上ははうへつまこ妻子  
弟妹ていまい愛兒あいじ 數多あまたの信徒しんと  
あゝそれは 私わたしの過去くわこの斷片だんぺんだ  
半世はんせいの倂おもかげだ 現世げんせの縮圖しゆくづだ  
さて今日けふから 張はり替かへる  
走馬燈そうまつとうは 隨分ずぶん世界せかいの  
見物みものだらう。

(大正一四・八 筆録)

第九章 司令公館

蒙古の英雄盧中將の公館には源日出雄、守高、支那語の通譯王元祺の三名が日夜立籠り、盧の副官溫長興、何全英、秦宣、盧重廷の幹部連が日出雄の接待役として、盧の命に依つて懇切なる忠勤振りを發揮してゐた。眞澄別や其他の滿州浪人連は、水也商會其他を策源地として種々の協議をこらし、張作霖の諒解を求むる事に奔走してゐた。日出雄は日々訪ね來る支那の軍人に對し、通譯を介して神の道を説き、難病に苦しめる人等を救ふてゐた。注意深い盧占魁は稍迷信に深い傾きがあり、日々三回計り一厘錢を六枚掌にのせて素人流の易占をやつて、其吉凶によりて自分の行動を決定するのだから、何事にも緩慢たるを免れなかつた。日本側の同志が首を鳩めて定めておいた事でも、易占が面白くないと彼盧占魁は、一も二もなく否認して採用しない。之には一同も大變に迷惑を感じてゐた。最後の解決は日出雄の斷定によるより道はなかつた。

日出雄は支那人の近侍者や、日本側に一夕支那服を調べて之を着用せしめ、姓

名も支那風に變へてしまつた。日出雄は王文祥、眞澄別は王文眞、守高は王守高、名田彦は趙徹、岡崎は侯成勳、大倉は石大良、萩原は王敏明、唐國別は王天海、佐々木は王昌輝等と改名し、支那人に化け濟まして蒙古人を決行する準備に取掛つた。盧占魁は日出雄が支那服を誂へた時、ソツと被服商の主人に云ひ含め、支那にて有名なる觀相學者を呼んで來て古來傳説にある救世主の資格の有無を調べむため、日出雄の骨格や容貌や、目、口、鼻、耳等の形から胸のまはり、手足の長短等から、指の節々、指紋等に至る迄を仔細に調べさせた結果、所謂三十三相を具備した天來の救世主だと云つた觀相家の説に、隨喜の涙をこぼし、愈々蒙古王國建設の眞柱と仰ぐに至つたのである。かかる注意の下に盧占魁が日出雄の身體を調べてゐるに拘らず、日出雄は索倫山の本營に行つて盧占魁が自白するまで、そんな事とは氣が付かなかつたのである。觀相者は特に日出雄の掌中の四天紋と指頭の皆流紋を見て左の如き斷定を下した。

### 掌中四天紋 II 乾爲天

大哉乾元萬物資始乃統天雲行雨施品物流形大明終始六位時成時、時乘六龍以御天

乾道變化各正性命保合太和乃利貞出庶物萬國咸寧。

指紋皆流 坤爲地

至哉坤元萬物資生乃順承天、坤厚載物德合无疆、含弘光大品物亨牡馬地類行地无疆柔順利貞君子攸行、光迷失道、後順得常西南得明乃與類行東北喪明乃終有慶安貞之吉應地无疆。

盧占魁は更に日出雄の掌中に現はれたるキリストが十字架上に於ける釘の聖痕や、背に印せるオリオン星座の形をなせる黒子等を見て非常に驚喜した。そして此次第を哥老會の耆宿揚成業や蒙古王の貝勒、貝子鎮國公を初め、張彦三、張桂林、鄒秀明、何全孝、劉陞三、大英子兒、賈孟卿等の馬賊の頭目や、張作霖部下の將校連にも之を示し、天來の救世主だ、此救世主を頭に戴いて内外蒙古に活躍すれば成功疑ひなしと、確信してゐたのである。それ故日出雄は蒙古に入つても凡ての上下の人々より、非常な尊敬と信用とを受けたのである。

ここに日出雄と盧占魁と張作霖との關係について少し述べる必要がある。張作

霖は最近の奉直戦によつて、自分の兵力の足りない事を非常に憂慮してゐた。萬々一再び奉直戦が始まらうものなら、軍備の整はない東三省は忽ち敗北の運命に陥り、満州王として東三省に君臨する事の不可能なるを知つてゐた。そこで張作霖は何とかがして、自分の勢力を内外蒙古に張つて北京を背面から壓迫し、脅威し、奉直戦の勃發を防がうと内々思つてゐたのである。そこで彼は盧占魁を利用して、内外蒙古に進出せしめ、アワよくば内外蒙古を完全に吾手に入れて見たいと思ふ野心を持つてゐた。今回盧が日出雄と提携して蒙古に大本王國を建設するについても、宗教心の渺い馬賊上りの張作霖は日出雄に對しては、あまり尊敬を拂はなかつた。只うまく盧を介して自分の目的のために利用しようと思つたのみである。さうして狡猾な張作霖は盧占魁自身の金にて武器を調達せよと云つて、自分は手ぬらさずに内外蒙古を手に入れようとしたのである。盧占魁も張作霖の遣り方に對しては、内心非常に憤慨し、應援をしてくれた日出雄に對し、張作霖に對する尊敬と歸依とを移して傾注する事となつた。そして日出雄に向つて盧は一切萬事その指揮に服従する事を誓つたのである。奉天管内に於ては西北自治軍と云ふ名

稱よつを旗印はたじしるしとなし、愈索倫山いよいまつろんざんに行いつて陣營ぢんえいが整ととのつた上うへは、内外蒙古ないぐわいもうこ救援軍きうえんぐんと改稱かいしようし、日出雄ひでをを總大將そうだいしやうとして大經綸だいけいりんを行おこなふ計畫けいかくを以もつて、索倫さうろんに進出しんしゆつする事ことを企くはだてたのである。

日出雄ひでをは盧ろの公館こうくわんに滞在たいざいちう中、又またもや數百すうひやくの詩歌しいかを詠よんだ。其その一部いちぶ、

路遠蜻蛉州 企回天鴻業

同志僅數名 頭戴大神教

部下十萬兵 皆是決死士

志節簡直強 神命奉頭進

國のため世人のために吾は今海外萬里の旅にたつかな  
言葉の通はぬ國に渡り來て生れもつかぬ唾となりぬる  
聖地にて見たる月影奉天に眺むる空は殊にさやけし  
大空に澄み渡りつつ高光る奉天の月殊にさやけし  
小夜更けて月のみ獨り大空に澄み渡りつつ霜に宿かる  
澄みきりし月の鏡を眺めつつ心うつして暫し佇む  
吾友は自轉倒島にあり乍ら仰ぎ見るらむ瑞月の空  
月見れば益々心勇み立つ清き姿のたぐひなければ  
東天の空に輝く満月は吾行末の光とぞ思ふ  
天の原打仰ぎつつ眺むれば日本に同じ月のかかれる  
東天の大空高く澄む月は吾魂の鏡なるらむ  
澄み渡る今宵の月のさやけさに吾魂のささやきを聞く  
明らけき清けき今宵の月影を吾戀ふ人の姿とや見む  
吾戀ふる人の姿の映れかしと月の鏡を打仰ぎ見る

吾思ふ人の姿のうつれるかと月の中なる黒點を見る

(大正一四・八 筆録)

第一〇章 奉天出發

三月一日(中國曆の正月二十六日)盧公館に於て、日出雄、盧占魁、眞澄別、岡崎、揚巨芳、佐々木、大倉、唐國別、守高等の面々が打ち揃ひ蒙古經營談の花を咲かした。

大倉「先生、彌々張作霖から盧さんに對して西北自治軍總司令の内命が下りました。張作霖の意見に依れば先生の御計畫の通り、先づ索倫山に於て兵を募集し、司令部を設けて活動せよとのことです。之に就ては岸少將も非常に骨を折つて呉れました。之れで一先づ安心です。佐々木さんも大變心配しましたが、愈々大願成就の曙光を認めましたから安心して下さい」

日出雄「それは大變にお骨折りでした。御神助に依つて意外にも早く話が纏つた事を喜びます。併し佐々木さん、随分此の交渉は困難でしただらう」

佐々木「ハイ、何と云つても支那と言ふ所は金で動く所ですから、張作霖の側近く仕へて居る連中に、金錢の嚮をはめて反對しない様にして置きました。之れから私は軍備に着手致します。そして輸送も大連から洮南迄は非常に樂になりました。武器の輸送は張作霖が引き受けて送つて呉れる事になりましたから安心して下さい」

日出雄「さうなれば私は一步先きに蒙古入りをして見ようと思ふ。君等は總ての準備を整へて後からやつて来て貰ひたい。王爺廟から三百計りの喇嘛僧が迎へに来ると云ふ事だから、グツグツしては居られますまいから」

佐々木「まあ二三日待つて下さい、さうすれば喇嘛服を逃へに行つた揚萃廷さんも北京から歸つて來ませうし、張作霖の護照も取れますから、其上になさつた方が安全でせう」

岡崎「何、護照が何になるか。僕は東三省の高等官だ、僕が先生のお供すれば護

照もへツタクレも要るものか。何事も神命に従つてやるのが吾等の趣旨だ。先生の言葉は神様の言葉だ。此間から洮南府迄沿道の視察をして来たが、行先々に日本人が居つて何彼の世話をして呉れる事に約束して置いたから、君達は後に残つて準備をしたがよい。僕は是非二三日の中に自動車を雇つて鄭家屯迄疾走する積りだ。

佐々木「奉天から汽車が通じて居るのに高い金を出して自動車で乗る必要があるか、三十人計りの護衛兵をつけるから、先生に奉天驛から御苦勞になつたらどうだ、其が安全でよからうと思ふ」

岡崎「それもさうだが、神様に護衛兵などが要るものか、僕がお供すれば大盤石だ。未だ嘗て奉天から鄭家屯まで自動車を飛ばした者が無いのだから、自動車旅行も地理を知る上に於て面白からう。日本人はいつも満蒙視察をして来たと偉さうに言つて居るが、唯汽車に乗つて沿道を視察した位では駄目だ、是非共自動車で行つた方が面白いだらう」

佐々木「此の道の悪いのに、山や畑を突破し、遼河を渡らねばならぬ大危険があ

る。そんな危険の道を通る必要がどこにあるか。悪い事は云はないから、是非汽車旅行にして欲しいものだ。吾々も心配でならないからなあ」

日出雄「満州の事情も調べたいから、別に急ぐ旅でもなし、自動車旅行を試みた  
いものだ。人の通らない所を通つて見るのも面白いだらう」

岡崎「佐々木や大倉は臆病だから、そんな事を云ふが、何、心配要るものか、自動車旅行と決定しようぢやないか」

佐々木「先生が其御意見なら仕方が無い、之から自動車屋に照會して見よう」

揚巨芳「私の知己で盧さんの恩顧を受けて居る王樹棠と云ふ、昔直隸軍の連長を

して居た男が、城内に自動車會社をやつて居るから、それに云ひつけませう。彼

は義侠心の強い剛膽な男ですから、少々の馬賊位出た所でこたえない奴ですから

日出雄「それは好都合だ、そんならそれに定めて仕舞はう。愈々三月三日此地を

出立しよう」

盧「一切萬事先生の御意志に従ふ決心だからお望みの通り自動車を誂へませう」

かくの如く相談が纏つたので、日出雄は愈々奉天から鄭家屯に向つて自動車を

驅る事となつた。さうして眞澄別、大倉、名田彦の三名は奉天より汽車に乗つて蒙古の洮南府に先着し、洮南ホテルに於て諸般の準備を調べて待つ事に相談がまとまつた。

愈々三月三日（舊正月廿八日）午後四時から王樹棠の自動車二臺に日出雄、岡崎、守高、王元祺の四名は分乗して奉天を出發する事となつた。自動車屋の主人王樹棠は道路の險惡なるを氣づかひ自ら運轉手となり三人の部下と共に隨ふ事となつた。道路は極めて險惡にして運轉意の如くならず、時々機關に損障を來し、一時間許り走ると又一時間許り停車して車の修繕を爲し、晝夜の區別なく川の中や畑の中、小山などを無理やりに進む事となつた。寒氣凜烈にして、手も足も殆んど知覺を失つて居る。奉天から鄭家屯迄の間は馬賊の横行が特に甚だしいので、自動車の停車中はヘッドライトを消し、懐中電燈を持つて修繕に着手する事とした。水が切れると其處邊の氷を割つて機關に詰め込むなど、いろいろの難苦をかし、北へ北へと星の光を力に進んで行く。

幸に官兵や巡警、馬賊の網を突破して、鐵嶺の前方龍首山の麓なる遼河畔に進

んだ。河邊の急坂を下つて自動車は將に遼河を横ぎらうとした時、運轉手は「アツ」と驚きの聲を發した。其刹那に不思議にも自動車は止つた。よくよく見れば、一二尺前方には、さしもに厚い氷が解けて蒼味だつた水が漂うて居る、實に危険な場合であつた。此の自動車には通譯の王元祺と守高が乗つて居たが、何れも神明の御加護として神恩を謝した。此地點は西北に龍首山が高く聳え、且つ河の堤が非常に高かつた爲め、西北の寒風を遮り、氷結して居なかつたためである。是非なく二三支里後へ戻つて人家を叩き起し、案内者を雇うて、小山の上や畑の中を危くも馳驅して大道に出た。滿州廣野を走る列車は、遙の遠方に細長く薄い光を放つて走つて居た。翌四日午前七時開原の城内に着いた。飲食店に入つて油濃い支那食を喫し、此處で一時間許りも車體の修繕をした。此地方では自動車の通行した事が無いので、妙な車が來たと云ふので次から次へ言ひ傳へ、老若男女が眞黒に蛸集してワイワイと騒ぎ立てて居る。其間牛や驢馬などが四頭曳き、五頭曳きで大車を引いて通る。其混雜は到底筆紙に盡し難い。漸く修繕が濟んだので、二臺の自動車は、ブウブウと警笛を鳴らし、群集を押しわけ、大速度でかけ出し、

午後一時頃には昌圖府の手前迄安着した。一臺の自動車は大破損を來たし運轉不能となつて仕舞つたので、是非なく昌圖府の木賃ホテル三號店に宿泊し、奉天へ人を派して機械を取り寄せる事にした。二百四十支里の高原を未だ何人も試みし事なき冒險的旅行をやつたのは、開闢以來の壯舉だ。源の義經の都落にも比して偉大なる放れ業だと、岡崎の氣焰當るべからざるものがあつた。

(大正一四・八 筆録)

第一章 安宅の關

自動車破損の爲、代用機械の奉天より到着するまで、昌圖府の三號店に待つ事とし、午後一時から粗末なる一室を與へられ、炕を焚いて一行四人は横臥し、前途の光明談に耽つてゐた。午後六時過ぎ支那の巡警二名は、宿泊人調査の爲に出張した。岡崎は日本人、外三人は支那人と云ふ觸れ込みで、支那服を纏ふて横臥

してゐた。巡警は岡崎に向つて云ふ。

巡警「貴下は日本人と聞きました、支那の内地を旅行するには護照が必要です、失禮ながら、護照を見せて貰ひませう」

岡崎「僕は張作霖の命令を受けて視察に出て來たのだ。支那の官吏が支那を旅行するのに護照の必要があるか、分らねば證據を見せてやらう」

と威丈高になり、得意然として自分の鞆から……東三省裕東印刷所技師長を命ず、

月俸三百六十元……と云ふ辭令書を振廻はし、其上、前河南督軍軍顧問岡崎鐵

首と云ふ大名刺を振まはし、支那巡警の調査を受ける必要はないと匆ねつけた。

巡警は呆氣に取られた様な顔して、日出雄、守高、王元祺を顧み、岡崎に向つて、

巡警「此三人の方は何用あつて、汽車のあるのにも拘らず自動車旅行をされるの

ですか」

と稍詰問的に出た。岡崎は平然として、「アハ、々、々」と他愛なく笑ひ乍ら、

岡崎「そんなことを尋ねて何にする？ 此方々は南清方面の豪商だ。一遍滿州が

旅行して見たいから案内して呉れぬかと云はれるので、僕が視察を兼ねて、自動

車旅行を試みたのだ」

巡警は三人を熟視し乍ら、立派な支那服を着けてゐるのに、ヤツと安心したと見え、

「ヤアこれはお邪魔致しました」

と丁寧に挨拶をして歸つて行く。其後で岡崎は又もや例のメートルを上げ出した。

「アハ、先生、私は偉い者でせうがな、佐々木や大倉が何程偉相に吐かした

つて到底こんな放れ業は出来ずまい。こういう時には此名刺が護照の代理をす

るのですからなア。支那の巡警が何程調べようとしても、先生に一言も言葉をか

けささなかつた所は偉い者でせう。エツへ、」

日出雄「満蒙旅行は君に限るよ。君のおかげで、先づ安宅の關を無事通過するこ

とが出来るのだ。感謝しますよ」

岡崎「何と云つても日露戦争以來、支那各地を往來して、支那滿州の事情に通じ

て居るのだから……なア先生、安心なものですよ」

と頻りに得意な面を曝してゐる。だんだんと時が移つて、午後九時頃となつた。

三號店の門口に四五人の靴音や、サーベルの音がチャラついて聞えて来た。……  
と思ふ刹那、うす汚い板戸を開けて突然日出雄の居間へ這入つて来たのは支那の  
官兵であつた。一人は軍曹で四名の兵士を従へ、警察署の報告に依つて日本人が  
泊つてゐると云ふことを知り、わざわざ査べに来たのであつた。日出雄と守高は  
支那服を着けたまま素知らぬ顔して横になり、岡崎と軍曹との應接を聞いてゐた。  
軍曹「深夜に御邪魔を致しましたが、貴下は、東三省の高等官だと承はりました  
が、支那内地を旅行されるには護照が必要ですが、御携帯になつてゐますか」  
岡崎は例の名刺や辭令を鞆から取り出して見せ、

「アツハ、ハ、ハ」

と無造作に體をゆすつて笑ひ、

「それ、此通りだ、此度南清地方の富豪なる僕の友人が、一遍滿州の自動車旅行  
がして見たいから案内してくれぬかと言はれるので、何でも奇抜なことをやつて、  
支那官民を驚かしてやらうと思ひ、自動車を雇ひ、やつて来た所、大體支那の道  
路はなつてゐないものだから、堅牢な自動車も滅茶苦茶になり、運轉不能となつ

たので奉天から機械が来る迄、こんな汚い木賃ホテルに宿泊してゐるのだ。ア  
ハ、ハ、ハ、要らざる構ひ立てをすると、張作霖に報告するぞ」

と頭から抑へつける。軍曹は極めて慇懃に言葉もやさしく、岡崎に向つて云ふ。

「貴下は東三省の高等官なることは此辭令書にて判明しました。併し滿州の旅行  
は馬賊が横行して大變危険ですから、途中に於ていろいろの障害が起つては日本  
政府へ對しても濟みますまいから、お出になる所まで護衛兵をつけませう」

岡崎「アツハ、ハ、ハ、イヤ大きに有難う。併し吾々は日本男子だ。乞食の様な支

那の雇兵の二十人や三十人送つて貰つた所で、何の役にも立ちますまい。御親切  
は有難いが、お斷り申しませう。必要があれば地方の官憲に依頼しますから……」

軍曹は王元祺に向つていろいろの質問をした。王元祺は性來の支那人だから、  
何だかピチャピチャと得意の支那語で應答してゐた。軍曹は日出雄、守高の兩人  
を怪しげな視線を投げ乍ら、

「夜中驚かせまして濟みませぬ」

と慇懃に挨拶を残し歸つて行く。岡崎は益々得意になつて大いに氣焰を上げ、肇

國會の話や、犬養先生を無性矢鱈に振りまはし、外務省の腰の弱い話などを喋々  
喃喃と喋舌り立て、

吾眼霞が關の門にかけ國の行末みむとぞ思ふ

アハ、これは私の作った歌です。吾々が支那で何か日本の爲になることをやらうと思ふと、弱腰の日本外交官は直ぐに頭を抑へる。それだから、支那開發も滿蒙の經營も何時も九分九厘で畫餅になつて了ふのだ。今度といふ今度は思ひ切つて滿蒙政策の實行をやつつけてみる覺悟です。先生は支那道院の宣傳使なり、私は東三省の高等官だから、日本政府がゴテゴテと干涉する權利はない筈だ。アハ、面白面白い、前途有望だ  
と切りに顔面筋肉を活躍させ、車輪の如く舌を運轉させてゐる。そこへ又もや靴やサーベルの音がして來た。

御免なさい

と這入つて來たのは昌圖府の日本領事館員が巡査を二名引連れて、身許調べに來たのである。

日巡「岡崎鐵首といふ人は貴下ですか」

と軍服姿の岡崎に向つて、怪しげな視線を向け口を切つた。岡崎は例の名刺や辭令を見せつけて、例の大口をあけて「アハ、と笑ひ乍ら、

「モウ夜も更け十二時前でありませぬか、今頃に來られちや實に迷惑です。何の御用ですかなア」

日巡「エー、只今支那の警察から日本人が泊つてゐるといふ報告が來ましたから、一應伺つてみたいと思ひ出張したのです」

岡崎「ヤア、そりや御苦勞でした。別に心配して下さるな、私は日本人でゐながら東三省の張作霖の命令で支那内地の視察をなすべく、やつて來たのですから、日本領事館に御心配は決して掛けませぬ」

日巡「此三人の方はどこの人ですか、どうも支那人のやうにありませんがね」

岡崎は日出雄を指して、

「此方は奉天平安通水也商會の主人です、商業視察の爲にお出でになつたのですよ」

日巡 「あゝさうですか、さうすると日本人ですな、何時お發ちになりますか」

岡崎 「ハイ、自動車が破損しましたので動きが取れないのです。奉天まで機械を取りにやつたから、使が歸つた上修繕を施し出立する考へです。先づ明日の午後二時頃です。それ迄は此の木賃ホテルで熏ぼつてゐる考へです。アハ、ハ、ハ、」

日巡 「護照はありますか」

岡崎 「護照なんか要るものか、東三省の役人が東三省内を旅行するのだからな、

アハ、ハ、ハ、」

と笑ひに紛らす。日本巡查は、

「ヤ、御邪魔致しました」

と歸つて行く、日出雄は稍心配相な顔して、

日出雄 「岡崎さん、支那の巡警や軍曹に向つて、南清方面の豪商だといひ、日本の官憲に向つては日本人だと云はれましたが、これは屹度領事館で不審を起し、

明朝更めて調査に来るかも知れませぬよ。何とか考へねばなりませんまい」

岡崎は頭をかき乍ら、

「あまり喋舌り過ぎたものだから、拙劣なことをいつてしまつた。ナア二構ふものか、明日領事館から来よつたら、三寸の舌鋒で吹き飛ばせば宜しい。先生、岡崎に任しておいて下さい、メツタに御迷惑はかけませぬからな。アハアハ、と小さく笑ふ。

日出雄「免も角領事館員が来ると面倒だから明早朝一臺文は先へ出發する事としてようぢやないか」

岡崎「それなら先生と私は二十支里程北の大四家子といふ所迄、先發ませう、守高さまや王君は修繕が出来次第、後から追つかけて来るといふことに定めておきませう」

「それが宜しからう」

と言つたきり、ゴロリ横になり忽ち雷の如き鼾をかいて眠つて了つた。岡崎も外二人も旅の疲れで前後不覺になつて、夜のホンノリと明るる迄他愛もなく熟睡し

た。

(大正一四・八 筆録)

第一二章 焦頭爛額

翌五日の午前三時頃奉天から機械を持つて歸つて來たので、直様自動車の修繕に着手した。何分破損が甚だしいので容易に修繕が出来なかつた。日出雄と岡崎とは七時半一臺の自動車を王樹棠に操縦させ乍ら、二十支里の地點なる昌圖の北、大四家子の王昌紳の宅に安着し、自動車を門内深く入れおき、守高等の自動車を一時間許り待つてゐた。あまり遅いので自動車の荷物を全部下し、王樹棠は一名の運轉手をつれて再び昌圖三號の木賃ホテルに引返した。恰度大破損した自動車の修繕を全く終り、荷物を積み込んだ所へ日本領事館員が警官を二三名引連れて臨検に來た。そして王樹棠の自動車と共に三號店の門へ這入つた。日本官吏は直

ちに三號店內に進み入り、調査して居る間に、王樹棠は全速力を出して自動車を  
駆け出し、日出雄が待つてゐる大四家子の館を指して驀地に二臺ともやつて來た。  
王昌紳の宅は十數人の大家族で何處となく氣品の高い風貌をしてゐた。此處の  
家族は日本の救世主來れりと云つて、大いに歡待し、高梁や支那米のお粥や鶏卵  
等を煮て饗應した。一同は互に無事を喜び當家に別れを告げ、茫漠たる大荒原を  
十支里許り疾走すると、二百名許りの支那兵の一隊に出會した。王樹棠は一切構  
はず兵隊の列を目あてに、一目散に驅り行く。殆んど三十分許り駆け出した時に、  
又もや機械の損傷を來し、一時間許り時間を費して修繕に取掛かつた。  
丘陵や畑や川の區別なく、西北の空を目あてに難路を進み行く豪膽不敵の行動  
に、旅行く人馬が驚いて右往左往に逃げ廻る。大車を曳いてゐる馬の群は驚いて  
溝の中に顛倒する。其中に次から次へ來る牛車や馬車が折重なつて顛倒する有様  
は、實に可笑しくもあれば氣の毒でもある。車の動揺につれて日出雄等は幾度と  
なく頭を打ち髻を打ち、時々後の自動車が、前の自動車に衝突したり、車體のガ  
ラスが破壊して守高は破片の雨を全面に浴び、眼邊に負傷し、ダラダラと血を流

してゐる。かくして漸く舊四平街に安着したのは午後三時半頃であつた。自動車  
が再び大破損を爲し、最早や動く事が出来ぬので、止むを得ず荷馬車二臺を雇ひ  
寒風に曝され乍ら新四平街の貿易商奥村幹造氏の宅に安着したのは午後五時三十  
分頃であつた。

此處の宅で日出雄等は久し振りで日本食を饗せられ、鶏肉の鍋を圍んで舌鼓を  
打つた。途中開原で朝飯を食つたきり今日まで日出雄一行も車掌四人も晝夜の區  
別なく、碌に飯も食はなかつたが元氣は益々旺盛であつた。當夜は奥村方に一泊  
し洮南府の日本居留民會長平馬愼太郎氏の案内で、四平街驛から鄭家屯に向ふ事  
と決つた。當家にて久々に日本風呂に入浴し、汗や垢を落とし翌早朝四平街より  
列車の客となつた。此日は非常に陽氣暖かく支那服の上着を一枚二枚と次々に脱  
ぎ、窓を開けて茫茫たる大原野の風に當りつつ進んで行く。午後六時五十分鄭家  
屯驛下車、山本熊之氏方に一泊する事となつた。岡崎、平馬、守高、王元祺の四  
人は、日本の東屋と云ふ料理店に於て、牛飲馬食會を開き大變なメートルを上げ、  
お多福仲居や、豚藝者が杯盤の間を幹旋し、大いに豪傑振りを發揮したが、翌早

朝日出雄が泊つて居る山本方に入り來り直ちに停車場へと驅けつけた。正に午前六時三十分である。

臥虎屯驛の西北の方に土饅頭形の寶裏山が、大原野の寂寞を破つて端然として立つて居る。饅頭を伏せた様な山で蒙古七山の一なりと云ふ事である。此洮南鐵道は去る一月初めて試運轉を行ひ漸く鐵路が固まつた所で、殊にその汽車は滿鐵の古物許りで途中機關に損傷を來たし、茂林驛の手前で七時間許りも立往生をした。岡崎は支那の將校四人を相手に談論風發盛んにメートルを擧げ、三藏法師について行つた猪八戒式を發揮し、日出雄を煙に卷いた。蒙古名物の黄塵萬丈も岡崎の鼻息には跣足で逃げ出しさうであつた。

汽車の途中停車を怪しんで、附近の村落より蒙古人の老若男女が數十人許り物珍しさうに集まつて來た。そして吞氣さうに長い煙管で煙草をパクついて居た。之を見ても日本の神代は斯くの如く吞氣であつたらう等と、歴史を遡つて日出雄は冥想に耽つた。日出雄は車中に於て數十首の和歌を詠じた。その内の一部を左に録する。

際しなき大野ヶ原を進み行く吾魂の勇みけるかな  
 天も地も一つになりて國津神廣野の蓆敷きて吾待つ  
 漸くに安宅の關をくぐり抜け今は蒙古の廣野を走る  
 早や已に蒙古の國を握りたる如き心地し意氣天を衝く  
 風清く日はうららかに枯野原春めき立ちて陽炎燃ゆる  
 事ならば我同胞を招き寄せ新樂園に救ひ助けむ  
 五五と云ふ日數重ねて漸くに寶の國に入りし吾かな  
 際限も知らぬ原野の眞中に蒙古の人家チラチラ見ゆる  
 一點の曇りさへなき大空は地平線上に下りて見ゆる  
 木も草も見事を得ぬ蒙古人は空の月星花と見るらむ  
 積む雪の凍れる上を日の照りて大野ヶ原も大海と見ゆる  
 海の潮光ると許り疑はる大野ヶ原の雪に日は照り

際限もなき大荒原の中に土室の如き人家がポツリポツリと建並び、  
 車窓より眺

れば陸の大洋に舟の浮んだ様である。遠く眼を放てば楊柳の立木が大原野の單調を破つて、コンモリと黒ずんだ森をなしてゐる。大平川驛にて又もや汽車は停車し、給水やなんかでゴテゴテと約一時間餘を費した。岡崎は、  
「エー、此ボロ汽車奴、まるで蛞蝓の江戸行見たやうだ」  
と口角に泡を飛ばして怒り出した。日出雄は笑ひ乍ら、  
「岡崎さん、汽車が動かなけりや仕方がないから氣を利かして徒歩と出掛け、次の驛で汽車を待つて乗り換へたら、それ丈け早く洮南驛に着くだらう。ア

ハ、ハ、ハ、

と馬鹿口をたたく。支那の商人が岡崎を見て、

「貴下は何處まで行かるか、何の用があつて旅行されるか」

と不思議さうに問ふ。

岡崎「馬鹿を云ふな、用のない者が汽車に乗つて旅をするか、餘計な世話を焼くと張りとはすぞ、貴様のやうな俺は商人ではないぞ、金箔付の東三省の高等官だとエライ馬力で叱り飛ばす。」

「日本人は支那人に對し、凡てがこんな調子だから何程日支親善を叫んでも駄目だなア」

と日出雄は獨語した。

洮南着の時間は午後四時二十分である。然るに汽車はまだ大平川驛に焦げついでる。

「眞澄別一行は寒い停車場に自分等を阿呆待ちしてゐるだらう。僕は洮南着で初めて三日月を見る積りだから、一寸「まじない」をして汽車を止めてゐるのだ、アハ、ハ、ハ」

と阿呆口を云つてゐるのは守高であつた。

通譯の王元祺は何處ともなく元氣がない。青白い顔して横になり、鼻を掻き撫でてはウンウンと大聲に唸り、暫くしては又キヨロリと目を開け、窓外を不足相な顔をして眺めてゐる。持病の鞏丸炎が再發したからであつた。

太陽は地平線上に近づけどまだ洮南は遙かなりけり

ぐづ汽車きしやに乗りて荒原くわうげん馳はせ行ゆけば缺伸あくびの玉たまの連發れんぱつとなる

車上つやうの懷古くわいこ

汽車破壞きしやはくわい昌圖街しやうとうがい

危險刻々こくこくわがたいにせまる我隊迫われたいせまる

巡警兵士じゆんけいへいし日警官にちくわん

窺間かんをうかがひていつかうきふにとんくわいす一行急遁晦いっかうきふにとんくわいす

因ちなみに眞澄別一行ますみわけいっかうは、三月三日午後十一時十分奉天驛發長春行列車さんくわつみつかごごじふいちじふぶんほうてんえきはつちやうしゆめきれつしやに搭乗たふじようし、四日午前五時半四平街着かごぜんごじはんしへいがいちやく、植半旅館うゑはんりよくわんにて朝餐てうさんを喫きつし、同日午前八時半四平街發どうじつごぜんはちじはんしへいはつ、正午前鄭家屯着うごまへていかとんちやく、ホテルに投宿とうしゆくした。そして三月五日午前六時半發列車さんくわついつかごぜんろくじはんはつれつしやにて洮南たうなんに向つた。中途三林驛ちゆうとさんりんえきを發はつし間もなく、機關車きくわんしやに故障こしやうを起おこし、列車れつしやは荒野くわうやの眞中まんなかに立往生たちわうじやうした。係員かかりあんは東奔西走とうほんせいそうして遂つひに鄭家屯ていかとんより救援きうえん機關車きくわんしやを引張ひつぱつて來きて漸やうやく進行しんかうし始めた。時に午後四時、沿道えんだうの馬賊ばぞくの襲來しふらいに對たいする警戒物けいかいもの々々ものしき中なかを列車れつしやは遅々ちちとして運轉うんでんし、夜十二時を過すぐる二十分洮南驛にじふぶんたうなんえきに到着たつちやくした。一行いっかうは洮南旅

館のボーイに迎へられ支那馬車二臺に分乗し、銃剣をつけたる兵隊に護られつつ特に開かれたる城門を潜つて洮南旅館に投じた。

(大正一四・八 筆録)

### 第一三章 洮南旅館

日出雄はやうやくにして三月八日(陰曆二月三日)午後九時三十分、洮南驛に無事安着し、乞食の様な支那兵に送られ、ガタ馬車二臺に分乗して洮南旅館に入る。眞澄別、大倉、名田彦の三人は鶴首して待つて居た。さうして洮南府は日本官憲の勢力なく、領事館員と雖も護照がなければ入洮を許さないの、日本人が停車場に迎へに出るのは最も危険だから失禮をしましたと、三人は辨解して居た。王元祺の鞏丸炎は益々激痛を感じ、病床に入つたまま起きず、飯も食はず弱りきつて居る。

明くれば三月九日、奉天の同志へ安着の電報を發した。此洮南旅館は滿鐵の御用旅館と云ふ名義で、辛うじて支那官憲の許可を受けて居るのである。一時は洮南府内に百七八十人の日本人が滞留して居たが、支那官憲の壓迫により、何れも退去を命ぜられ、特殊の關係あるもののみ二十五人在留して居るだけである。さうして、日本人の女と云へば僅かに五人と云ふことで、一行七人は此旅館に宿泊して種々の計畫に着手して居た。平馬氏宅から猪野、大川の二人が來訪して蒙古入りの壯舉を聞き、我が國家前途の爲に慶賀に堪へないと云ふて贊意を表して居る。次に滿鐵關係者の三井貫之助氏が來訪した。併し乍ら日出雄や眞澄別は一室に閉ぢ籠り、岡崎、大倉の兩人が接見する事となつた。大倉は三井と共に城内の支那料理店へ出かけ、種々の運動を開始した。夜分になると東西南北から銃砲の音が頻りに聞えて來る。之は洮南府の周圍に散在して居る十數團の馬賊二千餘名が、何時洮南府を襲ふかも知れないので、夜になると兵士が馬賊威喝の爲に發砲するのでと云ふ事である。實に官憲の威力も及ばず、物騒千萬の土地である。

此洮南府は鄭家屯を北に去る鐵路百四十哩の地點にあつて、東蒙古に於ける唯

一の大市街である。支那人が蒙古に發展した根據地は即ち此の地である。四方は土の城壁をもつて圍み、東西南北に六個の通行門があつて、住民は此處から出入する。門の入口には支那の官兵や巡警が控へて居て、一々護照の検査を爲し、携帶品や出入の荷物に對しては、幾何かの税金を現場で徴收する。洮南の市街は南北五支里、東西五支里の正方形の面積を有し、此城壁内には官公署や各商店が軒を並べて居る。純然たる蒙古の土地でありながら、其勢力も、政治關係も全く支那の主權に屬し、奉天省が管轄して居る。二十年前、初めて支那人が此地に市街を築いた時は、僅かに三四十戸に過ぎなかつたが、其時から道尹衙門を設置して土地の發展に努めて居る。其後洮南の道尹衙門は鄭家屯に引き移り、現在の官公署、縣公署、第二十九師司令部や、監獄や、警察署、審判廳、捐務局、兵營、郵政局、電報局、學校等がある。國民小學校が三ヶ所、國民女學校が二ヶ所と縣立高等小學校が一ヶ所ある。當地の支那官憲は總ての日本人に對して極力壓迫を加へ、排日思想の最も盛んな所である。それ故、鄭家屯の日本領事館から館員が視察に来て、護照がなければ通さないと云つて、入城を拒むと云ふ有様である。

かういふ状況じやうきやうに在ある洮南府たうなんふへ日出雄ひでを一行いつかうは入り込んだから、中々なかなか晏如あんじよたる譯わけには行ゆかないのである。洮南たうなんへ日出雄ひでをが着ついた三日目みつかめに、秦宣しんせん及び山田文治郎やまだぶんぢらうの兩りやう人が佐々木ささきの手紙てがみを持もつてやつて來きた。それは歸化城方面きくわじやうほうめんの支那人しなじん哥老會からうくわいの耆宿きしゆく揚成業やうせいげふが、一萬數千いちまんすうせんの兵へいを率ひきゐて參加さんかすると云いふ事ことであつた。此時このとき關東廳くわんとんちやうの陸軍りくぐん三等主計正さんとうしゆけいせいなる日本人にっぽんじん某ぼうが洮南視察たうなんしさつにやつて來きて一夜宿泊いちやしゆくはくした上うへ、翌朝よくてう八時はちじの汽車きしで歸かへつて行いつた。

夜分やぶんになると、鉦かねや太鼓たいこや笛ふえなどの樂器がくきで賑々にぎにぎしく葬式さうしきの行列ぎやうれつが街道かいだうを通過つうくわする音が聞きこえるかと思おもへば、今度こんどは又嫁入またよめいりの行列ぎやうれつが同じやうな鳴物なりもので通とほつて行く。さうして爆竹ばくちくの音が四方しほうから聞きこえて來くる。室内しつないで音おとばかり聞きいて居ゐると葬式さうしきも嫁入よめいりも同じやうに聞きこえる。有名いうめいな論評家ろんびやうかの黒頭巾くろづきん横山健堂よこやまけんだうが、日出雄ひでをと入れ違ちがひに此ホテルこのを辭じし歸かへつて行いつた。此處ここで健堂けんだうの揮毫きがうした立派りつぱな書しょをホテルの支配人しはいにんから示しめされ、且かつ揮毫きがうを依いらいされたので、日出雄ひでをは之これに應おうじ日本人にっぽんじんに書畫しよぐわを描かき與あたへた。

三月十一日さんぐわつじふいちにちの未明みめいから機關銃きくわんじゆうや小銃せうじゆうの音おとが頻しきりに聞きこえ、何なんとなく不穩ふえんの空氣くうきが

漂うて居る。洮南府一個旅團約四千人の常備兵があつて、東三省の北門を守つて居るのだが、ホテルの支配人に聞くと、馬賊の一隊が襲來したので應戦して居るものだとの事であつた。

明くれば三月十二日、鄭家屯の日本領事館書記生某、洮南視察の爲に入り來り、ホテルに宿泊し、滿鐵關係の三井氏が調査した書類を書き寫し、四五日間滞在して歸つて行く。日本官吏の調査はすべてこんな具合に行はれて居るのだ。此日城内の春山醫院猪野敏夫氏宅、及び平馬愼太郎氏宅に日本人全部移轉することとなつた。岡崎は大變な不氣嫌で傍人に八つ當りの態である。それは名田彦が僕は柔術の達人だとか、米國の理髮學士だとか、刀一本あれば數十人の相手を瞬く間に斬りなびけて見せるとか 大法螺を吹いて威張り散らすのが癢に觸つたのである。支那では理髮師と云へば下職とみなされて居るのに、名田彦が得々として理髮の妙技を誇つたり、又ノコノコと城内の理髮店に出かけて行つて、剃刀の使ひ方がどうだの、かうだのと理窟を云ひ、支那の理髮師に教へてやり、いらざるお節介をやつたと云ふのである。

おまけに日本人が洮南府に居ると云ふ事を秘密にしておかねばならぬのに、  
「自分は三五信者中の全體から選ばれて来た神の寵兒だ」とか、「日出雄先生の一番の弟子だ」とか法螺を吹くので、岡崎が憤慨したのである。そこへ秦宣と山田とが佐々木の手紙をもつて使ひに来たので、岡崎の機嫌は益々悪い。  
岡崎「佐々木、大倉の奴、乞食のやうな人足を使ひに寄こしよつた。あんなものが何になるか、大倉の奴、何も彼も自分一人で出来るやうに吐かしよつて……何だ俺が居なければ此危険な洮南府へ来て今日のやうな事があつたらどうするか、マサカ三井の小つぽけな借家へ八人も日本人が宿る譯には行くまい。それだから俺が、平馬君を手に入れておいたのだ。何と云つても佐々木や大倉では駄目だ。趙倜や憑占元の方から日出雄先生を引張りに来て居つたのに、佐々木の奴盧占魁と一緒に頼みやがるものだから先生を御依頼して盧占魁の方の援助をして貰つたのだ。本當に彼奴は馬鹿だからなア。岡崎の腹中が分らぬのだから」  
と大氣焔と大憤慨の呼吸で室内を包むで仕舞つた。

名田彦は猪野、大川の在留日本人に向つて滔々と自慢話を吹きかけて居る。

「自分は澤山の信者の中から選抜せられて居る純信者だが、今回の先生のお供にぬけ駆けしてやつて来たのも、今年は何でも神勅に依つて一億圓の財産を拵へるつもりだからだ。蒙古には金銀銅鐵の鑛山が澤山にあると云ふ事だから、此の通り檢鑛器迄持つて来て居るのだ。此器械さへあれば一目に金か、鐵か、銅か、又含有量が幾何あるかと云ふ事が即座に分る。此檢鑛器は獨逸製で、日本の鑛山師は誰も持つて居ない貴重品だ。それに先生の話に聞くと大庫倫迄神軍を進めると云ふお話だが、大庫倫迄は八千支里もあると云ふのぢやないか。こんな事なら來るのぢやなかつたに、チエツ……もう歸つてやらうか」

なぞと不機嫌な顔つきをして呟く。かと思へば、又顔色を變へて、大本の信者の中でも此度のお供をするやうな精神の研けた人間は、一萬人の中に一人もあるまい。それを思へば此度のお供は不足ぢやない。神様の御命令だと思へば實に私は幸福なものだ。などと一人免許で喜んで居る。其處へ日出雄が何氣なくやつて來て名田彦の法螺を聞き、

「大本の信者は千人が千人乍ら皆僕について來る者ばかりぢや。さう自惚するも

のぢやないよ」

と云つたので名田彦は變な顔して默言込んで仕舞つた。

(大正一四・八 筆録)

## 第一四章

### 洮南の雲

當地の家屋は内地に比して非常に變つてゐる。何れの民家も皆家の周圍に高き土塀をめぐらし、馬賊の襲來に備へ、屋内は室毎に入口のみあつて一方口である。中から鍵をかけて寝る構造となつてゐる。一尺以上もある様な厚い壁で間を仕切り、そして鰻の寢所のやうな細長い間取になつてゐる。冬季は晝夜温突に火を入れてあるから室内は暖かい。之に反し一步屋外に出づれば寒氣厳しく身に迫り、うつかりしてゐると、直ぐに咽喉を害して了ふ。それから道行く車馬を見ると、例の支那式の床の低い梶棒の篋棒に長い人力車は見られないが、不恰な牛車や

馬車ばしやが灰はいの様なやう道路だうろを驅かけ廻めぐり、防砂眼鏡ぼうしやめがねをかけねば一歩いつぽも先さきを通行つうかうすることが出来できない。何れいづの家いへも入口いりぐちに赤あかい紙かみを張はり、富貴ふうきだとか幸福かうふくだとか、瑞祥ずあしやうだとか、目出度めでたさうな文字もじを誌しるしてゐる。そして夕方ゆふがたから城門じやうもんを固かたく閉とぎし、夜分やぶんは他たの地ち方うへ出でられない事ことになつてゐる。當城たうじやうない内ないにいる數千すうせんの兵士へいしも數多あまたの巡警じゆんけいも大部分だいぶぶん馬賊ばぞく上あがりだから、夜よの帳とばりがおりると同時どうじに、平氣へいきの平左へいざで、軍服ぐんぷくの儘まま泥棒どろぼうをやると云いふのだから、生命財產せいめいざいさんの保證ほしやうなどは到底たうてい駄目だめである。そして城内じやうないの三分さんぶの一いち迄までは馬賊ばぞくの頭目たうもくや小盜兒連せうとるれんが大小だいせう各店かくてんを開ひらいてそ知らぬ顔かほしてゐるのだからこれ程ほど危険きけん極きはまる話はなしはない。此附近このふきんの馬賊ばぞくの團體だんたいは三十人さんじふにんあるひあるひは五十人ごじふにんの小勢せいせいで村落そんらくに入り來きたり、三日間みつかかん位ぐらゐその村むらに逗留とうりうして、能よく食くひ、能よく飲のみ、女をんなと見みれば老若らうじやくの別べつなく強姦がうかんをなし、飲食物いんしょくぶつがなくなると、悠々いういうとして又次またつぎの村むらへ行いつて同じおなことを繰返くりかへすといふ吞氣のんき千萬せんばんな泥棒團どろぼうだんが横行わうかうし、蒙古もうこの住民ぢゆうみんは實じつに枕まくらを高たかくする事ことが出来できないと云いふ有様ありさまである。それから東蒙古地方ひがしもうこちほうの俗稱活佛ぞくしやうくわつぷつの名望めいぼうと信用しんようは全然ぜんぜん地に墜おち、蒙古人もうこじんの信仰しんかうが動うごき出だしたといふ。現げんにパイインタラの活佛くわつぷつは麻雀マージャンに負まけて、十萬餘じふまんよの負債ふさいが出来でき、廣大くわうだいな土地とちは支那人しなじんにボツたくられ、且かつ婦女子ふぢよしを

小口から引ひつけて、今は梅毒に罹り苦しんでゐるといふ有様だ。王爺廟の活佛も又いろいろ面白からぬ評判が立つてゐる。昨年の三月十四日満鐵の上村某が當地にて馬賊に擲り殺された一周忌に當るといふので、其追悼會が日本人間で行はれた。上村は劍道の達人であつたが、暗夜に後から棍棒で腦天を擲りつけられて一堪りもなく斃れたとの事である。

寒風烈しく吹きまくり、黄塵萬丈の巷をいろいろの鳴物入りで葬式の行列が通つて行く。窓内より眺むれば喇嘛僧が二十人許り、黄や赤の衣を着け、面白い旗を澤山押立て、死骸を輿に載せ、五六間もあるやうな長い棒でかついで、チワチワさせ乍ら、馬車數臺に豚や羊などを縛りつけて長い行列を作つて通る。恰も氏の祭禮の神輿渡御の様な光景である。斯る立派な葬式は此土地でも餘程名の賣れた人士だと云ふことだ。

岡崎は日出雄の手から運動費を受取りニコニコし乍ら、洮南府知事の縁類なる將校と共に五六人の支那官吏を招き底拔散財をやり、且つ小遣を與へて彼等の歡心を買ひ、まさかの時の用意にと極力運動をやつてゐた。日出雄の宿泊してゐる

平馬氏と同じ邸内に洮南府の將校某連長が住んでゐる。岡崎は此連長と懇意になり、互に往復してゐた。連長夫婦が大喧嘩をおつ初め、死ぬの走るの、暇くれの、殺すの殺せのと、恠氣喧嘩が起る度毎に、下女が驚いて岡崎を呼びに来るといふ深い仲になり、遂には兄弟分となつて了つた。岡崎は得意然として大きな聲で邊り構はず、遂には洮南府をしようと云ふやうな事まで主張し出し、それが支那官憲の耳に入つたとか、日本官憲の耳に這入つたとか云ふので、日本人側は非常に氣を揉んだ。それでなくても排日思想の烈しい洮南府に潜伏してゐるのだから、こんな事が假令冗談にもせよ、日本人の口から出たと云ふ事が支那官憲に聞えようものなら、何んな事になるかも知れないと、岡崎の失言が奉天の同志に傳はつたので、唐國別、佐々木、大倉は顔色を變へ、狼狽し、岡崎君を奉天に返さないやうにして貰ひたい。そして一日も早く日出雄先生が岡崎を引張つて公爺府へ行つて貰ひたいなどと言ふ手紙を坂本廣一に持たせて依頼して來た。岡崎はそんな事には少しも頓着なく……國家の爲、社會の爲に吾々は最善の方法を講じてゐるのだ。大體佐々木、大倉の奴肝玉の小さい腰抜けだから、何でもない事を心

配しよつて、そんな事で、こんな大事が成就するものか、ヘン、馬鹿馬鹿しい……と鼻の先で吹き散らしてゐる。日出雄は岡崎に向つて……「今の場合は可成秘密を守り、餘り大事なことは口外せないよう」……と注意すると、誰のいふことも聞かない岡崎も二三日間は神妙に沈黙を守つてゐた。すると一日四平街の奥村幹造氏が倉皇としてやつて來た。岡崎の大言壯語が祟り、日支官憲の耳に這入つた様なので日出雄一行の身の上を案じ、親切に見舞に來たのである。其處へ岡崎が這入つて來て、支那の各將校と前夜青樓に上り一緒に麻雀や散財をして彼等を全く買収しておいたからモウ安心だと、意氣揚々として語る。奥村は岡崎の平氣な顔を見て意外の感に打たれてゐた。

日出雄一行は愈蒙古奥地へ入るに付て、萬事便宜の爲支那の家屋を王元祺の名義にて一ヶ年百五十圓の家賃で借入ることとなつた。温突付四間の家屋で、長榮號と命名し表面は貿易商といふことになし、軍器や糧食の中繼場とした。

日出雄が守高と共に平馬氏の宅に書見をしてゐると、日本領事館員月川左門氏がやつて來た。そして猪野敏夫と長い間種々の談話を交換し、結局日本と支那と

の關係を圓滑ならしむるには日本の實力を示すより仕様がなないと、滿蒙經營談に耽つてみた。日出雄は次の間から兩人の談話を聞いてみた。暫時すると支那將校がやつて来て、一つの卓子を圍み、嬉し相に笑ひ乍ら、麻雀と云ふ博奕を深更迄やつてゐる。平馬氏夫人の二葉子も一緒に麻雀に耽つてみた。文學趣味を有つた日出雄は幾日間一室に閉籠つてゐても少しも苦痛を感じないのみならず、いろいろな思想の泉が湧いて來ると云つて、面白く楽しく日を送り詩歌などに耽つてゐる。其中の數首を左に、

十二夜の月見る度に思ふかな吾生れたる夜半はいかにと  
日本の本を立出で再び十二夜の月を蒙古の空に見るかな  
大空に月は慄ひて風寒しされど吾身は神の懷  
鈴の音いと賑はしく聞えけり又もや馬車の路を行くらむ  
潜龍の潜む此家は神界の深き仕組の館なるらむ

さんぐわつじぶろくにち  
三月十六日（舊二月十三日）満鐵社員の山崎某が四平街の日本憲兵隊へ、日出  
雄一行が洮南府へ来た事を密告したので、支那側の官憲が活動を始め出したと云  
ふ噂が耳に入り、一行は薄氷を踏むが如き思ひに悩んでゐた。そして月川書記生  
や満鐵の佐藤某が代る代る平馬氏の宅を窺つてゐた。

洮南へ來りて安心する間もなく又もや深き悩みするかな

と日出雄は口誦んだ。併し彼は、危険なる家に留まり居るも却つて安全なるべ  
し、窮鳥懐に入れば獵夫も之を殺さずとの金言と神力とを頼みとして日を送つて  
居たのである。其當時の日出雄の述懐に左の如き一節がある。

日出雄が天下萬民の爲に正々堂々と天地に愧ぢざる行動を採つて居ながらも、  
斯くの如く身を忍ばせ、秘密の行動を採らねばならないといふのは、要するに上  
に卑怯なる爲政者が居るからである。内強外弱唯々諾々として外人の鼻息のみを  
伺つて居る日本外交官及内閣員の少しでも心配せない様との慮りからである。其

癖くせ日本にっぽんの官憲くわんけんは支那しなや朝鮮てうせん、露國ろこくに對たいしては、隨分ずぶん鼻意はないき氣荒あはく凡すべてが威壓ゐあつてき的てきであるに拘かはらず、英米えいべいに對たいしては、頭あたまから青痰あをたんを吐はきかけられても小言こことひと一つ言いひ得えない腰こしめ拔ぬけばかりだ。皇道くわうだう大本おほもとの勢力せいりよくが大きいと云いつて、所在あらゆるあつぱく壓迫あつぱくを加くはへ遂つひには純じゆ忠無二んちうむにの大思想家だいしさうかに、無理むり槍やりに冤罪ゑんざいを被かむせたり、天地てんちの大神おほかみの宮みやを毀こぼつたり、色々いろいろざつた雜多あくせいの惡政暴虐いばうぎやくを加くはへ、正義せいぎの團體だんたいを見るみに惡逆無道あくぎやくむだうを以もつてする、實じつに呆あきれ果はてたるものである。而しかも東洋とうやうの君子國くんしこく、浦安國うらやすくにと自惚うぬほれて居ゐるのだから堪たまらない。自分じぶんが警戒線けいかいせんを悠々いういうと破やぶつて、神界しんかいの經綸けいりんを行おこなふべく遙々はるばるやつて來きたのに對たいして、上下しやうからう狼狽らうばい、一千圓いつせんえんの懸賞けんしやう附つきで搜索そうさくを始はじめかけたと云いふ、實じつに氣きの毒どくなものだ。然しかし決けつして心配下しんぱいくださるな、滅多めつたに諸君等しよくんらの爲ためにならない様やうな拙劣へたな事ことはせないから、世界平和共榮せかいへいわきようえいの大理想だいいりさうを實行實現じつかうじつげんの爲ためだ。君等きみらの様やうな尻しりの穴あなや鞞丸かうぐわんで、一體いつたい今日こんにちの世よの中に於おいて何なにが出來できると思おもふか、どうして萬世一系ばんせいいつけいの國家こくかが守まもつて行いけるか、不義ふぎと罪惡ざいあくとの淵源えんげんたる君等きみらから、少しは眼めを覺さまして呉くれねば、東洋とうやうに國くにを安全あんぜんに建たてて行ゆく事ことは不ふ可能かのうだ、現げんに今日こんにちの狀態じやうたいは何なんだい………  
又張作霖またちやつさくりんに關くわんしては左さの如ごとく評ひやうしてゐた。

「東三省の張作霖も随分支那人としては豪い男だ、コソコソと畫策を廻らすのも中々上手だ。そして自分は肝心の金を出さず、人に苦勞さして自分がそつと甘い汁を吸はふといふのだから堪らぬ。併し資本なしの商賣は結局駄目に了るだらう。利は元にありだ。資本主が最後の勝利だ。盧氏果して永遠に張の頤使に甘んずるで在らうか、直奉間の引掛合も久しいものだが、何れ遠からぬ中に何とか一幕の芝居が打たれるだらう。云々」

(大正一四・八 筆録)

### 第三篇 洮南より索倫へ

## 第一五章 公爺府入

日出雄と守高は平馬氏の宅に暴風を避け、眞澄別以下五人は猪野敏夫氏の春山醫院に陣取つていろいろの豪傑話に耽り、守高は柔術の實習や講演をやつて、大にメートルを上げてゐる。そして守高は摩利支天、名田彦は一億圓、眞澄別は泰然自若、岡崎は霞ヶ關と云ふ仇名をつげられた。猪野は鄭家屯の日本坊主を毆つた話や、大川金作のローマンスの追懷談に花が咲いて居る。そして東三省一の美人と云ふ支那藝者が猪野に秋波を送つた事などを氣樂さうに喋舌り立て、春の陽氣を漂はしてゐる。朝から晩まで摩利支天に一億圓、山田に王元祺等の豪傑連が柔道の練習をやつてゐたが、日出雄が行くと直ぐに中止して了つた。副官の秦宣は「オチコ」の棒に吹出物が發生し、膿汁を拭いた手も洗はずに食器をいぢるの

で病毒が感染する等と云つて日本人側に嫌はれてゐた。

愈公爺府入りが定まり、順路の地圖を、支那の某將校から借り來り、王府まで二百支里、最高山の北だなどと、頻りに地圖に眼を注いだ。眼鬼將軍の岡崎は佐々木や大倉のやり方について大變な不平を洩らし、  
先生を中途まで送りとどけた上、一度奉天へ歸つて彼等二人のやり方を調査す

る積りだ。萬一彼奴等がようやらぬのなら、自分は北京へ行つて呉佩孚や趙倜と會つて此大事業を成功させる……」  
等と捨鉢を云つてゐる。時々風の吹廻しが悪いと變な事を云ふので日出雄も困つてゐた。

葛根廟には馬賊の根據地があつて大集團をなしてゐるさうだ。近日の中に女の隊長が洮南に向つて襲來するとの急報に、支那の官憲や駐屯軍が驚いて、騒々しく動揺し初めた。

三月二十二日の午後四時頃、王天海は蒙古の隊長張貴林や公爺府の協理老印君と共に着洮した。そして愈奥地入りの準備にとりかかった。張貴林は日出雄に向つて云ふ。

「此先には數千の馬賊團が横行してゐますが、何れも自分の部下許りだから、決して先生に害を與へませぬ。私は今回自治軍の旅團長に選ばれましたから、安心して下さい。蒙古男子の一言は金鐵より堅う御座います。先生の爲には一つよりない生命を擲うつてゐるのですから」

等と云つて勇ましく腕を撫してゐる。

暫らくすると佐々木、大倉の兩人が日出雄の奥地入りを送るべく、遙々奉天からやつて來た。さうして岡崎と議論の衝突を來たし、岡崎の機嫌がグレッツと一變し、

「俺はこれから奉天へ歸つて張作霖を叱りつけ、自由行動を採つて見せる……」と頑張り、サツサと停車場を指して出て行つた。佐々木が驚いて停車場へ駆けつけ、危機一發の發車間隙に漸く岡崎を和め、連れて歸つて來たので一同は漸く安心した。

「乾坤一擲の大事業を策し乍ら、今から内輪揉めが出来ては到底駄目だ。満州浪人は大和魂が缺けてゐる。あゝ自轉倒島では思慮淺きものの爲に過られて身の置所なき破目に陥り、今又蒙古の野に來て日本人の爲に過られ、千仞の功を一簣に缺くやうな形勢になつて來たのも、小人物の小膽と高慢心と自己本位の衝突からである。少し位の残念口惜しさが隱忍出來得ない様な事で、何うして此大事業が成功するか。眞澄別もあまり泰然自若すぎはせぬか。此際兩方の調停を計らねば

なるまい……」

と日出雄は吾知らず呟いた。眞澄別の仲裁によつて同志の間は、もとの平和に歸し、岡崎も再び駒の首を立直し、奉天歸りを思ひ切り蒙古の奥地へ侵入する事をやつと承諾したのである。

待ち侘びし吉き日は今や來りけりいざ起ち行かむ蒙古の奥へ

日出雄が洮南在留中澤山の詩歌を詠んだ。その中の數首を左に、

十二日過ぎてゆ陽氣一變し春立ち初めし心地しにけり

洮南は安全地帯と思ひきや馬賊の横行いとも烈しき

總司令一日も早く來れかし汝を待つ間の吾ぞ淋しき

十四夜の月照る下の蒙古野に圓を描いて小便をひる

國人に一目見せばや蒙古地を照らす御空の珍の月影

山も海も見えねど蒙古の大野原行く身は獨り魂躍る  
天か地か海かとはかり疑はる蒙古の廣野にひとり月澄む  
月見れば心の空も晴れ渡り天國にある心地こそすれ  
スバル星西に傾き初めてより早や地の上に霜は降りける  
ドンヨリと曇りし空に日は鈍し小鳥の聲も頓に靜まる  
支那蒙古日本の人も吾爲に心碎きて守る嬉しさ

三月二十五日の早朝、支那旅宿義和糧棧から老印君、日出雄、岡崎、守高、王通譯は三臺の轎車に分乗し洮南北門より馳走し、洮兒河の橋を渡つて北へ北へと進み行く。寒風烈しく吹き來り轎車は顛覆しさうな危険を感じて來た。副官温長興は數名の兵士と共に騎馬にて前後を守り行く。途中守高の乗つてゐる轎車が路傍の溝の中へ顛覆し、守高、王通譯は溝の中へ投げ落され、馬夫と共に轎車を道路へ引き上げてゐる。其日の午前十一時に六十支里を経た三十戸村に着き、此處にて晝飯を爲す事とした。ここには支那の警察もあり、兵營も建つてゐる。旅宿

の家の柱には「莫談國政」と云ふ赤紙が貼りつけてある。之も専制政治の遺物だらう……。此處まで来る途上、轎車の中で日出雄はセスセーナ（放尿）を煙草の空罐になし、車外に捨てようとして、岡崎の支那服の上に零した。あまり寒氣が酷しいので、忽ち膝の上で凍つて了つた。岡崎は小便の氷を手に掴んでゲラゲラ笑ひ乍ら道路に投げ捨てた。旅宿に着いて雲天井の大便秘所へ行くと、毛の荒い汚い豚の子が半ダース許りも集まつて来て肥取人足の役をつとめ、遂には尻まで嘗めあげる。その可笑しさに日出雄はゲラゲラ吹き出してゐる。午後十二時四十分再び乗車、何十間とも知れぬ廣い幅の大道を愉快さうに進んで行くと、茫漠たる大荒原の前方に當つて黒ずんだ一の山が見えた。之は北清山と云ふ、さうして此邊には半坪が一坪許りの神佛の館が、彼方此方に建つてゐる。之は蒙古人が信仰の表徴となつてゐるのだと云ふ。

同日午後五時、七十戸村の催家店と云ふ牛馬宿に足を停めた。洮南からは百二十支里を離れてゐる。澤山の支那人の合客が泊つてゐて喋々喃喃として賭博をやつて居る。翌三月二十六日朝五時出發の豫定であつたが、二十支里ほど前方に當

つて官兵と馬賊との戦ひがあり、連長が戦死した場所であるから、朝早く出立するのは極めて危険だとの宿の主人の注意に依つて、八時に此處を出發する事とした。

正午前八十支里を馳驅して王爺廟の張文海の宅に着いた。王爺廟の喇嘛僧は三百人許り居る。珍らしき日本の喇嘛僧來りとして三百の喇嘛が、一人も残らず日出雄に挨拶に出て來る。そして里人や子供が珍らしげに集まつて來た。日出雄は携帶して來た飴を一粒づつ與へた。喇嘛も里人も地上に跪いて之を受けた。大喇嘛は部下に命じ洮兒河の鯉を漁らせ、七八寸から一尺五六寸位のものを八尾許り持つて來て日出雄に進呈した。是れが本年に入つて初めての漁獲だと云ふ事である。

午後二時日出雄が王爺廟を出發せむと轎車に乗つてゐると、大喇嘛が牛乳の煎餅十枚許り持つて來て日出雄に贈つた。釋迦が出立の時、若い女に牛乳を貰つて飲んだ事を思ひ出し、日出雄は蒙古の奥地へ來て直ぐに喇嘛から牛乳の煎餅を貰つた事を非常に奇縁として喜んだ。此時日出雄の左の掌から釘の聖痕が現はれ、

盛んに出血し淋漓として腕に滴つた。然し日出雄は少しの痛痒も感じなかつた。洮兒河の氷は處々解け初め、其の上を轎車が通過する危険さは實に名状すべからざるものがあつたが、何の故障もなく天佑の下に無事通過し、王爺廟の兵士や張桂林の馬隊に送られ且つ張文海の弟の部下に騎馬にて公爺府まで見送られた。王爺廟以東は赤旗を戸々に立て、以西は白旗を戸々に立ててゐる。公爺府は已に白旗区域である。ここは鎮國公、巴彥那木爾と云ふ王様が二百名の兵士を抱へて守つてゐる所である。日出雄一行が公爺府の近く迄行くと、公爺府の兵士が二十人許り捧げ銃の禮をして慇懃に迎へてゐた。日出雄一行は公爺府の傍なる老印君の館に午後六時頃無事に着いた。

(大正一四・八 筆録)

第一六章 蒙古の人情

蒙古人は昔から慄悍勇武であり、成吉思汗の鐵騎が天地を震撼せしめた事も知る所である。現今に於ても其容貌や風俗には昔の面影を残して居るやうである。朴直で慇懃で親しみやすいと同時に、又感情的にして喜怒哀樂は忽ち色に現はし、其の一面に於ては愚鈍にして、行藏頗る粗野淡泊で、さながら小兒の様である。併し乍ら近年支那人や露西亞人にいろいと壓迫せられたので、兩國人を見ること蛇蝎の如く嫌ひ、支那人露西亞人の奥地に入るものは、何れも無事に歸る事は出来ないのである。彼蒙古人は支那人、露西亞人に對しては不俱戴天の仇の様に思ふて居るが、之に反して日本人に憧憬することは實に案外である。彼等は大部分は今や全く生存競争の圏外に超然として、更に利害の觀念なく、牛馬、羊豚、駱駝などを唯一の伴侶として、茶を呑み、煙草を吸ひ、年が年中ねむつたり、食つたり、或は經を讀み、佛を念じ、死後の冥福を祈る外餘念なきが如く、敢て複雑な人生の苦難を知らぬのである。然し乍らもし何等かの動機に依つて、之を刺戟し、其性情を反撥するものがあれば、其處に必ず祖先の遺傳的性情を喚發するであらう。彼等が驛馬に鞭つて際限もなき廣野を疾驅し、男も女も縱横無

盡に鞍に跨り勇壯なる活動をやつて居るのを見れば、轉た古の勇敢なる民族の氣象を偲ばせるものがある。蒙古人は人に接する甚だ親切で、其同族知己の間に於ては勿論、外來未知の日本人に對しても一度相識るや一家擧つて之を款待するの風がある。日本人と聞けば假令一人旅でも親切に宿泊せしめ、一家擧つて同情歡迎し、些しも障壁を設けない。併し乍ら西洋人や支那人に對しては或は恐怖し、或は卑下し、容易に家へ入るを許さない。

日出雄が公爺府に入るや公府の兵士を初め、役人や村民などが嬉々として集り來り、隔意なく親切に茶を汲んだり、煙草をすすめたり、又炊事の手傳ひをしりして、非常に款待し、村人は一人も残らず日々訪ねきて、言語が通ぜないにも拘はらず、鶏肉や鶏卵や牛乳の煎餅や、炒米などを携へて來て親切に世話をした。公爺府の喇嘛僧は日々日出雄の傍に出て來て、鎮魂を受けたり、日本服を珍らしさうに眺めたりして歸つて行く。さうして蒙古の婦人は朝から晩まで日出雄の身邊を取り巻いて嬉しさうに遊んで居る。日出雄は公爺府王の親戚に當る白凌閣と云ふ十九歳になつた青年を、王の承諾を得て弟子となし、此男に就て蒙古語の研

究を始めた。白凌閣は蒙古人に似ず公爺府の役人から學問を習ひ、支那字や蒙古字をよく知り、且つ支那語をもよくした。日出雄は此白凌閣や村人と十日間程遊んで居る間に蒙古語を大略覚え、蒙古人と談話を交換するには餘り差支へない程度に迄進んだのである。

日出雄が公爺府に着いた二三日目の正午頃、協理老印君の館に遊んで居ると、王様が管内の巡視を終へて數十人の兵士と共にラツパを吹かせて歸つて來た。さうして王様の方から老印君の宅へ出張し、日出雄に面會し、通譯を介し種々と挨拶をした。此王は寶算正に二十三歳、さうして位は鎮國公で、巴彥那木爾と云ふ人である。色の白い凜々しい好男子であつた。日出雄は王様に土産として懷中電燈一個を贈つた。王は珍らしがつて幾度も押戴き嬉々として受け取つた。此の王様は未だ獨身で奥さまが定つて居ない。先年巴布札布の擧兵の時に其居城を支那兵に荒され、且つ財産を奪はれ、今は非常に財政困難に陥つて居るので、それ故妻君を娶るとなれば、王として非常な費用が要るので見合せて居ると云ふ事である。それに此の若い王様は北京へ參勤した際、支那藝者から梅毒をうつされ、大

變困へんこまつて居ゐるとか云いふ話はなしであつた。それから二三日にさんいちたつと公爺廟コンエメウの活佛くわつぷつが巡錫じゆんしゃくして來きて日出雄ひでをに面會めんくわいしたいと云いふので、日出雄ひでをは老印君らういんくんの宅たくで會見くわいけんした。此この活佛くわつぷつは三十前後さんじふぜんごの男をとこで、公爺府コンエフの王様わうさまの姉あねや妹いもうと三人さんにん迄まで妙みやうな關係くわんけいをつけて居ゐると云いふ生臭坊主なまぐさばうずである。此活佛このくわつぷつは日出雄ひでをが蒙古もうこの救世主きうせいしゆとして現あらはれたと云いふので敬意けいを表へうしに來きたのである。四五日しごにちすると蒙古もうこの各地かくちから、救世主きうせいしゆ來きたれりと云いふ噂うはさを聞きいて、遠とほきは二百支里位にひやくしりべらゐの所ところから、大車だいしゃや轎車けうしゃに乗のつて老若男女らうじやくだんぢよが救すくひを求もとめに來くる。餘あまり忙いそがしいので守高もりたかが俄喇嘛にはからマになり、澄すました顔かほで彼等かれらに鎮魂ちんこんの手傳てつたひをして居ゐた。

蒙古もうこの此地方このちほうの家屋かをくは總すべて矮小わいせうで不潔ふけつである。さうして男をとこも女をんなも若布わかめの行列ぎやうれつか襠褌しめしの親分おやぶんか、雜巾屋ざふきんやの看板尻かんばんしりでも喰くらへと云いふ様なボ口やうを身みに纏まとひ、平氣へいきの平左へいざでやつて來くる。又女またをんなは前頭部ぜんとうぶにいろいろの寶石ほうせきを飾かざり、耳みみには寶石ほうせきの環わをぶら下さげて居ゐる。さうして家柄いへがらの良よい所ところの女をんなは環わを三條みすぢ下さげ、中流ちうりうは二條ふたすぢ、下流かりうは一條ひとすぢの環わをブラ下さげて居ゐる。娘むすめは皆下みなさげ髪がみであるが、結婚けつこんすると同時どうじに髪かみを卷まいて頭あたま

の上うへにクルクルと束たばねて居ゐる。さうして下女げぢよには耳みみに環わが無いなので、一見いつけんして其その婢はしためたる事ことが判わかる。蒙古人もうこじんは家いえの中なかであらうが門口かどぐちであらうが、痰唾たんつばを吐はき、手涕てばなをかみ、手てについた涕はなを自分じぶんの着衣ちやくいに無造作むざうさにこすりつけて居ゐる。何れいづの家いえにも牛馬ぎうば、羊豚やうとん、鶏とりなどが澤山たくさんに飼かうてあり、朝あさになると家いえの周圍まはりに寝ねて居ゐる牛馬ぎうばなどは、蒙古犬もうこいぬに導みちびかれて遠い遠い山野さんやに草くさを食くひに行ゆき、日没前にちぼつまへになると又犬またいぬに守まもられてノソリノソリと家いえの周圍まはりに歸かへつて來きて寝ねて了しまふ。澤山たくさんの牛馬ぎうばが處構ところかまはず糞くそをひるので、蒙古人もうこじんは牛馬ぎうばの糞くそをかき集あつめて大おほきな山やまを作つくるのが何なによりの仕事しごとである。そして家いえの壁かべや垣かきなどに牛糞ぎうふんをベタリと塗ぬり、又高粱またかうりやうや炒米チヨオミイの容器ようきは楊やなぎの枝えだを編あんで籠かごを作つくり、牛糞ぎうふんで目めをつめて、食糧品しよくりやうひんの容器ようきとして居ゐる。温突をんどるを焚たくのも茶ちやを沸わかすのも、高粱かうりやうの粥かゆを煮にるのも、皆牛糞みなぎうふんである。これだけ牧畜ぼくちくの盛さかんな蒙古もうこに於おいて、牛糞ぎうふんを焚たかなかつたら、蒙古もうこの民家みんかは牛糞ぎうふんで埋うづまるであらう。牛糞ぎうふんの山やまは到いたる所ところに築きつかれてある。さうして内地ないちの牛糞ぎうふんのやうに妙めうな臭氣しうきはない。羊肉やうにくをあぶつて食くらふのも鶏肉とりにくをあぶつて食くらふのも、皆牛糞みなぎうふんの火ひを用もちゐるのである。潔癖けつぺきな日本人にっぽんじんは土地とちに慣なれる迄までは、何れいづも顔かほをしかめ鼻はなをつまんで困こまつて

居る有様だ。

蒙古人は日本の古代人のやうな魂が残つてゐて、嘘と云ふ事は決して知らない。それ故に嘘と云ふ言葉もなければ、違やしないかと云ふ疑問詞もない。此點に於ては實に氣持の好い國人である。だから蒙古人は一度此人と信じたならば、其人が如何なる惡人であらうとも、そんな事には頓着なく因縁だとあきらめて、終身其人の爲に生命までも擲出すと云ふ健氣な人種である。之に反して最初に此人はいけないと思つたならば、其人が後に如何程改心して善人となつても信用しない。日出雄は彼所此所から招かれて公爺府の民家を一戸も残らず訪問し、種々の款待を受けて、面従腹背、阿諛諂佞の内地人に日夜接近し、不快でたまらなかつた日。出雄は、此蒙古人の潔白な精神に非常な満足を感じた。蒙古人に小さい飴一個を與ふれば大きな男が喜んで頂き、嬉しさうに舌鼓を打つて幾度も感謝の意を表し、まるで内地の三つ子のやうである。さうして空氣は非常に乾燥し、寒國にも似ず雪は餘り澤山降らない、何程深雪だといつても高が一寸位積るのが通例である。さうして風は非常に寒いが其割には身體を害せない、また呼吸器を傷つけないの

が妙である。

蒙古の喇嘛や貴人はハムロタマガと云ふ寶石製の徑一寸位な香器を携帯し、初めての人に接する時には、其器の中から非常に香の好い粉末を取り出して客に嗅がすのを非常の待遇として居る。朝から晩まで風は激しく、黄塵の立ち上る蒙古では第一鼻がつまつて困る。然るにこのハムロタマガの香粉を鼻に塗りつけると、不思議にも鼻が透き通り気分がよくなる。蒙古人は非常に柄の長い太い煙管を携帯し、朝から晩迄茶を飲んだ「あいま」には煙草をくすべて居る。小さい杯の様な雁首の皿で、銀製、眞鍮製のものが多い。さうして吸口の方はシヤコ、瑪瑙、翡翠などの寶石をもつて作つて居る。蒙古人は此の煙管に最も金を費すと云ふ事である。

蒙古人は一夫多妻主義である。長男を太子と云ふ、太子のみが妻帯して家を継ぎ、次子以下は残らず喇嘛になつて了ふ、これは佛教の信仰からだと云ふ。それ故止むを得ず一夫多妻となり、老印君の如き六十七八歳になつても七人の妻君を持つて居る。さうして妻君を貰ふには牛を五頭或は六頭、極上等の美人になる

と十頭と交換する風習である。白凌閣の妻君は牛五頭と交換されたと云ふ事であった。男子は十八歳でなければ蒙古の人数に入れない。さうして女は残らず人口から除外されてゐる。夫故蒙古の人口は完全に調査する事は六ヶ敷い。葬式など至つて簡単で、親や兄弟を後に残して死んだものは不孝者だと云ふて山の谷に棄てに行き、澤山の喇嘛がゴロついて居ても御經一つ上げてやらない風習である。蒙古人の容貌は男女共日本人に酷似し、些しも支那人に似てゐないのは不思議である。支那人は妻が男客の傍へ行く事を非常に嫌ふが、蒙古の男子は一切無頓着である。それ故自分の家内や娘を安心して外來の客の世話をさせる。その代り蒙古の婦人は極めて朴直で夫を持つた以上は決してその他の男に關係しない。それ故いつも蒙古の婦人が交る代る日出雄の無聊を慰めむと毎日胡琴を弾じ、美聲を張り上げて面白き歌を謡ひ、日出雄の身邊には何時も春陽の氣が漂うて居た。又日出雄の書生白凌閣や蒙古兵等も日々胡琴を弾じ、歌を謡ひ軍旅にある日出雄を慰むる事に勉めたのである。

(大正一四・八 筆録)

第一七章 明暗交々

日出雄が公爺府の協理老印君の包に宿泊する事三日の後、隣家の丑他那寸止と云ふ人の家を開放して一行の宿泊所に宛てられた。

遠近の淳朴なる蒙古人は「ナラヌオロスン、イホエミトポロハナ、イルヂエーイルヂエー」イルヂエー」と云つて慕つて来る者日々其數を増加するのみである。

右の蒙古語を譯すれば、日出國の大活神來り、との意味である。

各人喜んで鎮魂を乞ひ、此國にて最も多い眼病、皮膚病を初め胃病、梅毒、齒痛、腦病の治療を受け、全快して神徳を感謝し大活神と崇敬して居る。眼病、皮膚病、梅毒等は共に不潔から來たのが多く、又花柳病の傳染するものと云ふ事は少しも悟らない。單に乗馬の結果と心得、病毒の傳染に任せて居るのである。殊に喇嘛僧の梅毒に罹つて居るものは殊の外多い。蒙古の婦人は澤山に寶石や大きな眞珠を頭に飾つて居るが、何れも遼河や黑龍江中に蕃殖した直徑一尺餘りもある。

る鳥貝からすがひの中から採取さいしゆしたものである。蒙古人もうこじんは貝類かひるゑを食料しよくれうとせない、幾百千いくひやくせん年ねんを経た鳥貝からすがひが棲息せいそくして居るのである。蒙古人もうこじんの食料しよくれうは支那内地しなないちに接近せつきんした東蒙ひがしも古方面うごほうめんでは、高粱かうりやうに大豆だいづ、粟あは、豚ぶたなど支那人しなじんに似た食物しよくもつを攝とつて居るが、奥地おくちの純蒙古地帶じゆんもうこちたい公爺府コンエフあたりでは牛乳ぎうにうと炒米チヨオミイを常食じやうしよくにして居る。之これに肉にくを加くはへ雑炊ざふすゑにして食ふ事くひこともあるが、肉にくを混まぜるは最上等もつとじやうじよくの部ぶである。普通ふつう一般いつぱんの家いへでは肉にくなぞの贅澤品ぜいたくひんは滅多めつたに食くはないのである。米利堅粉メリケンコでウドンを拵こしらへ羊ひつじの肉にくを混まぜて食くふのが第一番だいいちばんの馳走ちさうである。牧畜ぼくちくが祖先そせん以来いらい唯一ゆゑいつの事業じげふで、随したがつて牛うしや羊ひつじの乳ち汁ちが豊富ほうふであり、日々ひびの食料しよくれうに供きようして居る家いへも多い。彼等かれらは日本人にっぽんじんの如ごとく牛乳ぎうにうを沸わかしては香のまず、冷つめたい儘ままで呑のみ、又また色々いろの料理れうりに作り分わけてゐる。先まづ牛乳ぎうにう壺つぼの上部じやうぶに浮ういた脂肪分しぼうぶんからバターを採とり、下部かぶに沈澱ちんでんしたものは之これを布ぬのの袋ふくろに入れて汁しるを壺つぼに落おとし、袋ふくろの中なかに溜たまつた糟かすを固かためて牛乳餅ぎうにうもちを作る。之これを奶豆腐ないとうふと稱となへて居る。保存ほぞんに便べんなる所ところから或地方あるちほうでは主食物しよくぶつとなり、菓子くわしの代用品だいやうひんともなり、時ときとしては貨幣くわへいの代りかはとし物々交換ぶつぶつかうくわんの單位たんゐともなり、實じつに重寶ちやうほうなものである。又またバターと奶豆腐ないとうふとを採とつた残りのこから酸乳さんにゆつが取とれ、炒米チヨオミイに注そいで食くふべき唯一ゆゑいつの調てう

味料となるのである。右の外牛乳を蒸發せしめて牛乳酒を造る。牛乳と炒米ばかりを年中食つて居ながらも蒙古人は體格が頗る立派である。又蒙古人は支那人の如く一切野菜を食はない、家畜が多いため野菜が育たないのが一つの原因かとも思はれる。而かも壞血病に罹らぬのは草を常食とする牛の乳を主食としてゐる結果である。斯の如く牛は蒙古人に取つての生命の母であり、馬は總ての交通機關である。南船北馬といふ言は北大陸の蒙古へ來て初めて知らるる言葉である。一日蒙古人の丑他那寸止や王得勝など云ふ公爺府の兵士や、副官の温長興と俱に公爺府の裏山へ兔狩に出掛けた。兔狩の道具は一尺五寸許りの先の曲つた棒で、その尖端に三寸許りの紐を結び着け紐の尖に一塊の鐵の重りが付いて居る。兔の飛び出すのを待つて此の棒を巧妙に投げ付ける。さうすると棒の尖にブラ下つて居る鐵片が、グルグル舞ひ乍ら兔に當ると紐が捲きつく仕組である。蒙古人は煙管や火打石と共に七ツ道具の一として常に此棒を携帶して居るのである。併し蒙古犬の四五匹を以て兔を圍む時は容易に捕へる事が出来るのである。

日出雄は温長興、岡崎鐵首と俱に國見山に登らむとした時、シーゴーと稱する

蒙古特有の猛犬に包圍され、噛み付かれようとしたので、副官の温長興、岡崎鐵首の二人が、洋杖を振り上げたり石を拾つて打ち付けたりなど防戦に努めた。ワンワンと吠ゆる猛犬の聲を聞き付けて瞬く間に遠近より數十頭の猛犬集り來り、三人を十重二十重に取巻き牙をむき出して飛びかかつて來るその恐ろしき勢を物ともせず、二人は一生懸命に闘つて居る。日出雄も一生懸命になつて祝詞を大聲で唱へると、大きな日本人の聲音に辟易してか、さしもの猛犬も尾を下げて四方に散亂して了つた。是より當地の犬は三人を見ると尾を下げて小さくなつて逃げる様になつて了つた。

守高は公府の役人の家へ病氣鎮魂の爲、稍遠方の家へ出掛けた、其處へ鎮國公より重役が來て、失禮ながら日出國の大活佛様に來館を願ひ度いと申込んで來た。日出雄は通譯と共に早速公府内に出て行つた。鎮國公は大に喜んで通譯を介して種々の談話を試み、且つ今回の入蒙に就ての經緯を尋ねるのであつた。王元祺は内外蒙古救援の義軍を起す事を諄々として説いた。王は非常に喜び其好意を深く感謝した。そして力一杯の馳走をして日出雄を待遇したのである。東西二百里、



ある。此話を公爺府の重役が心配相な面して側に聞いてみたが、すぐに老印君を招いて、鎮國公の館にあわただしく駆けつけて行つた。二三時間ばかりして、老印君は六ヶしい面をして歸つて來た。そして岡崎に向ひ、

「日本の方々は東三省の護照を有つてゐますか、護照の無い方は一日も此處に居つて貰ふことは出來ませぬ。殊に蒙古の獨立などを企てる人を世話することは出來ぬ、王様初め此白髮首迄飛んで了ひますから……。蒙古へお出でになるのなら一度奉天迄歸つて護照を貰つて來て下さい」

と態度をガラリと變へてしまつた。温長興は之を聞くと大に怒り、

「怪しからぬ事をいふ爺だ。盧司令から吾々一行を世話する爲に澤山の金を頂いて來乍ら、今となつて斯様なことを老爺の口から聞くとは不都合千萬だ。その上吾々をこんな陋屋につつまみ、南京蟲責めにあはしよるとは何の事だ。兔も角一應奉天まで歸つて、司令と談判して來る」

と息巻いてゐる。老印君の態度が一變したのは岡崎の大言壯語が祟つたのである。鎮國公はじめ重役連は支那政府や張作霖を怖れたからであつた。岡崎はまたソ口

ソ口不平を洩らし出した。

「一體盧占魁といふ餓鬼や、俺をこんな奥の方へ突込みよつて、佐々木や大倉と腹を合せ、先生はじめ吾々日本人をペテンに掛けよつたのだらう、ようしツ、俺にも考へがある。之から奉天へ歸つて何も彼も盧の祕密をすつば抜いてきます。又佐々木、大倉の奴め、洮南以西は馬賊が徘徊するから、一切の荷物や金銭などは一錢も携帶してはならぬ、曼陀汗や老印君に金子が渡してあるから、一切萬事不自由のない様にしてくれると吐かしよつたが、此ザマは何だ。毛布一枚あるでなし、南京蟲の巢窟にアンペラ一枚布いて寝られるか、そして金子を一文も持つて行くな、など吐しよつたが、先生がそれでもチツト許り懐にソツと入れて持つて来て下さつたお蔭で、鶏卵も買ひ又旅費も出来たのだ。彼奴等の云ふ通りにして居つたなら、自分等は蒙古の奥で餓死するより仕様がなないのだ」

とブウブウ云ふて怒り出す。併し岡崎の怒るのも無理はない。温突は焚いてあつても毛布一枚ないので、外套をかぶつて、夜は寝るといふみじめな有様であつた。日出雄が洮南府で二萬圓の旅費を懐中し、日本人一行の費用に充てむとしたのを

佐々木、大倉、唐國別から色々と言きつけられ、遂に彼等に渡して終つたのであつた。兔も角温長興を馬で走らせ、洮南府の眞澄別一行に面會させ、公爺府に於ける一行の現状を報告せしめ、一日も早く荷物一切を送つて來て貰はねば、何うする事も出来ないといふ手紙を持たせて出發せしむる事に定めた。

王元祺は朝から晩まで蒙古人の家に行つて麻雀と云ふ賭博に耽り、少しも通譯の用をしない、一言いつても直ぐに腹を立て、

「私はお間に合ひませぬから歸らして貰ひます」

など、足許を見込んで駄々をこねるので、日出雄も大に困り、筆談を以て白凌閣を介し、蒙古人との一切の交渉に當らしめてみた。守高は得意の柔術を蒙古人に寒い風の吹く戸外で教へてみた。一見しても一癖あり相な武術面をしてゐるので、蒙古人は薄氣味悪く感じてゐたけれ共、物珍らしさに一二回の柔術の稽古をやつて見た。守高は………こんな野蠻國の人間には自分の力を見せておかねば輕蔑されると云ふ考へから、蒙古人の手首の急所を力一杯掴み締めたので、蒙古人は青くなつてへた巴つた。それを蒙古人は柔術の手といふ事は知らず、且つ言葉の通じ

ない所より非常に守高を悪黨と誤解し、村中の蒙古男子が王得勝の家に集まつて、暗夜に乘じ守高を鐵砲で討ち殺さうといふ相談を定めた。白凌閣は蒙古人の事でもあり、其相談の結果を心配して日出雄に密告した。そこで日出雄は王得勝に腕時計や若干の金子を與へ、白凌閣を介して柔道の大略や守高の好人物たる事を云ひ聞かせたので、蒙古人も漸く了解して、守高に對する悪感は稍薄らぎ、幸に無事なるを得たのである。此時の日出雄の心配は一通りではなかつたのである。

老印君は温長興のきびしき追撃に堪へかねて、俄に自分所有の新宅に日出雄一行を移轉させる事とした。老印君の宅から西南に當り殆ど五丁許りの距離がある。まだ壁も十分乾いてゐないので、盛んに楊の枯枝を燃やして室内の乾燥を圖つた。そして牛車一臺の薪は五十錢であつたが、壁を乾かすのに二臺許りの薪をくすべて了つた。漸くにして四月四日（舊三月二日）新宅に移轉し、ヤツト一安心した。そして温長興に手紙を持たせて、盧占魁や日本人側へ公爺府に於ける困難の事情を報告せしめ、且眞澄別一行の一日も早く着府するのを待つてゐる事を傳へしめた。温長興は駒に鞭ち勢ひよく洮南を指して驅け出した。ところが其日の午後六

時頃望遠鏡を以て洮南方面の原野を眺めてみると、四臺の轎車がまつしぐらに馳けて来るのが目についた、よくよく見れば眞澄別の一行が澤山な荷物や食料を満載して来るのであつた。此時の日出雄、岡崎の喜びは一通りではなかつた。

一同は地獄で佛に會ふたやうな心持になつて打喜び、互に嬉し涙に眼を曇らした。澤山の荷物や食料が来たので老印君は驚いたと見え俄かに日本人に對する態度がガラリと變つて来た。考へて見れば老印君の日本人一行を疑つたのも無理はない。何れも北國雷で何一つ目ぼしい携帯品もなく、どこの落人が出て来たか分からぬ様な體裁だつたからである。老印君が狡猾で知らぬ顔をしたのか、但しは日本側の三人組が日出雄一行をだまして奥へやつたのか合點が行かぬと、一行は怪しみに堪へなかつた。そして老印君に對する悪い感情も次第に剥げて来た。眞澄別に従つてやつて来た日本人は名田彦、猪野敏夫の兩人であつた。

之より先き黒龍江方面の馬賊團の頭目と稱する團栗眼の物騒な面した男が三人岡崎の許へ尋ねて来て、自治軍に参加させてくれないかと掛合つた。岡崎は早速手紙を認めて盧占魁と佐々木へ宛て相談に向はしめた。

第一八章 蒙古氣質

蒙古の宗教は皆喇嘛教で戸毎に佛壇を鄭重に祀つてゐる。そして喇嘛寺は凡て西藏式に建てられ、矮小な貧弱な蒙古人に似ず、巍然として雲に聳へ、遠方より凝視すれば恰も立派な洋館が立竝んだやうに見える。さうして一つの喇嘛廟には、最も少いのが三百人、多いのになると七八萬人の喇嘛が廟を中心として、普通民家とは變つた立派な居宅を構へて大市街をなしてゐる。先年支那政府に背いて獨立を宣言し、蒙古皇帝となつた大庫倫の活佛が住んで居る喇嘛廟の如きは、三十萬の喇嘛僧が澤山な住宅を竝べて住んでゐる。現今では皇帝の位も大活佛の權威も全然有名無實になつて了ひ、露西亞の赤軍が自由自在に我儘を振舞つてゐる。さうして大庫倫には一百七十八萬の人口があつて、日本人も數名住つてゐると云

ふ事である。それから英、米、佛、露の人間が二萬許り住居し、ヤソ教の教會堂も建つて居るが、蒙古人の信者は一人もないと云ふ事である。喇嘛教と云ふのは俗稱であつて、喇嘛は蒙古語の僧侶といふ意味で、その實は佛陀教と云ふのが正當である。蒙古では各地の王様よりも活佛の方が上位に居り、國民の信用も尊敬も王様に比して非常に高い。蒙古は喇嘛の國と云はれる程あつて、總人口の四分の一以上は喇嘛である。何れも暗愚な無學な賣主坊主計りであつて、蒙古人の尊敬的となつてゐる活佛でさへも、自分の地位を利用し、澤山な女を姦し、梅毒に惱んで、病毒の傳播を行つて居るのが多い。

一般の蒙古人は貞操の念強く、有夫姦等の忌はしい醜行は微塵も無い。さうして一夫多妻であり乍ら、狭い一つの家に澤山の女房が一所に暮して居て、少しも悋氣喧嘩が起らないのである。氣候の故と淡泊な食物の影響であらうが、蒙古人は餘り色情等には趣味を有たぬ人間らしい。

それに引替へ衆生濟度の地位にある高僧連は盛んに醜行をなし、風俗壞亂の首魁者となつてゐる。然し乍ら蒙古人は活佛の醜行に對しては少しも咎めない。活

佛のお手が掛つた娘は佛縁に依つて立派な夫に嫁しづく事が出来るると云つて寧ろ歓迎してゐる風である。

日出雄は數千里を隔てた蒙古の奥へ来て、其人民からは神の如くに尊敬され、心限りの待遇を受けて、全く大神様のおかげだと喜んで居た。日出雄の神徳は赫々として旭日昇天の如く、遠近の蒙古人に取圍まれて面白き月日を送つてゐた。一時老印君等の支那政府に憚つて稍冷遇をされた傾きがあつたが、之は老印君其外公爺府に仕へて居る二三の役員のみに限つたので、一般人からは少しも冷遇は受けなかつた。又内地人や支那人の狡猾なるに比べて蒙古人は眞に天真爛漫、その性情は子供の如く、神代の人の如くである。現代の如き惡化した世の中に、こんな天國があるかと思へば、まだ世の中に活きた生命のある事を楽しく思はれるのである。

さて四月十四日、西北自治軍總司令上將として盧占魁は二百人の手兵を引率し、轎車に乗つて無事公爺府に到着した。盧は直ぐ様假司令部に入り、其足で日出雄の宿舎を訪ねて來た。日出雄は盧が來たと云ふので門口に出迎へると、盧占魁は

大勢の兵士の前で日出雄に抱きついて嬉し泣きに泣いた。日出雄の目にも感慨無量の涙が浮んでゐた。それから盧占魁は鎮國公から送られた純白の乗馬を日出雄に送り、且つ澤山の菓子や果物をすすめて旅情を慰めた。

其後は眞澄別が代つて凡ての事務を盧と協議する事となつた、日出雄は歌を詠んだり、詩を作つたり、日記を書いたり、喇嘛や村人に覺束ない蒙古語で神の教を説き諭してゐた。

公爺府の傍に小やかな家があつて、その主人は丑他阿里太と云ひ二人の妻君を持つてゐる。さうして一男二女があり、長女を丑他俱喇と云ひ、日出雄が門前を通ると主人が、

「モンドユー、イホエミト、ポロハナ、イルジー、イルジー」  
と頻りに招くので白凌閣と共に小さい蒙古包の中に這入ると、

「今日は喇嘛僧を二十人許り呼んで、御馳走をするのですから、ナラヌオロスのポロハナに先に食つて頂き度い」

と云つて、メリケン粉の團子に羊の肉を餡とし、爐の上で牛糞の火で茹でた團子

を食へとすすめる。日出雄は妙な臭のする團子を勧められ迷惑したが、蒙古人の好意を否む譯にも行かず、感謝して二つ三つ頬張った。其の家の妻は頻りに茶を汲んだり、團子を持つて来て勧める。日出雄は、

「此の上團子は腹が大きくて食へない」

と云つて體よく斷り、茶と煙草を頻りに乾燥した口の中へ放り込んでみた。此處の娘の丑他俱喇は當年十四歳で珍らしい美人であり、年に似合はぬ大柄であつた。ウツタグラと云ふ名義は東洋一の美人と云ふ意味である。どこともなく威嚴が備はり、色が白くて目元が涼しく、丁度觀世音菩薩の様な姿である。日出雄は此の少女に向つて、

「チンニ セーナ ホンモン（汝、美人）」

と稱揚すると、その父親が直ぐに日出雄に向つて、

「ピーシャ、ムツトルテ、チンニン、ウツタグラ、シャルトゲヤ」

と云つた。此意味は、

「貴下は立派な人である。私の娘ウツタグラを貴下にあげませう」

と云ふのである。そこで日出雄は何とも答へず笑つて歸つて来た。さうすると其翌日から少女がボロボロの着物を立派な衣服に着換へて、日出雄の側へやつて来て、茶を汲んだり、ハンケチを湯に絞つたりして、身を忘れて世話をした。よくよく聞いて見ると『日本の活佛だから決して妻子は無いであらう。此娘を上げたならば、屹度自分の子として相當の處へ嫁けてくれるだらう』と親心から思つたのだと云ふ。蒙古人は日本人を見ると『自分の子をやらうやらう』と云ふ癖がある。一行の日本人も、あちらや、こちらで『子をやらうか』と云はれて有難迷惑を感じてゐた。

或日ウツタナストの隣家に三十人許りの喇嘛が集つて朝の六時頃から夕方まで陀々佛陀々々佛陀とのべつ幕なしに經文を擧げてゐるので日出雄は怪しんで其の家に這入り覗いて見ると、一人の大病人を眞中に置いて喇嘛が一生懸命の祈願をやつて居た。病人はダンダンと苦しむ許りで少しも快方に向はない。喇嘛の云ふのには、

「一日も早く國替さして天國に救ひ、病氣の苦を救ふ爲に臨終の早くなる様に祈願してゐるのだ」

と云つてゐる。そこで日出雄は家の主人に向ひ、

「即座に此病氣をなほしてやらうか」

と云つたら、主人は低頭平身して祈禱を頼むだ。日出雄は直に數多の喇嘛に會釋

し、病人の額に軽く手をのせ「惡魔よ、去れッ」と一喝した。忽ち大熱は醒め、

其場で病人がムクムクと起上り、嬉しさうにゲラゲラ笑ひ出した。

あまりの奇瑞に喇嘛僧は驚いて、益々日出雄を大活佛として尊敬するやうにな

つた。守高と名田彦とが柔術の自慢を朝から晩まで引つきりなしにやるので、岡

崎や王元祺が立腹してゐる處へ、名田彦が岡崎の手を握つて自慢げに「柔術はこ

んなものだ」と云つた所、岡崎はカツと怒つて小便のしてあつた金盥を名田彦の

顔にぶつつけた。名田彦は非常に口惜がつたが、岡崎の權幕に恐れ、且つ日出雄

になだめられて齒切しりし乍らヤツと胸ををさめた。それから日本人側は白凌閣

が日出雄と眞澄別に對してはいろいろの用を聴くが、他の者の云ふ事を聴かない

と云ふので大變に白凌閣を憎み、猪野敏夫等は木片を以つて白凌閣の横ツ面を厳しく殴りつけた。忽ち顔面脹れ上り、血が滲み出た。白凌閣は顔を抱へて、蹲まり、涙を流して氣張つてゐた。白凌閣の父は同じ公爺府の近い所にあるけれども、白は此亂暴な日本人の仕打を父に告げ様ともせず一歩も動かずに泣いてゐた。日出雄は見兼ねて白の顔に焼酎を吹きかけてやり、且鎮魂を施した處、三十分間程の間に脹は直り、顔も元に復して了つた。日出雄は白を裏山に散歩を名として連れて行き、覺束ない蒙古語で、

「お前は猪野君にあんなひどい目に會はされても、自分の親に知らしに行かなかつたのは感心だ」

と云つて褒めた處、白は喜んで言ふやう、

「私は大先生の家來になつたのですから、最早や父に頼る事は出來ませぬ。さうして私は先生のお弟子となり喇嘛になる積りですから、先生の代理たる眞澄別さまの命令は聽きますが、其他の日本人の命令に服従する義務はありません。假令日本人が怒つて殺すとも道ならぬ人の命令は諾きませぬ。そんな事をしますと蒙

古男子の恥になります」

と云つた。日出雄は感心して白を褒めてやり、さうして日本の風俗や習慣を語り聞かせ、

「お前の云ふのも蒙古人としては尤もだらうが、日本人にはそんな理窟は通らないから、間のある時は他の日本人の言ふ事も聴き、世話もして貰ひたい」と語つた所、白は諾いて其後は誰彼の區別なく言ふ事を諾く様になつた。白の父白厘九がやつて来て、

「此の倅は一人息子ですから、あまり遠い所へはやり度くありません。そして白凌閣には隣村から嫁を貰ふ事に決まつて居りますから、何とかして體をあけて貰ふ事は出来ずまいか」

と丁寧に依頼して来た。日出雄は父の言を聞いて氣の毒に思ひ、白凌閣に、  
「お前は一人息子でもあり、お前の父は老年でもあるから大庫倫迄従軍することは親に不孝になるかも知れぬ。そして親と妻君を残して遠征に上つても、お前も氣が氣であるまいから、父の言葉に従へ」

と云つた所、白は首を左右に振つて、

「イエイエ一旦蒙古男子が誓つた言葉は金鐵です。父や妻は神様に任せておけば宜しい。私は大先生の行かる所は何處迄もお供致します」

と云つて聞かないので、父も観念したと見え、「アハ、ハ、ハ、ハ」と大きく笑つて、  
「どうか倅を宜しく頼みます」

と挨拶して歸つたきり、日出雄が公爺府を出立する朝迄、その父は訪ねて來なかつた。之を見ても蒙古人の男性的氣性が知れるのである。

彼白はかう云ふ心掛を有つて居たから神の保護を受けたものか、六月二十一日の白音太拉の遭難の時も支那兵に捕へられ、銃殺の場に立たされた一刹那、參謀長が出て來て、

「こんな子供を殺した所が仕方が無い」

と云つて白を逃がしてやつた。それより白は色々と艱難辛苦して、無一物で公爺府へ無事歸る事を得たのである。

(大正一四・八 筆録)

第一九章 假司令部

寒風吹き荒ぶ黄塵萬丈の蒙古の住居は、實に慘澹たるものであつた。洮南以來二十日間も湯に入らないので、顔は鍋墨の如く、鼻の穴や耳の穴は細かい土埃に埋まつて居る。日出雄一行のみならず、蒙古人の顔は年が年中入浴しないのだから、實に垢まみれになつて醜しい。蒙古人は生れた時一度水で身體を洗つたきり、終身湯水で體を洗ふと云ふ事はない。夏になると暑さ凌ぎに河中に唯の一回位飛び込むこともあるが、決して體の垢を落さうとはしないのである。蒙古の婦人の步行する様は何れも外輪に大手を振つて歩き、遠方から見ると男女の區別が判らない。唯耳に環が下つて居ると頭に寶石が光つてゐるので、其女たるを知るのみである。或時日出雄が屋外に出て望遠鏡をもつて曠原を望んでゐると、二町許り向ふから五十許りの色の黒い、ポロを下げた蒙古婦人が日出雄の方に向つて進んで來た。日出雄は男か女か老人か、但しは妙齡の美人かと一生懸命にのぞいてゐると、其女は日出雄の望遠鏡でもつて覗いてゐるとは少しも氣がつかず、

忽ち裾を捲つて「ウツトコ」を現し、無造作に道の中央で「シエスアンテイナ」をやりプイプイと二三度尻を振つて、着衣の裾で「ウツトコ」をこすり、平然として日出雄の前にやつて来た。日出雄が望遠鏡で覗いてゐる時眞澄別が傍へやつて来て、「一寸其望遠鏡を私に貸して下さい」と頼む、日出雄は笑ひ乍ら「ナニ今が肝心要の正念場だ。蒙古婦人の「ウツトコ」を實見してゐるのだ、こんな機會は又とないから先づ御免蒙りませう」と云つてゐる間に「シエスアンテイナ」の行事は済んで了つた。後で日出雄と松村は大聲を上げて芝草の上に倒れて笑つた。

公爺府の鎮國公から日本の大先生にと云つて、大きな豚を一つ割つて其肉を贈つて来た。日出雄一行は其厚意を謝し、直様之を煮て食膳に上した。所が公爺府の豚は梅毒患者の「ひつた」糞を食つてゐるので豚までが梅毒性になつてゐると見え、日出雄は其毒に當てられて面部を除くの外身體一面に泡のやうな痒疹が發し、夜も晝もガシガシとかいて苦しんだ。二先生の眞澄別も亦豚の毒にあてられ顔一面に疔が發生した。其かはりに日出雄とは反對に首から下はどつこも犯さ

れなかつた。あまり痒いのでガシガシと爪で掻きむしつたから堪らない、忽ち顔面脹れあがり、澄みきつた液汁がポトポトと雨の如くに落ちるやうになつた。さうして日出雄が鎮魂して癒さうとすれども、眞澄別は寝てゐる間に知らず識らず顔を掻くので、益々顔が破れただれ、牡丹餅のやうな面相になつて了つた。されど眞澄別は何事も神の御心だといつて意に介せず自然に任してゐた。漸く一ヶ月の後に元の如く綺麗な顔になつたのは幸である。一時は到底元のものにならないだらうといつて、盧占魁初め日本人側も非常に心配したのである。

公爺府の天空には數百の鶴の群が前後左右に舞ひ遊び、雪の原野を飛び交ひ妙な聲を出して鳴き渡つてゐる。到底内地ではこんな事は見られないだらうと云つて、日出雄は其前途の幸運を祝した。此邊は楊柳の木や錦木及び杏の木などが、山や野に澤山生えてゐる。雀はチュンチュンと鳴き、鶏は澄み切つた聲でコケコツコーと長く謳ひ、牛はモウモウ、馬はヒンヒン、猫はニヤンニヤン、犬はワンワン、日本竝みに聲を放つて鳴いてゐる。名田彦はこれを聞いて「鳥、獸は偉いものだ、蒙古の奴は日本語を些とも知らないが、鳥、獸は日本語を使つてゐる」

と云つて笑つた。

日出雄は公爺府滞在中、記憶便法和蒙作歌字典の著作に着手し、  
交りの和歌を作つた。さうして其外に數百の述懷歌を詠んだ。左に其一部を紹介  
する。

容貌は日人に似て逞ましき人の住むなる蒙古樂しき

冬籠りのみに月日を送るより外にすべなき蒙古人かな

十年の知己に遇ひたる心地して清く交はる蒙古人かな

牛馬や犬豚驢馬の糞攻めに遇ひて一日を今日も送りぬ

朝戸出に四方の山々見渡せばいづれも雪の薄絹よそふ

今日も亦つめたき粉雪ちらちらとふりつつ吾顔なめてとほるも

人見れば三つ四つ五つ寄り來りしきりに吠ゆる蒙古犬かな

蒙古犬吠ゆる聲き朝まだき窓をのぞけば騎馬兵來る

公爺府のしげこき小屋にラハンテル八破れしを敷きて一人寝しかな

蒙古女耳もうちこをみなみみにかけたるスイ八（耳環）見れば印度インドの國くにの昔むかし思しばゆ  
蒙古路もうちごぢに日は照てり渡わたり眞白ましろなる山野やまのの雪ゆきはとけそめにけり

奉天ほうてんから坂本廣一さかもとくわついちが轎車けうしやに乗り手紙てがみを持ってやつて来た。それは總ての計畫けいかくの  
進行しんかうを報告ほうこくの爲ためである。坂本さかもとは熱心ねつしんな日蓮宗にちれんしうの信者しんじやであつた。一時いちじは僧籍そうせきに入り  
滿州まんしうに日蓮宗にちれんしゆうの宣傳せんでんを企てた男をとこである。坂本さかもとは暗夜あんやに日出雄ひでをの身體しんたいから黄金色わうこんしよくの  
光ひかりが放射ほうしやしてゐたのを靈眼れいがんで認めて、日出雄ひでをの神格しんかくを知り、俄にはかに大本信者おほもとしんじやとなつ  
た。彼は佐々木ささきや大倉等おほくららの總ての行動かうどうを熟知じゆくちしてゐるので邪魔者じやまものあつか扱あつかひをされ、唐から  
國別くにわけの口くちを通じて唯一ただひとりにふもつ命めいぜられたのである。次ついでで永ながらく支那しな、滿州まんしう、西シ  
比利亞方面べりやほうめんに或事業あるじげふの爲ため活躍くわつやくして居た井上兼吉いのうへかねきちが奉天ほうてんからやつて来た。此男このをとこは  
盧占魁ろせんくわいの命めいによつて、危險きけんを冒をかし、綏遠スエエンや張家口方面ちやうかこうほうめんに哥老會からつくわいの楊成業やうせいげふ其他た馬賊ばそく  
の頭目とうもくに密旨みつしを傳つたへに行つた剛膽がうたんな男をとこである。支那しなの革命戰爭かくめいせんさう等とうにも加くははり、巴  
布札布チャップの戰爭せんそうにも參加さんかして其名そのなを轟とどろかし、滿州まんしうや蒙古もうちこの馬賊ばそくの頭目とうもくに澤山たくさんの知ち己き  
を持つてゐる。彼は盧占魁ろせんくわいの假司令部かりしれいぶに入つて金銭出納係きんせんすゐたふがかりを勤つとめる事こととなつた。

老印君から洩兒河で捕獲した、トールボートと云ふ長さ二尺許りの魚を四尾送つて来た。名田彦の巧妙な料理法で一同は舌鼓を打ち賞玩した。今年に入つて初めての魚獲だから、先づ第一に日出雄に進呈したのであつた。

四月十三日馬隊の頭目賈孟卿と云ふ男が日出雄を訪うた。彼は二千人の部下を有してゐるが、盧占魁の義軍に参加すべく、單身此地迄忍んでやつて来たのである。彼は新しい思想の男で、其論旨も極めて明晰である。背の高い逞しい男で、年齢二十九歳である。

四月十五日張作霖の副官、張華宣がやつて来て盧占魁を伴ひ日出雄の住居を訪うた。彼は支那人で明治三十八年東京の早稲田大學を卒業した男で日本語を良くするので、大變話が面白かつた。元の蒙古王曼陀汗も訪ねて来て蒙古獨立の人氣の良い話を交換して二人司令部へかへつていつた。日出雄が奉天を自動車で出發の際、何くれと世話をして見送り守つて呉れた楊巨芳氏が來訪し、種々面白き話を交換して居ると、前方原野に當つて牛車、馬車數十臺に食糧、寢具等を積み込み、數十人の騎馬の兵卒が前後を守つて來るのが見えた。さうして彌々本日十連

發のモーゼル銃や機關銃が洮南を發すると云ふ報告があつた。日出雄が渡滿以來僅か二ヶ月許りにして軍の編成の端緒を開くに至つたのも全く人間業ではないと云つて喜んだ。日夜四方の山々に山火事があり、雲の焼けてゐる光景は實に壯觀である。日出雄は毎夜戸外に出で楊の枝を地上に敷き、横臥して大きな聲で音頭を取りながら、蒙古の眞赤な月を眺めてゐる。

老印君は支那の將校馬鵬舉と共に日出雄の住宅を訪ひ、「先日は誤解より不行届の事を致しました。私もこれから總司令に從つて索倫に参りますから、何分にも宜敷く願ひます。今迄の無禮をお詫びに参りました」と打つてかはつた挨拶をした。日出雄が神軍の初陣に當つて公爺府最高將官、協理、老印君を從はしたのは實に幸先がよいと云つて喜び、神明に感謝の辭を捧げた。

盧總司令が公爺府に着いてからは日々夕方になると口令が發布された。これは敵味方を暗夜に悟るべき合言葉であつて、軍探警戒の爲である。

四月二十日神勅により、日出雄、眞澄別は左記の如き蒙古人名を與へられた。

でぐちおにさぶらうみなもとひでを  
出口王仁三郎源日出雄

みろくげしやうターライラマ  
彌勒下生達賴喇嘛

スーツンハン ことたまわけのみこと  
素尊汗（言靈別命）

「もうこせいめい  
蒙古姓名」

ナルザリンカチラオト  
那爾薩林喀齊拉額都

まつむらせんざうみなもとますみ  
松村仙造源眞澄

ハンゼンラマ  
班善喇嘛

ますみわけはるくにわけのみこと  
眞澄別治國別命

イボサリンボオロス  
伊忽薩林伯勒額羅斯

（大正一四・八 筆録）

## 第二〇章

しゆんぐんくわんび  
春軍完備

しぐわつにしふよつかごごたうなんふだいにしふしちやうちやうかいほう  
四月二十四日午後洮南府第二十七師長張海鵬の副官が二十二名の騎馬兵を従へ、  
ごだいだいしやぶきまんさいおくきた  
五臺の大車に武器を満載し送り来る。又轎車三臺を列ねて奉天側の參謀がやつて  
きた。  
来た。

わうげんきまいじゃんふけあへんくら  
王元祺が麻雀に耽り、阿片を喰ひ、ゴロゴロと寝てばつかりぬよる。盧の奴ア  
かりしれいぶこいつまたぶきたうちやく  
假司令部で、此奴も亦武器も到着せないので氣樂相に阿片を喰つてゐる。其外の  
さんぼうやつこいつあへんくら  
參謀の奴ア、ど奴も此奴も阿片を喰ふ位だから、碌な奴ア一匹もけつからぬ。こ  
んな事(こと)で何(ど)うして軍隊の操縦(さうじゆう)が出来(でき)るか……」

こうかくあわとまつかかほおこ  
と口角泡を飛ばし眞赤な面で怒つてゐた岡崎將軍も、洮南府から武器が来たのを  
見て、俄(にはか)に機嫌(きげん)が直(なほ)り直(ただち)に假司令部(かりしれいぶ)に走(はし)つて行(い)つた。

ここおいコンエフたいざいしやうそつとみくわつき  
茲(ここ)に於(おい)て公爺府(コンエフ)滞在(たいざい)の將卒(しやうそつ)は頓(とみ)に活氣(くわつき)づき、鼻息(はないき)が荒(あら)くなつて、歩(ある)き振迄(ぶりまで)が變(かは)つて來(き)た。何(いづ)れの兵士(へいし)も武器(ぶき)が來(き)たのを見(み)て、あゝ力(ちから)が來(き)たのだ……と喜(こ)んだ。  
をかざきえつぽい  
岡崎(をかざき)は笑壺(えつぽ)に入り乍(なが)ら、ソロソロ鼻息(はないき)が高(たか)うなり、

コンエフがき  
公爺府(コンエフ)の餓鬼(がき)や、老印君(らういんくん)の爺奴(おやじめ)、ゴテゴテ吐(ぬ)すとモウ承知(しょうち)せぬぞ。今迄(いままで)吾々(われわれ)を  
ばか  
馬鹿(ばか)にしよつた」

と傍若無人の言語を放つてゐる。日出雄、眞澄別其他の日本人側もヤツと安心して愁眉を開いた。

翌二十五日正午頃盧占魁を招いて奥地行の相談をした。曼陀汗が一緒にやつて来て、

「奥地は大變に難所が多いから、澤山の荷物は到底携帶することは出来ませぬ。それ故必需品のみを持つて行くこととし、其他の物は奉天へ送り返す方が安全です」

と云つた。そこで日出雄は澤山の靈界物語を初め、支那服や日本服全部を轎車に積んで、先づ洮南の長榮號に送り届け、喇嘛の法衣のみを着て行くことになつた。盧占魁は索倫山の奥、興安嶺には七千人の赤軍が割據してゐるから、必ず衝突戦が起るであらう、それだから凡ての荷物を輕うしておかねばならぬのだ……と口を添へた。

此日午後盧占魁は大事な物を日出雄に預けおき張桂林事曼陀汗の先頭が數十騎及び二百の歩兵を率ひ索倫へ向つて進む事となつた。守高、名田彦の兩人には十

連發のモーゼル銃を一挺づつ携帶せしめ、坂本には輕機關銃とモーゼル銃を携帶せしめ、其他の日本人にも一々武器を與へて出發の用意をなさしめた。但し日出雄、眞澄別は宗教家として武器は携帶しなかつたのである。それから岡崎は一先づ猪野を従へ奉天へ歸り、後の準備を整へて再び索倫山に向ふ事とした。

あくれば二十六日、何全孝を團長となし、馮虎臣を護衛長となし、二百の將卒を引きつれ、日出雄、眞澄別の兩人は二臺の轎車に分乘し、公爺府を出發した。

此日は舊曆の三月二十三日で大本の月竝祭當日である。日出雄一行が公爺府を去らむとする時、數多の老若男女が見送つて來て、別れを惜み、中には地に伏して涕泣する者さへあつた。臍の緒切つてから初めて軍隊を引率し、蒙古救援軍の總督太上將に推されて索倫山に向ふ日出雄の感想は、果して何んなものであつたらう。彼方此方の楊柳の樹は、或は紅く、或は黄く、金赤の水引きを立てた如うに梢を飾つてゐる。四十支里を経たる桑葛爾巴と云ふ部落の、ウフンシークの家に休んで晝食を喫し、一時間許り息を休め全部隊の到着を待つた。それより轎車を走らせて午後五時三十分阿布具伊拉に安着し、農家を徵發して宿營することとな

つた。四五名の家族で比較的富裕な家庭と見えた。家人四五名が代る代る日出雄や眞澄別の前にやつて来て、活佛の來臨と崇敬し、土に跪いて禮拜するのであつた。當家に宿泊した者は日出雄、眞澄別、守高、名田彦、秦宣、王元祺、坂本、白凌閣、温長興、馮虎臣等である。其他の將卒は附近の部落の民家を徵發して宿營することとなつた。此夜の口令は「春軍」と發布した。公爺府を去ること正に八十支里の地點である。見渡す限り目も届かぬ大原野を巡らす風景よき四方の岩山に楊柳、榆の古木が密生し、榆の古木には白き花が咲きほこり、楊の芽は紅く得も言はれぬ風情である。西北に當つて洮兒河の清流を隔て、風光の佳い古木の交つた岩山に金鑛を掘出した跡があり、其稍横の方には喇嘛教の金廟の壁が白く夕日に輝いてゐる。何とも彼とも言はれない氣分の良い風が吹いて来て、珍らしい鳥は林間に囀り、牛馬、山羊の群は安らかに愉快相に遊んでゐる。

古人の言つた「初春柳含煙」の句も當地に於ては適用しない様である。凡ての柳は紅い小枝を眞直に天に向つて伸ばし、遠目には秋の紅葉の林を見るやうである。『春來柳含火』と言つた方が適當であらう。日出雄は嘗て靈界に於て見聞し

たる第三天國の光景にそつくりだと言つて喜んだ。春の山姫は緑紅こき交せて  
我神軍を迎へ玉ふと云つて眞澄別は勇んでゐる。日出雄はこの曠原を天の原と  
命名し、裏山の大なる岩窟を天の岩戸と命名した。

翌日午前八時天の原を轎車に乗り、二百の兵士を引率して出發した。蒙古の河  
には一つも橋が架つてゐない。それ故、廣い深い河を騎馬にて渡らねばならぬ。  
日出雄、眞澄別の乗つた轎車は淺瀬を考へて、やつとこのことで幾つも幾つも河を  
渡り、四十支里を経たるヘルンウルホに宿營することとなつた。斯かる所へ洮南  
から後を追つて來た轎車が三臺、又もや色々の食料品を積んで來たのに途中で會  
つた。此間の道筋は實に麗しく大公園の中を通過する様であつた。途中で唐國別  
からの手紙五通を受取つて、奉天や日本の情報及び新聞の切抜きにて、露、支、  
蒙の關係を知つた。

公爺府以西北の日出雄が通過した地點は、澤山な木材が天然の儘に遺棄されて  
あり、水田に適當な沃野が開闢以來、手持無沙汰に際限もなく横はつてゐる。こ

んな所を開墾して穀類を植付け、又は鐵路を布いて樹木を伐り出し礦物を採掘したならば、實に大なる國家の富源を得られるであらうと、日出雄、眞澄別は道々話しつつ進んで行つた。此日は都合によつて僅か四十支里の行軍にとどめ、日出雄一行はヘルンウルホの公園のごとき麗しき原野の中を衛兵等に先綱を取らせ、騎馬にて愉快氣に驅け廻りなどして、半日を費した。山羊、豚、犬、牛馬なども澤山に飼つてある。此等の家畜を友として、暖かき春の日を送つた。此處には露人と蒙古人との中に生れた十歳位な愛らしい色の白い混血兒が一人あつた。そして其母親といふのは、少し許り垢抜けのした女であつた。此夜の口令は完備と發布された。東西南北の山々は火事を起し、都合五ヶ所から天を焦して燃え上り、炎の先がチラチラと雲を舐めてゐるのが見える。そして此夜は満天墨を流した如く曇り、一點の星影も見えず、犬の吠ゆる聲、殊更かしましく聽こえて来る。坂本氏のオチコ、ウツトコに關する無邪氣な話や、名田彦が内地にある妻を追想して、オチコ、ウツトコ、ハテナの話に面白く一夜を明かした。

あくれば四月二十八日午前五時半、ヘルンウルホの宿營を出發し、幾度も河を

横切りて下木局子に向つて進むこととなつた。世界各国の言語に通じ、柔術の達人、米國理髮學士、乗馬の達人と言ふてみた名田彦の騎馬姿は却つて危く見え、まだ一度も馬に跨つた事の無い眞澄別、守高の兩人は、チャンと姿勢が備はつて今迄に乗馬を練習した人と見えるなどと、兵士が口々に評し乍ら、長い行列を作つて西北の空を目當てに進み行く。索倫山迄行かねば乗馬が揃はないので、徒歩の兵士が澤山あつた。そこらに遊んで居る驢馬を引つ張つて來て之に跨り、木局子の近邊迄行つて驢馬の首を東南へ立直し、尻をポンと叩いて放ちやつた。驢馬は一目散に元來し道へ馳せ歸り行く。二十支里程の此方から索倫山の頂が見えて、白く雪が光つてゐた。護衛兵の馮虎臣は日出雄に山頂の雪を指し、  
「あの山の麓が最早や木局子で△います。モウ少時で御座いますから御安心なさいませ」  
と云ふ意味を支那語で語り聞かせた。日出雄一行は勇氣頓に加はり、轎車を出でて駒に鞭ちつつ午前九時二十分に無事下木局子に安着する事を得た。總司令盧占魁は二百許りの兵士を引きつれて我一行を迎へ、直に手を取つて司令部へ案内し

た。此の司令部は廣大なる城廓構へで、四五年前迄は露國兵が駐屯し木材の税金を取つて居た所だと云ふ。普通の蒙古の家屋と異り、建築物も餘程宏莊であり、美麗である。今は黒龍江省の管轄に屬し、黒龍江から官吏が出張して事務を執つて居る。

(大正一四・八 筆録)

## 第二章 索倫本營

索倫山木局子は、一時露國が占領して採木の税金を取る爲め木局署と云ふ役所を作り、多くの大鼻子がここに悠然と割據したのである。此地點は黒龍江省と熱河と外蒙との連鎖點であり露國が占領してから索倫山と命名されたのである。興安嶺山脈の支脈であつて、日本里程一百里四方の間を索倫地帯と稱してゐる。その後蒙古馬賊の隊長が露兵を追拂つて、ここに根據を構へ、蒙古獨立の準備をし

てゐた。その後民國七年清朝復辟問題の起つた時、兵燹に罹つて家屋は殆んど滅亡したのである。今は黒龍江省の管轄となり、十數人の官吏や數十人の兵士が守つてゐる。行ゆくは人口増加と共に索倫縣を置くこと云ふ事である。曼陀汗は此邊の馬隊の大頭目として附近數千名の馬賊を率ゐて此處に根據を固めてゐたが、其部下は今回の蒙古救援軍の爲に、外蒙や特別區域の方へ手分けして準備のために出て行つて了ひ、僅かに數十名の部下が御大の身邊を守つてゐる。

日出雄及び盧占魁が、要害堅固にして難攻不落と稱へらるる此地點に假本營を構へ悠悠として軍の編成を圖つたのも、地の利を選んだ爲めである。洮南より西北の曠野は到る所に慄悍なる馬賊團が澤山に出沒して、支那人でさへも這入る事の出来ない危険區域であるが、何と云つても蒙古の英雄馬賊の大巨頭を引連れて進んだのだから、危険至極なる馬賊は暗夜に太陽の出た如く歡迎の至誠を盡して從軍すると云ふ次第であるから、日出雄一行の索倫入りは極めて易々たるものであつた。

此度日出の國の大救世主を盧が奉戴して蒙古救援軍を起すと云ふので、國民は

上下を擧げて大に歡喜し、素晴らしい人氣であつた。蒙古の王、喇嘛及び馬隊等が次から次へと噂を聞いて集り來り、部下を率ゐて參加するので、瞬く間に左の如き幹部の編成が出来上つた。

### 内外蒙古獨立救援軍

(西北自治軍)

太上將 達賴喇嘛 素尊汗(日出雄)

上將 班善喇嘛 王文眞(眞澄別)

同 總司令 盧占魁

中將旅長 張彦三

中將參謀 侯成勳(岡崎)

中將旅長 劉仲元

中將旅長 張桂林(曼陀汗)

中將 副司令兼旅長 楊崇山

少將 同

鄒秀明

同 同

大英子兒

同 同

何全孝

同 同

包金山（貝勒）

尚なほ司し令れい部いぶ各かく部ぶ官くわんは左さの如ごとし。

軍法處長

李錫麟

祕書

王鐘元

繙譯官

王元祺

副官

魏元慶

營長

孫景堂

同

鄭秀峰

書記官

李阜麟

連長 排長 副官 同 連長 偵探 稽查長 司務長 同 排長 書記長 連長 祕書 連長

馮殿文 閔青山 張順 戰明武 桑永剛 高鳴九 靳鵬吉 王瓚璋 金維棟 崔玉祥 張惠臣 趙恩凱 陳占元 馮萬德

營長 馮佐臣

連長 程玉山

連長 王松林

盧占魁 謹呈

民國十三年五月九日

軍事顧問

王天海（日人） 王昌輝（日人）

王敬義（日人） 石大良（日人）

巴彥隆（蒙古王貝子）

軍事に關する往復文書の一、二を左に紹介する。

（一）盧占魁より洮遼鎮守使闕朝爾に宛てたるもの

敬寄遼源縣

洮遼鎮守使署呈

闕鎮帥 鈞啓

自索倫山謹爾 四月二十九日

鎮帥鈞鑑敬稟者占魁於月之九日率部下北來蒙鎮帥格外照拂諸事分神莫名感激二十七日即到索倫山刻下隨帶人員共五百餘名一路嚴守秩序秋毫不犯趙副官走後劉省三即派人到索報稱已招募隊伍七八百名於月之二十二日起程北來約三五日即能到索惟蒙旗高爾蘇公會經親密派妥員來索面允所屬十旗每旗各出兵百名其槍機甚不完全占魁又與蒙古德王商議允爲於伊所屬十旗每旗出兵二百名槍馬齊備一侯人馬到齊編制妥協後即行作速西發槍馬均屬齊惟子彈不甚充足又不易購買將來恐有接濟不上實屬一大難點萬蒙

鎮帥愈允格外分神代爲設法購買至於需款若干占魁自己擔承竝懇或興

大師交涉請爲發給以濟軍實將來大事有成皆出

鎮帥之玉成矣肅此謹稟敬請鈞安伏乞

垂鑑 慮占魁 謹稟四月二十九日

(二) 慮占魁ろせんくわいより楊總參議やうそうさんぎ(東三省とうさんしやう)に宛あてたるもの

敬呈

楊總參議 鈞啓

白黑龍江索倫山謹肅 五月八日

總參議鈞鑑 違

範日久景仰彌深萬具無函已將入手辨理情形報告諒邀

青鑑矣、刻下現有隊伍五百餘名槍械馬匹完全整備正在防址訓練之初尚有一千餘名大約五六月日必到索倫惟此際槍械炮彈需用甚急即請選派妥員將械彈早日運輸來索以備應用占魁惟有仰賴

鈞座設法維持期收完全效果以符下忱至於勞洩清神之處銘諸心版永矣弗諼而已再

者曾選派隊伍五六十名前往熱地購買馬匹預備編隊之用以後隊伍到齊如何編制之處均請鼎力維持俾便進行嗣後如何辦理隨時陸續報吾肅此敬請  
公安竝信

覆示爲盼 慮占魁 頓上 五月八日

(三) 慮占魁ろせんくわいより吉林省張輔帥きちりんしやうちやうほすあに宛あてたるもの

吉林督軍署

呈張輔帥 鈞啓

自江省拜緘

輔翁師長麾下遙違

英字時切葭思

龍門在望景仰何極近聞消息

榮膺吉督保障封疆長材得展下風欽佩鼎祝莫名遙爲繡幕抃舞遠道預賀也占魁泰蒙知遇感佩殊深北來兼旬招募隊伍前已稟陳梗概事在創建頭緒紛如現已粗具規模編成人數已有五六百之多其未到索者尚有一千餘名大約一星期內必能到索嗣後招募竣事如何編制謹信我公指點略以便遵從竝希多費金神鼎力設法維持一切將來編制就諸完成之處悉賴我公之賜也此後尚希不吝金玉遇事教正以便遵寸爲命是聽諒厚我者必不棄置也

肅此謹稟敬請

鈞安竝叩

榮禧餘維

齊照 虞占魁 謹肅 五月八日

敬再詢者占魁自前月初旬來索忽逾月餘省城新聞均無從探息昨閱報載省中內有更變未知確否

再者 敘翁在京有無回奉確息主座對於敘帥之地位迄是否表決千里相隔諸多鬱悶統請不吝教言時示

南針以匡不達

占魁 又及

(四) 盧占魁ろせんくわいより東三省張副官とうさんしやうちやうぶくわんに宛あてたるもの

面呈

張副官 啓啓

以黑龍江索倫山 拜緘 五月八日

華宣仁兄閣下前函諒蒙

收閱勿庸瑣洩現在內部已竟略目下規模招募隊伍計有五六百之譜刻間正在編制訓練之際其未到人數尚有一千餘名大約五六日內必克到索但人數齊備而軍械尤爲要緊急待應用甚至刻不容緩以期早日完全成立萬祈速爲設法運送來索務祈面向總參議婉詞核愈速愈妙勿使弟遠道盼望心旌搖之諒愛我者心能體念弟之衷趣也再懇者前在奉垣呈報屬員家眷接濟一項早蒙金諾批示在案此次隨弟北來人員恐請

兄臺一併費神佑照前情亦理庶免此視之誚茲特隨函附呈人員名單一紙均祈早日批示  
施行不勝感禱之至端此特懇致請

公安 弟 慮占魁 拜啓 五月八日

（大正一四・八 筆録）

第四篇 神軍躍動しんぐんやくどう

第二章 木局收ヶ原ムチズがはら

王仁おに（日出雄ひでを）、松村まつむら（眞澄別ますみわけ）、矢野やの（唐國別からくにわけ）、植芝うゑしば（守高もりたか）、名田音吉なだおときち

(名田彦)、佐々木(榊)、大石(大倉)

日出雄は軍の編成後、護衛長馮巨臣以下十數名の兵卒を伴ひ、北方の野山に免狩を催し、或時は野生の韭や蒜を採集し、枯草の芒々たる原野に向かつてテムムリチエブナをなし、愉快に索倫の日を送つて居た。岡崎鐵首、萩原敏明、猪野敏夫の三名は、數十人の兵士に送られ馬に跨りて、途中馬賊や官兵の圍を衝いて無事日出雄の許に着いた。名田彦は日出雄及盧の命に依つて、數名の衛兵を従へ軍使として奉天の水也商會へ引き返した。

蒙古の家屋は前述の通り極めて不潔で、南京蟲の横行甚だしく、加之に幾十日も湯を使はない爲めに衣服には蝨發生し、一行は日々南京蟲と蝨退治に日を費し、南京蟲の豫防の爲めにとて、いやな香のする蒜を顔をしかめて食事毎に喰つて居た。日出雄も蒜を喰ひ慣れて遂には、葱や野菜の生を平氣で嗜食するやうになつた。温長興は日出雄一行の炊事長となり、王瓚璋は馬夫長となり、王盛明は隨從長、守高は近侍長、名田彦は近侍となつて日出雄の身邊の凡ての用務に仕へ、眞

澄別は一切の代理權を行使する事となつた。又萩原敏明は寫眞係、坂本廣一は近侍、外に李連長以下二十名の兵士が直接保護の任に當つて居た。總ての制度がせこましかつた國から十六倍の面積を有すると云ふ蒙古へ出て來て、澤山の兵士や畜類を相手に自由自在に勝手な事をして飛び廻るのは、生れて以來五十四年間未だ嘗て經驗した事のない愉快さ呑氣さだ。大丈夫たるもの現世に生れて狭い國で強い壓迫を受けて居るよりも、勝手氣儘に知らぬ外國の空で、外國人と面白く遊ぶのは實に壯快だと日出雄は喜んでゐた。

索倫山の本營には馬隊の頭目が日々二百人三百人と部下を率ゐて、喇叭の聲も勇ましく參加し軍氣大に振つた。盧總司令は五月一日日出雄の館に出來り、大庫倫に進出せむとすれば、此處より二百支里を隔てたる興安嶺の或地點に赤軍七千人駐屯し、警戒なかなか嚴重なる事が斥候に依つて判明致しました。それ故、貴下の命に従つて、此儘大庫倫へ直進するは、兵を損じ彈藥を消費するばかりで、且つ熱、察、綏三區域の我が數萬の參加軍の到達するは、道遠くして容易でない。それ故、貴下の意に背くかは知りませぬが、軍事の經驗上、熱、察、綏

の特別區域に進出し、本年はこの區域に於て冬籠りをなし、完全な兵備を整へ諸王を招撫し、來春を待つて大庫倫に進み赤軍と交渉を開始し、若し和議成らざれば止むを得ず開戦の擧に出づるを可とすべく、大庫倫には約一萬の赤兵駐屯し、戒嚴令を布き居れば、小數の軍隊にては容易に目的を達すべからず、來春ならば些なくとも十萬の兵が麾下に集まるは確なる事實でありますから、其上にて大庫倫人を爲し、茲に根據を定め、勢に乗じて新疆を合せ、西比利亞の赤軍を歸順させ、飽迄も人類愛の爲め、貴下の爲め、一身を捧げ、此上如何になり行くとも神の思召と信じ蒙古男子の初志を貫徹さす考へです。此目的を達した曉は支那四百餘州は言ふに及ばず、東三省も必ず貴下の命に服するでせう』

と誠意を面に現はして軍の行動につき命令を乞うた。

日出雄は遠く故國を去つて不知案内の奥蒙の地、しかも言語不通の支蒙人を相手に開闢以來の大神業に従事する。彼の得意は果して如何であつただらう。各地の王や馬隊の頭目、活佛などよりは見舞として、豚や野羊、炒米などを日出雄及び盧總司令に送つて來る。日出雄は盧と共に日々感謝の生活を送つて居た。萬

有愛護の教を立てて居る日出雄も、かかる國へ來ては否でも應でも豚や羊、鶏肉などを喰はねばならなかつた。眞澄別はヌール、チャカンナ、マチナ（顔面の吹腫物）に苦み、守高は出國以來の風邪未だ癒えず、坂本も亦風邪の氣味にて全身痛み、日出雄は南京蟲に攻められて居た。一日、蒙祕書長來り、支那語を以て左の如く談じた。

「昨天到來、二百槍馬完全今日送給肥猪兩口肥羊二隻、不出五日又來隊伍六百槍馬完全的。司令近非常歡喜所愁的款項無有的又苦於告貸將來隊伍均到來的無款的怎麼必實在投法子。」

閣下不愁不遇現狀況難一點的事作到張作霖必能付給款項俟將隊伍招齊款就不困難了」

要するにその主旨は、兵備が整つた上は張作霖より相當の軍資金及び武器を送つて來るが、それ迄は仕方がない、暫く辛抱してくれと云ふ意味である。さうして今日も武器を携帶して參加兵が二百名豚や羊を送つて來た。又五日の後には六百の馬隊が此處に到着すると云ふた。

廣大無邊の肥えた原野を雑草の生ふるに任せ乍ら、而も他國人の入り来るを嫌ひ、怖れて外國人と見れば直に銃を以て打ち殺すと云ふ、蒙古人ともつかず支那人ともつかぬ又露西亞人でもないチヨロマン人種が、十年以前迄此地に割據して居たが、今は數百支里の北方の森林に退却して居る。兔や雉などは此方面は特に多く、幾抱えもあるやうな楊、柳、榆の大木は山野に繁茂し、洮兒川の曹達を含んだ清流はゆるやかに流れ、天然の恩恵は無限に遺棄されて居る稀有の寶庫である。日出雄は日本の當局や政治家が、何故此地に目をつけないのであらうかと怪しんだ。オンクス、アルテナ、ウンヌルテ（放屁臭）など云つて、蒙古人を相手に日出雄が戯れて居ると、盧占魁は御機嫌伺ひだと云つて、洮南から送つて来た珍らしい菓子や果物などを持って来た。さうして盧の話によれば、成吉思汗が蒙古の原野に兵を擧げてから六百六十六年となり、頭字の三つ揃うたのを見れば、愈々本年は三六の年だと言つて勇んで居た。

春の野にコルギーホアラ（野生福壽草）あちこちとボルンガチチク（紫色の花）

咲き出でにけり

五月の下旬であり乍ら、蒙古の奥地では野生の福壽草が白や紫に咲き誇つて、殆ど花莖を敷き詰めた如く美しい。日出雄は此花莖の中に馬を縦横無盡に鞭ぢながら、數多の支蒙兵を指揮して野遊を試みた。ケンケンと雉子の聲が彼方此方の枯草の中から聞えて來る、其處へ三匹の山兔が飛び出した。蒙古兵は直ちにモゼル銃を擬し、ポンポンと三發続け打ちに三匹の兔を頭許り撃つて捕獲した。總て蒙古人は楊の枝で弓を拵へ、細いので矢を造り、矢の先に石を縛付けて荒き麻の繩を弦となし、空立つ鳥を撃つに滅多に外れた事がない。支那や露西亞で廢物になつたやうな銃器でも、蒙古人が使ふと一々命中するのは實に不思議な程である。殆んど神様ではないかと思ふ程、天性的射術の技能が備はつてゐる。一日、日出雄が喇嘛服を着けた儘司令部の遙か前方で、パサパーナ（吐糞）をやつて居ると、シーゴーと云ふ蒙古名物の猛犬がパサを食はむとして七八頭も集つて來た。このシーゴーは蒙古犬と狼との混血兒で、非常に強く如何なる猛獸と雖も噛み殺

すと云ふ牧畜國の蒙古にあつては天與の貴獸である。日出雄がポホラを捲つてウンと氣張つてゐると、シーゴーがやつて來た。草原の穴の中に住んでゐた大眼子（チヨロマ）がパサの臭を嗅いで穴から首をつき出した處、嗅覺の鋭いシーゴーが直様四方八方から其穴を前足で掘り、見る見るチヨロマを捕獲して了つた。其の敏捷こい事は實に驚歎に價する。

すると折柄蒙古名物の大風が吹いて來た。萩原や坂本が馬に遠乗して原野に火を放つたので、火は風に煽られ一瀉千里の勢で黒煙濛々と日出雄の身邊迄迫つて來た。茫茫たる枯草の中到底逃れる事は出來ぬ。シーゴーは盛んに吠え立てる。日出雄は昔日本武尊が東夷征伐の時駿河の焼津で賊軍の計略にかかり火に包まれ、燧を取り出して向へ火をつけ、且叢雲の神劍にて草を薙ぎ拂ひ大勝利を得られた。故事を思ひ出し、直に佩刀を抜き放ち身邊の草を薙ぎ、懷中よりマツチを取出して向ひ火をつけ、さうして天の數歌を奏上した。不思議にも風は俄かに南方に變じ、日出雄も兵士も焼死の難を免かれた。蒙古の野に火を放つて遊ぶのは實に劍呑である。

第二三章 下木局子

五月六日(舊四月三日)日出雄は朝から晩まで達頼喇嘛の法服をつけて悍馬に跨り、大原野を馳驅した結果にや、腰を痛め、午前中は臥床してゐたが、俄に通を催し、パサパーナの爲めに陣營の北方なる枯草の野に出で「イリチーカ」(驢馬)の交尾する様を面白く笑ひ乍ら打眺め、其才チコの大なること、馬の如くなるに呆れ、従卒と共に廣野に横臥して大笑ひをしてゐると、そこへ萩原敏明、井上兼吉の二名が軍用品を數臺の大車に満載し、悍馬に鞭ち驀地に走つて來た。萩原が蒙古人をしたのは此日が初めてである。萩原は洮南より索倫に來る途中、三回も落馬した失敗談を繰返して語つた。そこへ三名の騎兵に追はれて、上木局子方面から數百頭の荒馬が司令部へ着いた。これは馬の操縦に妙を得たる蒙古人

であつて、其後から十數名の騎兵が之を守りつつ進んで来た。萩原、井上の送つて来た軍需品の中には西王母の服や、數珠、拂子、宣傳使服等、日出雄の必需品が這入つて居た。

萩原はその翌日から公爺府以西で撮影した寫眞の現像を始めた。夜に入つて日出雄は眞澄別と共に四五の護衛兵を引連れ、衛門を出て空を眺めてみると、忽然として西北の空に大彗星が出現した。不思議にも此彗星は三十分の間に跡もなく消えて了つた。護衛長の馮巨臣は此現象を見て、「屹度明日は大暴風が起ります。あの彗星が出ますと昔から蒙古では大暴風があるのです。さうして此彗星は御覽の如く低空に懸つて居ります。それ故支那や朝鮮からは仰ぎ見ることは出来ませぬ云々」と説明した。

軍司令部の編成が成つたので日出雄は暫く小閑を得、盧占魁、何全孝、温長興、眞澄別其他十數名の衛兵を伴ひ、北方の丘陵に上り、地圖を披いて地形を調べてみた。日出雄と盧占魁は山下の原野に數多の兵士が訓練をやつてゐるのを望遠鏡を以て瞰下してゐたが、忽ち盧占魁は「ブウブウブウ」と七八彈連發的に放

屁をなし、ニツコリともせず眞面目な顔をしてゐる。日出雄も負けぬ氣になり、盧占魁の前に立つて八九發機關銃のやうに連發したが、それでも盧占魁はニツコリともせず、素知らぬ顔をしてゐる。蒙古人は人の前で屁を放ることは何とも思つてゐない。又人が屁を放つても意に介せず、日本人のやうに可笑しがつて笑ふと云ふ事はない。屁は出物、腫物、處嫌はずだ。三寶さんが缺伸した位に感じてゐると云ふ事だ。之に反して人の前で缺伸をすることは大變な失禮になり、侮辱したと云つて怒ると云ふ。處變れば品變るとは、よく云つたものである。

一同は山を下つて或民家に立寄ると澤山の鶏が飼つてあつた、今生んだ計りの皮の柔い鶏卵が二つ三つあつた。それを其家の主人が直ぐに手に載せて日出雄の前に跪き、イオエミトポロハナ、テーハウントコ、シャルトゲア（大活佛、鶏卵献上）と云つて日出雄に與へた。日出雄は喜んで眞澄別と共に一個づつ其場で吸うた。これより澤山の兵士は鶏の卵の生みたてがあれば、騎馬に跨り五六支里の處も遠しとせず、日出雄が好きだと云ふので持つて來るやうになつた。夜になると『カツコーカツコー』と云ふて彼方此方からの山林から妙な聲が聞えて來る。

此鳥が鳴き出すと蒙古人は粟や高粱の種を蒔き初めるのである。晝は眞澄別が日出雄の認めておいた日記や支那字で作った小説等を讀んで日出雄の無聊を慰め、守高、坂本は日出雄の手足を揉んだり、日出雄の日記を淨寫したりしてゐた。名田彦は公爺府以來、日出雄の頭髪を揃へたり、顔を剃つたり、洮兒河で捕獲して兵士が送つて來た「トーラボ」<sup>トール</sup>と云ふ魚を料理し日出雄一行に勧めて居た。蒙古兵、支那兵は晝夜間斷なく、交る代る、日出雄が住宅の入口に二名づつ立つて護衛してゐた。時々角砂糖や飴を日出雄の手から貰つて子供の如くに喜んでゐる。日出雄は澤山な腕時計を奉天より送らせ、護衛兵一般に一個づつ與へ、支那製の巻煙草二十本入りを一人に二個づつ日々に與へてゐた。さうして食料は支那米や其外昆布、和布、いろいろの罐詰、鰯等を澤山に持つてゐたので、盧占魁の司令部に居つて不味い高粱の粥を食はされてゐるのに比し、非常に結構だと云ふので日出雄の護衛にならむ事を希望する者、日々に殖えて來て、盧占魁も大いに閉口したと云ふ。そして日出雄の希望に依つて白馬のみを集め、護衛兵全部は白馬隊の如き感があつた。

五月十一日（舊四月八日）は日出雄が出國以來、滿三ヶ月に當る吉日である。日出雄の元氣は最も旺盛にして、朝早くから原野に出で、乘馬姿の寫眞を撮影したり、又は野に火を放つて興に入つたり、コルギーホワラ、チチクの咲き誇つた花の野に寝轉んだり、兔を追ひ出したり、太陽の傾く頃まで遊んで歸つて來ると、蒙古の土人が鷄を四五羽持つて日出雄に面會を求めて來た。日出雄は鷄を贈られた厚意を謝し、蒙古人の額に手を軽くあて、洗禮を施してゐると、そこへ公爺府の協理や主事が二十人の騎兵を引率し、日出雄及盧占魁に挨拶の爲めに訪ねて來た。さうして老印君等は何處までも盧に従軍せむ事を願つて已まなかつた。日出雄は此處でも澤山の歌を詠んだ。其一部を左に紹介する。

駒竝めて木局の荒野を進み行く吾軍卒の姿雄々しき  
シヤカンメラ（白馬）轡竝べて進み行けば神代に住める人の心地す  
村肝の心もみつつ吾軍師洮南あたり進むなるらむ  
官兵の出馬と聞いて吾同志索倫入りに惱むなるらむ

數千里山河隔てて吾は今木局子の野邊に駒に鞭うつ  
バカホンナお留守にお山の大将を氣取りて神を汚す枉あり  
新緑の絹をまとひて今頃は日本の山野榮えぬらむ  
はや初夏の頃とはなれど蒙古地は春の初めの姿なりけり  
雲の窓明けて覗きし月影は一入清く神軍を照らす  
バラガーサ、ホントルモトの茂りたる林に駒を鞭ち遊ぶ  
雪解けて川水日々に増し行けば少時木局子に駒を駐むる  
枯山は日々に青みて水ぬるみオブスレブチもホラに茂り行く

五月十三日佛爺喇嘛部下の喇嘛僧三人と兵士數名を従へ、司令部に日出雄を來  
訪したので、日出雄は眞澄別をして接見せしめ、喇嘛教との提携を約さしめた。  
旅長張彦三は數多の兵を率ゐて上木局子に進軍した。之は日出雄の宿營地を調査  
せむが爲であつた。蒙古には佛爺喇嘛即ち活佛と稱するもの約一千人ありと云ふ。  
同日洮南府長榮號主任三井寛之助及佐々木より、一千の官兵、馬賊討伐のため進

軍中なれば日本人の索倫人は大困難なりと報じ来る。盧占魁の進言に依り日出雄は上木局子へ進出する事に決定した。此時王元祺は左の詩を作つて日出雄を讚歎した。

救世至尊 彌勒爲心

無分貴賤 一視同仁

(大正一四・八 筆録)

## 第二四章 木局の月

五月十四日即ち王日午前九時上將盧占魁は太上將日出雄の陣營に來り、午前十時半、下木局收の兵營の出發を見送つた。轎車二臺、大車一臺に荷物を積み數多

の兵士を前後に従へ、蜿蜒として大原野を流るる洮兒河の激流を幾度となく騎馬にて渡り、午後三時半、無事上木局收の假殿に安着した。蒙古の馬は體軀日本の乗馬に比して稍小なれども極寒極暑に耐へ且つ忍耐強く柔順である。河水を見れば何れの馬も頭を振つて勇み立ち、青味だつた激流を平然として渡る様は殆ど平地を行くやうである。井上兼吉は馬賊の頭目曼陀汗等と舊くより交際して居ただけあつて、滿蒙の事情によく通じて居た。彼は道々馬上にて日本馬賊の作つたと云ふ勇ましい歌を歌ひつつ進む。

嵐吹け吹けマ一カツ嵐 雪の蒙古に日は暮れて  
征鞍照らす月影に 仰げば高し雁の群  
吾には家なし妻もなし 國を離れて十餘年  
家は有れ共岩の洞 從ふ手下は二千餘騎  
馬上叱咤の戯れに 鎗をしごけばスルスルと

延びて一丈穂の光り

電光閃く玉を爲す

興安嶺のかくれ家に

劍の小尻を鞭ちて

闇をすかせば二千人

轡竝べて忍び寄る

殺氣立ちたる馬賊の群は

何處で呑んだか酒臭い

無聊に苦しみ酒を呑む

山と積みにし虎の肉

肌押し脱げば一面に

日頃自慢の刀傷

今日の獲物は五萬兩

明日は襲はむ蒙古の地

イザヤまどろまむ一時を

取り出す枕は髑髏

ホンニ忘らりよか古郷の

可愛稚兒さんが目に躍る。

上木局收の假殿なる日出雄を護衛の爲め、僅か十五支里の間に三ヶ所の兵營を

設けられた。其配置は最前方即ち西北方には鄒團長が二百の兵を引きつれ警護し、

中央には何團長又百數十名にて警固し、最後即ち東南方の營所には中將張彦三旅

長として之を警固して居た。日出雄は此間を悠々として何の憚る所もなく部下の

兵士と共に馳驅して馬術を錬つた。日出雄が各兵營を訪づるや、各團長は兵を門外に整列させ、一齊に捧げ銃の禮を施こし、先頭に立つて兵營に入るのが常であつた。張旅長はモーゼル銃を自ら修繕する際、誤つて自分の脛を討ち、其の彈丸は骨に當つて肉深く残留し苦痛を訴へた。急報により日出雄は醫務處長猪野大佐及び眞澄別、守高其他を引きつれ、旅長の陣營に馳せつけ、局所に鎮魂を施し激痛を其場で止め、猪野大佐は直ちに刀を取つて彈丸の抉出に盡瘁した。されど彈丸は骨に深くうち込んで居るので抉出することは出来なかつたので、已むを得ず日出雄は其儘平癒すべく神に祈つた。所が不思議にも旅長は俄に苦痛を忘れ、平然として馬に跨り部下を指揮するを得たので、將卒一同は其の奇瑞に感歎の聲を放つた。日本人側數名と白凌閣、温長興、大師文、康國寶等は或日兵營と兵營との間を馬をかけて居た所、何に驚いたか萩原敏明の馬は突然直立した刹那、萩原は大地へ眞逆様に落され大の字になつて倒れた。萩原の乗馬は雲を霞と驅け出して了つた。後から来た日出雄は吾脚下に萩原が倒れてゐるのを見て、俄に馬腹に鞭を加へ其上を一足飛びに飛んで馬蹄蹂躪の難をさけたが、今度は又もや白凌

閣の馬は白を地上に投げすて雲を霞とかけ出す。數多の騎馬兵を四方に出して幸ひ兩馬とも捕獲することを得た。二三日すると奉天に軍使に行つた名田彦が、支那兵數名と共に上木局收の假殿に無事歸つて來た。名田彦は日出雄を見るより聲をあげて懐かしさに泣いた。彼は幾度も途中危難に遭遇し、漸くにして生命を全うして歸つて來た嬉しさが一時に込み上げて來たのである。守高と名田彦はそれより日々乗馬の練習に餘念がなかつた。さうして守高は王連長や王參謀に暇ある毎に柔術を教授して居た。守高に柔術を學ぶものは支那將校の中四五名はあつた。併し大部分の將卒は柔術を蔑視して居た。彼等は云ふ「何程柔術が達者でも飛び道具には叶ふまい、今日の戦争は銃砲より外に力になるものはない、柔術などと云ふものは一種の遊藝だ」と。守高は或日騎馬にて郊外を散策する時、例のシーゴーに吠えつかれ、乗馬が驚いて馳け出す途端に落馬したが、彼は落馬したのではない無事着陸したのだと不減口を云つて笑つて居た。名田彦も自ら乗馬の達人と稱して居たが、これもシーゴー數十頭に取圍まれ馬が驚いて馳け出す途端に地上に遺棄され、驚いて起き上つた時分には、乗馬は影の見えない所迄遠く逃げ去

つて居た。日出雄は此報告を聞くなり數名の士官や兵卒に命じ遁馬を捕獲すべく命じた。温少佐は六名の兵士と共に際限なき荒野を駆け廻り、日の暮るる頃漸く馬を捉へて歸つて來たので、日出雄は温以下の勞苦を謝し種々と菓子や煙草などを與へて慰めた。さうして名田彦に向ひ、

「オイ、名田彦、乗馬の達人が落馬するとは何の事だい」と一本參つた。すると名田彦は頭をガシガシ掻き乍ら、

「ハイ、弘法も筆の誤りです」

と相變らずの負け惜みである。上木局收の假殿にゐる日本人は何れも氣樂なもので、

「オチココテノ、ウツトコハテナ、ボホラヌボ、オンクスアルテチ、ウンヌルテ、オホノトルテ、ピーシヤムツトルテ、マラカウンスナ、コトラアンテイナ、パサパーナ、シエスシエーナ」

などと他愛もない下がかつた話計りして暮して居た。日出雄は上木局收の假殿に起臥して居る中、澤山の歌や俳句を詠んだが其中の一部を茲に紹介する。

國を出て四つの月をば重ねつつ吾生れたる月夜に會ふかな  
夕暮の東の空を眺むれば神島に似し雲の浮べる  
昨夜降りし雨の天空晴れ渡り十二日の月光目出度し  
東方の空のみ村雲立ち昇るいかなる神の示しなるらむ  
野雪隠掘りて日々パサパーナ爲さむ爲め守高鋤を手にする  
温突の暖氣を避けむと庭の面に今日改めて久土築きにけり  
山火事と吾出發の寫眞をば仕上げの際に焦せし惜しさよ  
靜なる月の姿を見る毎にナラ又オロスの信徒思ふ  
ホイモール眼は彌々丸くなりて夕日の空に月は輝く  
窓明けて月の面をば眺めつつ心靜かに行末おもふ  
バラモンの醜の鋭鋒避けながら蒙古の空に月を眺むる  
十二夜の月の光に照らされて樺の幹のみ山に光れる  
司令部を駒に鞭ち立ち出でて今日上木局收の月を見るかな  
忽ちに魚鱗の雲の塞がりて可惜月影吞まむとぞする

野のなか中にはな放ちやりたる馬の群れ寝屋ねやに歸かへるを厭いとひて走はしる  
日の出ひいづる國くににて見みたる月つきよりも蒙古もうこの空そらは珍めづらしく見みる  
雨雲あまくもは空そら一面いちめんに塞ふさがりぬ今宵こよひの月つきの別わかれをしさよ  
瑞月ずゐげつの雲くもかくれせしを守まもらむと十二夜じふにやの月つきかくれしならむ  
浮雲うきぐもの薄うすき衣きぬをば通とほしてゆほのかに見みえし今いまの月つきかけ  
すがすがし祝詞のりとの聲こゑの聞きこえけり守高もりたかのホラの雄をたけびならむ  
河邊かはべりに立出たちいで團長だんちやう等らと共に騎馬きばの照相せうさう寫うつし撮とりけり  
暫時しばらくは此地このちにありて外蒙ぐわいもつに進すすまむ時の英氣えいき養やしなふ  
林間りんかんに駒こまを竝ならべて勇いさましく涼すずしき風かぜを受うけつつすむ  
吾われは今いま萬里ばんりの原野げんやを乗のり越こえて草野くさのの小村こむらに經綸けいりんを立たつ  
九十六くじふろくの日ひを重かさねつつ吾われは今いま蒙古もうこの奥おくに駒こまに鞭打むちうつ  
時々ときどきに國くにの事ことなど思おもひ出いでて今日けふの吾身わがみの幸さちをよろこぶ  
蒙古もうこ語ごを學まなばむとして今日けふも亦また肩かたこらしつつペンを走はしらす  
窓障子まどしやうじ破やぶれて風かぜのあたるたび猶なほペラペラと言いひさやくかな

桃太郎誕生したる照相を馬飼が原に撮りし今日かな  
大空の雲掻き分けて三五の月の光もあきらかに照る  
雲の戸を明けて今宵の月影は吾賤の家を照したまひぬ  
肩痛み腰張り頭痛鉢巻でペンを執りつつ窓の月見る  
トルコノ口ホルまで痛む今宵こそ曲神の吾を窺ふなるらむ  
ナルンオロス曲の關所を潛り來て又もや蒙古の曲に襲はる  
背に肩脚腕までも痛みてゆ已むを得ずして晝寢せし哉

木局の野に駒嘶きて草萌ゆる  
木局の野の初夏の夕べや杜鵑啼く  
人心荒き木局收の宿營かな  
無頼の徒集まりて住む木局收  
陽は清く風暖かに草萌ゆる  
豚の兒に石を投げつつ野遊かな

食物しょくもつに乏とほしき木局ムチ收ツの假寝かりねかな

八や夕ま八ひく夕くもと白旗しらはたの鳴なる初夏しよかの風かせ

山やま低ひくく雲くもまた低ひくし木局ムチの野邊のべ

牧草ぼくさうの乏とほしき木局ムチ收ツ駒細こまほそり

駒止こまとめて少時しばし見入みいりぬ河かはの面おも

河水かはみづの音高おとたか々と夢ゆめに入いる

身みを忍しのび氣力きりよく養やしなひ時ときを待まち

コルギーホワラ、チチクさへ無なき上木局かみムチ收ツ

オンクスアルテチ、ウンヌルテと鼻摘はなつまみ

來客らいきやくにモンタラパンナと席讓せきゆづり

夜よな夜よなに啼なく杜鵑ほととぎす氣きに懸かかり

雨雲あまくもや瞬またたく中うちに空塞そらふさぎ

空そらに雲覆くもおほひて忽たちまち風寒かせさむし

イリチーカ最いとも悲かなしげな聲こゑ搾しぼり

ガーガーとガーハイの聲耳こゑみみに立たち  
喇嘛服ラマふくに着替きかへて馬ば上じやうの照相すがた撮とり  
千萬里せんまんりくわうや荒野くわうやの奥おくの馬遊ばいっかな  
寢ねそべりつ窓まどの側そばにてペンを執とり  
ペン先さきは早はやくも坊主ばうずとなりにけり  
山やまも野のも吾われも坊主ばうずの蒙古もうこかな  
ポロハナの力ちからも薄うすき蒙古喇嘛もうこラマ  
どの山やまも金字形きんじがたなり上木局かみムチ收ツ  
駒こま竝なべて軍いくさの司つかさ來きたりけり  
紅くれなゐの夕日ゆふひの空そらに月つき清きよし  
夕日ゆふひ影かげ山さん野やをボルそに染そめにけり  
紫むらさの雲くもたなびむきて入日いりひ近ちかし  
十四夜いざよひの月つきは日ひの内輝うちかがやけり  
窓明まどあけて初夏しよかの満月まんげつ拜をがみけり

初夏しよかの月つき初めて見みたり蒙古地もうちちに  
 月つき清きよく星ほし稀まれにして風寒かせさむし  
 吾友わがともは今宵こよひの月つきを吾われと見みむ  
 月次つきなみの今日けふの祭まつりや月丸つきまるし  
 雪解ゆきとけて河水かはみず日々ひびに増まさりけり  
 草くさも木きも青あをみ出いでけり初夏しよかの雨あめ  
 大空おほぞらの月つきを包つつみし雲くも散ちりぬ  
 雪解ゆきとけて三五あななひの月空つきそらに照てり  
 日人にちじんの夢ゆめにも知しらぬ吾神業わがしんげふ

(大正一四・八 筆録)

第二十五章

風雨叱咤ふううしつた

五月二十一日（陰曆四月十八日）上木局收の假殿に、日出雄は眞澄別等と西漸の時機に就て種々協議を凝してゐた。折柄護衛の温長興は、夥しき馬隊竝に轎車が砂塵を蹴立てて、此方へ向つて來る事を報じた。それは盧司令が蒙古の貝勒貝子、劉陞三、佐々木、大倉、其他幹部參謀連を引具し、日出雄訪問の爲に來たのであつた。

盧は佐々木を介して日出雄に請ふやう「だんだん蒙古兵も集まつて來るし、救世主來降の噂が益々盛に宣傳せられつつある際なれば、此際彼等の肝玉を奪ふ爲、風雨を喚び起して貰ひたい」といふのである。

日出雄「私に風雷雨霆を叱咤し得る自信は經驗上から言つてもありませんが、併しそれは神界から見て眞實必要と認むる場合以外には用ゆる事は出來ない事になつてゐます。必要のない……言はば奇術かなぞの様に濫用するのは兇黨界に屬する仕事であるので、一寸困るなア」

大倉「併し先生、皆が渴望してゐるし、蒙古人等が更に信仰の度を高める材料になるのですから、神界から見て必要な場合と認めてやつて頂く譯にはいかぬでせ

うか」

日出雄「困るなア、鎮魂で各自相應の靈界でも見せてやればそれで可いぢやない

か」

大倉「併し部分的でなく、大勢一緒に見られる様な不思議を、一つ現はして頂き

たいものですなア。司令も熱心にあゝ云ふてゐるのですから……」

日出雄「キリストですら、奇蹟を請はれて怒つたではないか……」

眞澄別「奇蹟を見ずして神を信ずる者は幸なり……といふ神言もありますけれど、

現今で言はば、朦昧の人々の間に出かけて來てるのですから、何とか工夫せねば

なるまいと思ひます。私は永久兇黨界へ墮落しても、それがお道の爲になるなら

構ひませぬから、先生さへ御許し下されば、私をお使ひ下さつて彼等の肝玉を挫

いでおくのも満更無駄ではありません。奇蹟を見たがる者は強ち蒙古人許りぢ

やありますまいから……」

日出雄は少時沈思黙考して、

「では、潔齋修行して見るが可い、眞澄別が行る事になれば構はぬだらう」

盧占魁は、

「實は全隊へ布告して、一同一週間の精進を命じ置き、此二十三日を以て終ります。其日には先生が奇蹟を見せて下さると申渡して了つたのです。何れ更めてお迎へに参りますから、是非御願ひ致します。序に記念の撮影も致したう御座いますから」

との意を述べて、雑談の後嬉々として一同駒の足竝も勇ましく、下木局子の司令部指して歸り行く。

日出雄は止むを得ず、眞澄別をして其衝に當らしむべく、洩兒河畔に聖域をトし、自らも出張して眞澄別の修業を指導した。

五月二十三日（陰曆四月二十日）朝暎殊の外麗はしき光を地上に投げ、蒼空一點の雲翳なく、樹々に飛交ふ鳥の聲は恰も天國の春を歌ふが如く、庭前に休らふ馬の嘶きも一層勇ましさを加へて聞え来る。午前八時頃魏副官は日出雄、眞澄別を迎ふべく馬車を急がしてやつて来た。折しも日出雄に扈從すべく準備せし温長興は、俄に頭痛烈しく、乗馬に堪へずと憩ふ。日出雄は思ふ所ありと見え、温長

興を轎車に乘らしめ、自らは眞澄別其他の護衛兵と共に馬に鞭ち、法衣を風に靡かせつつ下木局子に向ひ、假殿を出發した。一方下木局子の西北自治軍司令部にては、各分營の團長以下悉く來集し、「斯くの如き蒙古晴の空より雨を降らすなど、幾ら神様でも嘸困難であらう」などと、とりどりに噂をし乍ら、日出雄一行の來着を待ち兼ねて居た。時しもあれ、魏副官の先導にて日出雄の一行は總員整列出迎への中を堂々と乗込んで來た。少憩の後、日出雄の目配せを合圖に、眞澄別が何事か默禱すると見るや、司令部の上天俄に薄暗くなり、瞬く間に全天雨雲に蔽われ一陣の怪風吹き來ると共に、激しき暴風雨窓を破らむず計りに襲來して來た。一同驚きあわて、窓を閉めるやら、記念撮影の爲とて庭に列べてあつた椅子を持ちやら混雜一方ならず、皆々呆氣に取られて、暫し言葉もなかつたのである。稍あつて「大先生、二先生、今日は寫眞は駄目でせう」と、さも失望らしい聲が聞える。眞澄別は日出雄の顔を見て「ナア二五分鐘経てば大丈夫だ」と云へば、日出雄はやおら身を起して雨中に降り立ち、天に向つて「ウー」と大喝すれば、風勢頓に衰へ雨は漸次小降りとなり、果して向ふ五分鐘て眞澄別の宣言

に違はず、如何に成り行くかと案ぜられし暴風雨は、夢の如く消え去り、再び日は赫々と輝きわたり、空は元の如く晴朗に澄み切つたのである。盧占魁は嬉しさの餘り、驚嘆自失せる人々の間を立廻り、自己の宣傳の誇大にも虚偽にもあらざるを誇つたといふも眞に無理ならぬ事である。

茲で各營の幹部一同芽出度撮影の後、卓を圍んで會食し、談は徹頭徹尾此日の奇蹟に關する驚嘆と讚美に終始し、眞澄別は、此時已に朝來の頭痛は忘れた様に平癒しニコニコして何くれとなく幹旋の勞を執りつつありし温長興を指し、實は今朝出發の際大先生が今日の役目を承るべき龍神を、温さんに取り懸けられたので、それで温さんは頭が痛かつたのですよ。つまりあの轎車に龍神が乗つて來たのです』と云へば、科學萬能かぶれの人も、虚妄と感ずる餘裕もなく思はず感嘆の詞を漏らす外はなかつたのである。

日は漸く西天に傾き、日出雄等の辭し去らむとする頃は天候變りて又もや雨模様となり、今にも空は綻び相に見えて居た。盧占魁等は『今晚は此處にお泊りになつては如何です。強つてお歸りなさるなら、こんな空模様ですから、雨具を差

上げませう」といふのを、日出雄は「ナア二俺が旅立ちすれば降つてゐる雨も歇むのだ」と微笑し乍ら、上木局子の假殿指して歸り行く。果して日出雄一行の歸着迄は雨の神様も遠慮されたのか、其歸着と同時に沛然として、地上の塵を一時に流し去るかの如く強雨が降り注いだのである。

(大正一四・八 筆録)

## 第二六章 天の安河

何時の間に盧占魁が宣傳したものが、蒙古人等は日出雄の生立ちに就て左の如き信念を有してゐた。

「日出雄は蒙古興安嶺中の部落に生れ、幼にして父を失ひ、母は日出雄を抱いて、各地を流轉の揚句、日本人と結婚し、遂に日本へ伴ひ行かれしは日出雄六歳の時であつた。其後日出雄は日本にて成長し神の使命を覺つて、一派の宗教を樹立し

つつも、故國たる蒙古は常に彼の念頭を支配し、漸く時を得て、滅亡に瀕せる蒙古を救済度すべく歸來したのである。そして眞澄別は彼の母が後添の夫即ち日本人との間に出來た異父弟である」

といふのだ。それかあらぬか、蒙古の元老は日出雄を成吉思汗の再來と信じ、且つ源義經汗蒙古平定後、世界を統一し、其根據を蒙古外に移せし爲、蒙古は再び今日の如き衰微を來す結果となつたのだから、今回は蒙古平定獨立の上は、蒙古の地を離れて下さるなど、折に觸れて日出雄に哀願すること屢々であつた。そこで日出雄は、若し自分が國外に出かける場合は、異父弟の眞澄別を置いて行くから心配するなと答へて、彼等を慰めてゐた。故に索倫に移りて以來は、活佛其他の人々に應接交渉の必要の時は、何時も眞澄別が日出雄に代つて其任に當つてゐた。下木局子滯在中曼陀汗に親交ある活佛等が來訪した場合も、日出雄には單に敬意を表して引下り、眞澄別に對し、蒙古の窮状を告げ、赤軍の横暴などを訴へ、眞澄別は經典と劍とを兩手にして故國救援の第一行動とすることや、蒙古喇嘛の妻帶論などをまくし立て、彼等を喜ばせて居た。そして病人の鎮魂なども主

として眞澄別が之に當り、日出雄は活神として尊敬せられ、妄りに之を煩はさぬ様にする事が一般の傾向となつて來た。

上木局子の假殿に護衛團長何全孝は、或日一人の活佛を伴ひやつて來た。此活佛は北京を振出しに外蒙を横斷勸請しつつ、興安嶺地帯に、宏大なる喇嘛廟を建立すべく運動してゐる者で、救世主來降を傳聞し喜び勇んで來訪したのであつた。何團長は眞澄別と筆談にて活佛の來意を敷衍し、更に盧の人物に就て左の如く語つた。

「自分は察哈爾の生れで、多年盧占魁に従つて戰場を馳驅致しましたが、今日騎兵戰爭に於て盧司令の右に出づる者はありません。先年も察哈爾より大山脈竝に大沙漠を横切つて外蒙を斬り従へ、一時大庫倫に根據を構へ、更に轉じて綏遠、山西、雲南迄兵を進めて支那の天地を震撼せしめました。が、盧の居る間は其地は平定してゐますが、一度盧の去つた跡は復元の如く、何時しか盧の制令區域を自然に脱した状態になつて了つて、全く骨折損に終つてゐます。これは盧司令に政治的手腕が缺けてゐる爲であります。實際盧司令は武力征服一方の人ですから、

今回は征服の跡の政治方面を是非貴方に御願ひ致しました様な次第です。これは私文の希望ではありませんせぬ、司令以下吾々同志の者の等しく希望する所で御座います」

此木局子一帯の地に、盧占魁は所有權を設定し、上木局子に假神殿を建立し、之を日出雄の假寓とする計劃が進んでゐたが、軍容整頓事務に逐はれて中々抄らぬので、取敢へず上木局子部落中の最も瀟洒と見受けられる民家を徵發して、日出雄の假殿に當てたのである。

上木局子は最近例のチヨロマン民族の根據地であつたので、現住の部落民も公爺府以西の沿道筋の住民に比し特に獯猛の氣が漲つて居る。盧も此地點に氣を配りしものか、張彦三、何全孝、鄒秀明の三團長をして、各々其部下を率ゐて、之を護衛警戒せしめて居たのである。併し如何に獯猛な民とはいへ、妄に威壓すべきものにあらずして、日出雄一行は十數戸の民家を時々訪問し、親しく交はり、或は戯れ、或は病人を治し、徳化教育を怠らなかつた。隨つて護衛の將卒も武威を揮ふの要なく、實に平和な自治體が自然に形成されてゐたのである。

斯かる中に洮兒河畔の靈的修行は、日課の如く、上木局子出發迄繼續された。修行場は洮兒河の支流三筋落合の岸邊に約一間半四方の地を卜し、四隅に楊を樹てて塚とし、外蒙地帯に豊富なる岩鹽を以て之を淨め、祝詞を奏上し、神に祈りて濫りに冒すべからざる聖域と定められたのである。洮兒の流れは清きこと水晶の如く、冷たきこと氷の如しで、曹達分の含有量豊富で、洗濯には石鹼不用である。内蒙一帶の地はすべて曹達分に富み、寶裏山附近の砂漠地帯の下の如きは全部曹達が地層をなしてゐると云つて可い位である。

修行者は日々此洮兒の清冽な水で身體を清めるを例とし、守高、萩原、坂本、名田彦の面々も時々参加して居た。修行開始五日目の事であつた。日出雄は歸神りとなり身體より靈光を放射し、左の意の神言が其口を破つて出た。

「ウツフ、アハツハ、面白し面白し、秋津洲より渡り來りし、神素盞鳴尊、武速素盞鳴と現はれて將に滅び行かむとする、神の造りし神の國の立替立直を行はむとす。小人共がガヤガヤと立騒げ共、凡て神の仕組みし神業なれば、如何なる事變の起るとも、神に任せて心を煩はす事勿れ。武速素盞鳴尊先頭に立ち、

落着く場所は大庫倫なり。されど途中は迂餘曲折多し、必要と認むる事は此肉體に懸りて其都度説き示すべし。眞澄別は木花姫命竝に二體の龍神を以て守護せしめ、又守高は天の手力男竝に二體の龍神を以て守護せしめあれば、必ず其身を汚す事勿れ。又坂本廣一には法華教を守護する持國天をして守護せしめ、名田彦は白狐を以て守護しあれ共、未だ修業足らざるを以て、表に現はるに至らず云々。之に依り觀察すれば、日出雄は今日未だ大庫倫に向ふ途中の曲折中に身を置けるものとなるのである。尚此修業中、眞澄別の靈眼靈耳に前途に關する種々なる問題が映じ或は聞えた相で、其都度之を日出雄に報告すると、日出雄は微笑しながら肯くのが例であつた。其中既に實現せるは左の二つである。

(其一) 日出雄は一旦日本内地に歸還して陣容を直さねばならぬ事。

(其二) 六七回、倉庫とも感ぜられる鐵窓の建物が或は大きく或は小さく映じ、最後には鐵窓内より女神の覗く圖が見えたと云ふ。

後に至りて勘考すれば、日出雄は白音太拉の支那留置場、鄭家屯の支那留置場、竝に日本領事館留置場、奉天日本領事館監獄、廣島縣大竹警察留置場、兵庫縣上

郡警察留置場を経て、最後に大坂刑務所生活を以て身體の自由を得たる事の豫告であつたと見る外はなからう。殊に最後のは大坂刑務所の外観其儘であつたと云ふのだから不思議といふも愚かである。

因に名田彦は此修業の際冷水に身を浸した結果宿痾を再發し、終に中途歸國の途に就かねばならぬ事となつた。

(大正一四・八 筆録)

## 第二十七章 奉天の渦

日出雄が大志を懷いて綾の聖地を出發して以來、滿蒙の空を眺めては、日夜憧憬の思ひを抱きつつ、軍資金の調達に苦勞してゐた加藤明子は、日出雄出發後三週間を経た頃、日出雄よりの密書を受取つた。それには舊三月三日迄に横尾敬義、西村輝雄、國分義一、藤田武壽、佐藤六合雄其他之れを思ふ人々の中、四五名同

道して吾滞在の場所迄來れとの命令が認めてあつた。加藤は天にも昇る心地し喜び勇んで右の人々に其旨を傳へた。此中佐藤は用務の爲め、内地に残留し、西村は大庫倫へ一行到着迄待つと云ひ、横尾は他に要件があるので先んじて奉天へ向ひ、國分、藤田の兩人は早速關係事業の整理に取掛つた。尚加藤の通告に依り是非此一行に加はらむと決心した廣瀨義邦は、萬難を排して渡滿し、場合に依つては大連若しくは奉天に職を求めて時機の至るを待つ事とした。

加藤も蝟集し來る故障を凌いで出發準備を急いでゐる折柄、先に渡滿した横尾が歸來し、

日出雄先生は既に入蒙せしこと、唐國別の言に依れば後の連中は大庫倫到着後、來る様に

との事などを傳へた。加藤は豫期に反したので、取敢へず國分、藤田に其旨を通ずると、二人は既に準備全くなり、今更如何することも出來ぬといふ始末なので、已むなく其處置を大本二代教主に謀り、遂に國分、藤田、加藤の三人は、一命を賭して日出雄一行の跡を逐ふ事に決定したのである。

四月十六日奉天なる唐國別より西王母の服装を携行せよとの來電があつたので、  
其の用務をも兼ね、右三人は四月十八日奉天に向つて出發し、門司よりは偶々滿  
韓視察の途次にありし大谷恭平が加はつて一行四人となり、心は既に蒙古の大原  
野に馳せ、汽船や汽車も間道ロキ心地で二十日夕奉天驛に着した。豫て打電して  
あつたので、萩原、西島竝に折柄在奉中の唐國別夫人等が一行を出迎へ、其筋の  
警戒嚴なればとて、四邊を憚り乍ら稻葉町の中野といふ宅に案内された。翌二十  
一日一行は水也商會に趣き、王天海なる唐國別と會見したところが、王は不機嫌  
な面色で、藤田に向ひ、  
唐國別「君等は一體奥地へ入る積りで來られたのですか」  
藤田「左様です、勿論」  
唐國別「左様です……なんて……冗談ぢやないよ。君等はさう容易々と奥地へ  
這入れると思はれるのか。そりや誰だつて先生の側へ行きたいのは當然だよ、君  
等だけぢやない。しかし張作霖との複雑な關係を知りもしないで、ヤレ吾もソレ  
私もとやつて來られて耐るものか、僕の苦心は竝大抵ぢやないよ」

と前置して日出雄來奉以後の事情を縷々と辨じ、此際日本人の入蒙することは絶對に斷ると云ふ、甚だ意外な言葉であつた。

加藤「妾達は決して自分勝手に先生のお側へ行かうと云ふのではありませんせぬ。先生の御命令で参りましたのです。貴方も御存じの筈ですが……」

とて日出雄より來た親展書と、二代教主よりの三人の入蒙依頼書を差出した。唐國別は、

「あゝさうですか、私は些つとも知らなかつた。さうすると又新に三人の大先生を引受けた様なものだ。中々の大任だ。先生の入蒙に就ては、どんな苦心をしたか分りやしない」

とてこれから入蒙苦心談に夜を更かし、更闌けてから一行は宿に引取つた。然るに其後第二回の會見に於ては唐國別の態度激變し、

「先生の現在の御在所は自分には分りませぬ。また假令大先生、二代様のお言葉でも、自分の考へに反した事は聞き容れる譯には行きませぬ」

とて斷乎として三人に入蒙を拒絶した。三人は其傍若無人の言辭に驚き呆れ、且

憤慨したが、切何と詮術もないので、スゴスゴと引取る外はなかつた。

四月二十六日に至り、大倉奥地より日出雄の消息を齎らし歸れりとの報告を唐國別より受けたので、一縷の望みもやと、三人は急いで唐國別の店舗を訪れ大倉に面會した。大倉は愛想よく口を開いて語る。

先生は非常に御元氣ですから御安心なさい。併し現在入蒙は餘程困難ですが、先生より來いとのお言葉なれば、萬難を排して奥地へお送り申しませう。又先生のお言葉なく共、強ひて入蒙せられると云ふのなら、同胞の誼として捨ておく譯にも行きませぬでなア」

加藤等三人は大倉の此言葉に稍心勇み、先に唐國別夫人が「強ひて入蒙する者は途中で殺つて了ふと某浪人が言つてますよ」との話の裏切られた嬉しさと、先生のお言葉なら萬難を排して云々」といふ信者ならではの聴く事の出来ぬ言葉を大倉の口から發せられた嬉しさに、此の機を外してはと思ふ矢先、唐國別は、當地に居て一切の事情に精通してゐる吾輩の言に従はず、まだ入蒙を主張するのは不都合だ」

と詰る。今迄口を噤んで一言も挟まなかつた國分は此時初めて口を開き、

「此先生からの御手紙が貴方の手を経て来たのなら貴方のお言葉に従ひもしませうが、之れはさうぢやないのですから、一應先生に御照會願ひたいものですな」と言へば唐國別は頗る昂奮の態度であつたが、翌日自分を訪問した藤田を介し、左の如き意味の通告を三人に與へたのである。

「三人の入蒙は絶対に拒絶する。自分から手紙で先生の方へ……來奉者は追ひ返しますから御承知ありたし……と申遣はし、盧占魁には……軍の行動の邪魔になる事は先生の言と雖も聽従するな……と傳へ、尚使者に對しては……萬一先生から自分の考へと違つた御返辭のある場合には途中で握り潰せ……と命じて置いた。それでも尚自由行動を取り入蒙せられるなら、途中の危険に對して吾々は責任を負はない」

此の通告を受けた三人は熟議の結果、唐國別の口吻に女子の從軍禁制の旨もあつた様だから、此際加藤は斷念し、國分、藤田の二人だけ入蒙を取計つて貰ふ事にしようといつて一決し、加藤は大倉を訪問して之を語つた所が大倉は同情して「兔に

角先生の御指圖を仰ぐ迄、地方見物でもなさいます。との事に一縷の望みを残し、四月廿九日から五月二日まで、三人は撫順、大連、旅順などを巡覽した。此間に萩原は寫眞機を携帶して入蒙の途に就いたのである。

三人が再び奉天へ歸來した日、王敬義は唐國別の旨を含んで來訪し、

唐國別に無斷で何故大倉を訪問したか、それから旅順、大連などと出歩くのは不謹慎ぢやないですか」

と詰る。三人は王敬義を同情者と信じて居たので、

唐國別より最後の通牒を受けましたので已むを得ず大倉さんに絶つたのです、そして大倉さんのお勧めに依つて見物に行つて参りました」

と答ふれば、

王敬義「唐國別の言は一つの試練とは考へないですか」

加藤「さう思ひませぬでした」

王敬義「唐國別の言は瑞靈の神懸と認めませぬか」

加藤は「ハイ、さうは思ひませぬ」とて今日迄の經過を精しく述べたので、王

敬義も漸く心解けて、種々の便宜を計らふ事となつた。此時國分は憤然色をなし  
て言ふ、

「唐國別の言を瑞靈の神懸とは何のこつた。王敬義の價値も茲に至つては零だね、  
共に語るに足る信仰ぢやないね。若しあの時加藤さんが……承認します……とで  
も云はうものなら、今後斷然事を共にせない積りだつた」

と意氣軒昂たるものがあつた。隠して奥地よりの消息を待つ中に、日出雄より  
「此際女子の入蒙は困難なれば、日奉間を往復して連絡の用務を勤めよ」との傳  
達あり、國分、藤田に關しては何等の傳言なく、大倉の同情は全く一時の氣安め  
であつた事判明し、藤田は「ナア二、構ふものか、それでは飛行機を用意して來  
る」とて單身歸國して了つた。其後へ名田彦が使者として奥地より來奉し、種々  
消息を傳へたが、主として自身の苦心談や、愚癡のみにて要領を得ず、只僅に  
「暫く自由行動を採つて時機を待て」との傳言が含まれてゐるらしく思はれたの  
で、加藤、國分の兩人も遂に時機の到來せざるを察し、五月八日意を決して歸國  
の途に就いたのである。途々國分は微笑しながら、

「藤田君の飛行機入蒙計劃もよからうが、今の世の中は黄金の彈丸に限るよ、金さへあれば浪人の鬼面も直ぐ惠比須顔に變るよ。さうすりや門番神を出しぬいて、道案内させる位は朝飯前の仕事だ」  
と加藤を顧みて笑つた。歸來後三人は三様の活動方針を取つたが、其後加藤は米倉範治の紹介で嘗て滿蒙の野に驍名を轟かせた劉武林事綠川貞司に師事し、馬術の稽古をはじめ、綠川を案内者として入蒙の意を果すべく湯淺清高、谷前清子、松村清香、東尾輝子等を招集すべく準備中、通遼の異變に接したのである。  
唐國別等が加藤等の入蒙を拒んだのは、加藤等の入蒙は大庫倫着の後と、豫て日出雄から聽いてみた外、何等の命令を受けなかつたからであつた。

（大正一四・八 筆録）

## 第二八章

### 行軍開始

これより曩、洮南より三井及び佐々木が密使を遣はし、洮南附近盧の名を騙る小馬賊の横行甚しく、官民共に困苦の結果、張作霖よりも此際盧が東三省圏外に出でざる限り、大々的に討伐軍を差向くべし』と報じて來たが、盧司令は事もなげに、

『それは自分が豫て張大師（張作霖の敬稱）と約束した計略で、東三省内の馬賊を討伐の名に於て索倫へ向け追ひ放ち、自分は之を全部糾合して部下となすべき、一舉兩得の妙案なのだ』

と云つてゐた。然るに爾後引續き後方より輸送せらるべき筈の彈藥武器は來らず、又所要のため歸奉した佐々木、大倉、楊崇山等より何等の消息も到達しないといふ情況なので、盧も稍不安を感じたのか、六月二日腹心の部下數騎を率ゐて、上木局子なる日出雄の假殿を訪づれ、茲に密議は凝らされた。秘密事項又は特に緊要なる問題は、何時も日出雄の意を受けたる眞澄別と盧占魁と筆談にて解決するのが例であつたから、無論此日も筆談に依つて兩者間に問題が議せられたのであるが、其要點は凡そ左の如き問答であつたと、著者は推斷すべき理由を有つてゐるが、

る。

眞澄別ますみわけ、何時迄いつまでも、此處ここに駐屯ちゅうとんして居た所ところで仕方しかたがないぢやありませんか。張作霖ちやうさくは貴方あなたの思おもふてる程ほど、貴方あなたを決けつして後援こうえんしませぬよ。それよりも獨立開發どくりつかいはつの計けいを立て、先まづ源義經げんぎすが初はじめて王旗わうきを翻ひるがへしたと傳つたへられてる興安嶺こうあんれいの聖地せいち迄進軍しんぐんしたら何どうですか、興安嶺こうあんれいには七千しちせんの赤軍せきぐんが居ると貴方あなたは謂いはれましたが、靈眼れいがんで見ると、乗馬じやうばは四百頭しひやくとうある様やうだけれど、人ひとは二百足にひやくたらずですよ。通譯官つうやくわんさへ付けて呉くれれば、私わたしひとり先發せんぱつして立派りつぱに妥協たけふして見みせませんがなア

盧ろ、イヤ、誠まことに遅延ちえんして濟すみませぬ。長銃ちやうじゆうが不足ふそくだものですから、あれでもと思おもふて待つて居ゐましたが、モウ決心けつしん致します。併しかし興安嶺こうあんれいのあの地帯ちたいは食料しょくれうがなく、これ丈だけの人数にんずうが繰込くりこみでは忽たちまち物資ぶつしに困こまります。それよりも先まづ綏遠スイエン、察哈爾地チャハルチ方うより當方たうほうへ参加さんかする大部隊だいぶたいに早はやく合がつする様やう、其方向そのほうかうに向むかひ、充分じゆうぶん物資ぶつしを豊富ほうふにして、それから外蒙ぐわいもうへ向むかひませう。兔とに角かく二三日にさんちの内うちには出發しゆつぱつする様やうに取計とりはからひますから……

斯かる折柄をりから、下木局子しもくきよくしに留守居るすゐをして居た馬副官ばふくわんは顔色かほいろを變かへ、全速力ぜんそくりよくで馬うまを飛と

ばしてやつて来て、何事が慌しく報告した。これを聴くと盧は決心の色を面に浮べて立上り、日出雄一行に出發の準備を請ひおき、直ちに司令部指して急ぎ歸つた。

司令部の東南方約三十支里の地點に殿として、滿州馬賊の大頭目大英子兒が手兵の一部六十餘騎を率ゐて駐屯して居たが、此日恰も大英子兒は司令部へ出頭し不在中部下の者共は、寛いで晝寢の夢を貪つてゐる最中、洮南の官兵約三百餘騎が突然襲撃したのである。大英子兒の部下は少數なりと雖も、皆一騎當千の粒揃ひの事なれば、直ちに裸の儘銃を取つて應戦し、數百の官兵を一步も寄せつけず、一方急を司令部に報じた。司令部にては戦非戦兩派對立して議容易に纏らずといふ有様なので、大英子兒は單身馬を飛ばして、自分の屯營に立歸り、部下を引纏め悠悠々として司令部迄引揚げた。其敏活さ、豪膽さに官兵は肝を奪はれてか、敢て追撃もしなかつたのである。

此時司令部の一室に控へて居た岡崎將軍は參謀連の不甲斐なきを怒り、  
「こんな連中と一緒に居ては先生の御身が案ぜられる」

とて手近にあつた兵糧を取纏め、牛車數臺を徵發して之を積載し、急ぎ上木局子の假殿に向つた。之と入れ違ひに、盧司令は司令部に歸つて來たが、彼は參謀揚萃廷の「討伐隊は大英子兒を撃ちに來たものだ」との言を信じたものか、或は東三省の兵と戰ふのは自分で自分の立場を危くするものと解したか、議論百出の間に西北へ向つて移動の命令を下し、車輪不足の爲積載出來ぬ兵糧などは、黒龍江の木局署へ處分を委託し、西北指して行動を起す事とした。

夜の帳がスツポリと卸された頃、上木局子なる日出雄の假殿の周圍は、下木局子を徹退した軍兵を以て幾重にも取巻かれ、馬の嘶、犬の遠吠、篝火の焰、今迄靜寂なりし上木局子の天地は俄かに殺氣が漲つた。

假殿内にては盧以下數名の幹部が日出雄、眞澄別、岡崎に向ひ前途に關する行動に就き説明を重ねつつ夜を更かしてゐたが、結局地理不案内なる日本人側は進路を盧に一任する事となつた。折柄暗の一遇に銃聲一發と、斷末魔の聲が聞えた。哀れなる一兵卒は上官に反抗せるの故を以て、即座に銃殺されたのであつた。

とかく 兔角する内翌六月三日午前三時となつた。鄒團長の部隊、先鋒となり、盧は自ら日出雄護衛の任に當り、曼陀汗は殿り、大英子兒は全隊の見廻り、張彦三は牛車隊の監督など、夫れ夫れ役割を定め、西北興安嶺の聖地を指して行軍を開始する事となつた。道路とて別に定まつたものはなく、唯樹木點綴せる大高原を洮兒の流を標準に縫うて進むのである。途中黄楊の大木があると、坂本は馬上より指して、

「アルセンシヨン、こんな黄楊一本あれば、築前琵琶が幾つも出来ますなア」  
と歎聲を漏らす程のが數知れず樹立してゐるのは、特に日本人連中には珍らしかつた。

此日暮近き頃、洮兒の上流、河畔の森影を日出雄一行の陣營と見計らひ、露營の夢を辿る事とした。

「モウ上木局子を離れては當分人家は素より家畜も見られない」  
と曼陀汗が説明する。狼其他猛獸の襲來を防ぐ爲とて、所々に揚る焚火の紅煙は天を焦さむ許り森を眞赤に照して居た。此夜半頃大英子兒は竊かに日出雄を訪問

し、岡崎を介して「私はどこ迄も貴方方を御保護申上ます」と誓ひ、日出雄の手づから與ふる鯨を再三推し戴き「言語さへ通ずれば……」てふ物足らぬ心を面に現はしつつも、ニコニコとして辭し去つたが、彼は前日下木局子に於ける盧の處置を快しとせず、竊かに期する所あつて、此夜脱出し、部下諸共何れへか姿を消して了つた。果せるかな彼は今日熱河の奥地に本據を構へ、已に三千の精兵を引具して紅帽軍を組織し、日出雄の弔合戦をするのだ……と堂々の陣を張り、日出雄、眞澄別の再渡來を待つてゐるさうである。大英子兒脱退と同時に、豫て非戦論を潔しとせざる勇士は續々として姿を隠して了つたので、翌朝出立の際には、騎馬兵五百騎、馬整はずして牛車に便乗せるもの三百有餘と算せられた。

(大正一四・八 筆録)

第二九章 端午の日

西北せいほくに向むかつて續つづけられた行軍かうぐんは、山やまを越こえ谷たにを渡わたり高原かうげんを横よこ切りつゝ進すすみ行く。  
ふと見みれば前ぜん方に素す晴ばらしい高山かうざんが横よこたはつてゐる。あの山やまが馬うまで越こえられやう  
かなと案あんじつゝ進すすむ間うちに、何時いつしか其頂そのただきに達たつしてゐるといふ様やうな緩勾配くわんこうはいは、全まったく  
大陸たいりくの特徴とくちやうであらう。六月五日ろくぐわいつかになると如何いかなる都合つがふか、針路しんろは俄にはかに南方なんぼうへ轉てん  
ぜられて居ゐた。方向ほうかうが違ちがふぢやないか一體いつたい何處どこへ行くのだ、興安嶺こうあんれいの聖地せいちへ行く  
のぢやないか、などと日に本ほん人じん側がはから不審ふしんの聲こゑが出でたが、既すでに先鋒せんぽうは遠とほく進すすんでゐ  
る事こととて、地理ちりふ不案あんないの者ものの自由行動じゆうかうどうは困難こんなんである。四圍しゐの景色けしきは何時いつしか變かはつ  
て、眼めの届とどく限りかぎ火山爆發くわざんぱくはつの跡あとらしく、熔岩ようがん或あるひは火山灰凝固くわざんばいぎようこの中なかを通とほり抜ぬけて、  
其壯觀筆紙そのさつくわんひつしの能よく盡つくす所ところでない。岡崎をかざきは馬ば上じやう乍ながら日出雄ひでをに聲こゑをかけ、  
岡崎をかざき先生せんせい、何なんと大おほきな火山くわざんぢやありませんか  
日出雄ひでを先生せんせい、さうです實じつに雄大ゆうだいなものです  
眞澄ますみ先生せんせい、阿蘇あその火山くわざんも大規模だいきぼで、世界せかい一の大火山だいくわざんと地文學者ちもんがくしやから言いはれる丈だけ  
あつて實際壯觀じつさいさうくわんですが、此處ここはモ一つ大規模だいきぼぢやないでせうか、何かなに曰いはくのあり  
さうな所ところですな

日出雄「さうです、之れが靈界物語の第一巻にある天保山の一部ですよ、地文學者の足跡が至らないので、まだ世間へ紹介されて居ないのだらう」

眞澄「今度の蒙古人には靈界物語中の實現が大分含まれて居ると、腹の中で數へて居ましたが、お蔭でモ一つ判りました」

など語り合ひつつ、草の褥に星蒲團の大陸自由ホテルを目標して行く。

六月六日陰曆五月五日の正午頃、遠く山屏風を引廻した廣大な草野の中に、罐詰やメリケン粉製の餅などくさぐさの食料を口にし乍ら雑談に耽つて居るのは、云ふ迄もなく日出雄の一行である。

此日五月五日の吉日とて幹部連は記念撮影をなし、各兵團はそれぞれ適當の地位をトし、團旗の下に集まつて遙に護衛の任務を盡してゐる。

岡崎「なんとこれ丈廣い野原に、眞中を河が流れてゐるし、草の出來按配から見ても地味が佳さ相だが、立派な水田が出来るやうに思ふね」

守高「私が北海道に居つて開懇に従事した經驗から考へても、立派な水田ができます。今日迄旅行した蒙古の中で公爺府以西は素晴らしい沃野が遊んでゐますな

ア。氣候風土の感じから云つても、北海道に出来る物は何でも作れますよ、惜いものですね」

坂本「これ丈私に頂けたらモウ満足です。半分は水田や畑にし、半分は牧場にして好きなナイスと、羊の皮の天幕張の蒙古包で十分だから、一緒に暮して見たいなア」

眞澄「坂本さん、「ナイス」は後から送り届けるとして、先づ君一人此處へ残つて準備に取掛つたら何うです、アハ、」

坂本「アハ、マア優先權さへ認めて頂けりや結構です」

眞澄「實際何等束縛も干渉もないこんな大天地が豊に横はつて、人間さまのお越しを待つてゐるのに、狭苦しい所で唾み合ひしてゐるのは氣の毒なものだ。時に曼陀汗さん、此附近に鑛山の良いのはありませんか、早く趙徹さんに一億圓儲けて貰ひたいですから、アハツハ、」

曼陀汗「サアよく存じませぬが、外蒙の砂漠の中には水晶洞がチヨイチヨイあります。又中央の火山脈の水源地の樹木鬱蒼たる所にルビーの岩があると聞いてゐ

ますが、まだ私は行った事はありませぬ」

坂本「外蒙の喇嘛廟には十二三の子供位の大きさの金無垢の佛像があるさうだから、それ一體丈せめて頂戴したいものだなア」

井上「坂本さん、今そんな重い物を貰ったつて運搬に困るよ。それよりも新疆へでも行つて見る、砂金の粒が幾らでも轉がつて居るサ」

盧占魁「新疆は世界の寶庫だと私は思ひます。山間の堅い氷の様な雪を缺いで引起すと、雪の裏に十八金程度の砂金がベツタリくつついて居るやうな所は珍らしくない位です」

日出雄「私の靈界で見てる所では、安爾泰地方から新疆の西藏境の方面には、砂金と云ふより寧ろ金の岩とも云ふべき程の物が澤山隠されてゐる。鑛物のみでなく、新疆は神の經綸に樞要な場所、一般に天恵の豊富な土地なのだ」

眞澄「先生、御神諭に示されてる通りですがな。實地を見る迄神を信じない人が多いのだから随分面倒ですなア」

日出雄「だから神様は骨が折れるのだ」

盧占魁「併し新疆へ入り込むには勝手を知つた者に案内させないと、妙な砂漠がありました、うつかり踏み込むものなら人馬諸共ズブズブと滅入り込んで了ひます」

眞澄「先生、今盧さんの言つた場所は靈界物語第十卷の安爾泰地方の章に説明されてる場所に當るぢやないでせうか」  
日出雄「さうらしいなア」

それからそれへと談話が交換されてる時、猪野軍醫長は手に大きな氷塊を掴み乍ら走つて來た。

「先生、こんな氷を見つけて來ました、地下三尺位までは十分解氷してゐますが、六七尺の所はまだ此通りです。河の縁の地の割れ目に這入り込んで、辛苦して割つて參りました」

一同猪野軍醫の心盡しの氷の破片に渴を癒やし、再び行軍を續けた。青野ヶ原の盡くる邊りから見渡す限り一面の花野を進む。福壽草に似た黄色い花や紫雲英に似た花、菖蒲に似た紫など、紅黄白紫各々艶を競うてゐる。

☞ 月光愈世に出でて

精神界の王國は

東の國に開かれぬ

眞理の太陽晃々と

輝き渡り永遠に

盡きぬ生命の眞清水は

下津岩根にあふれつつ

慈愛の雨は降り注ぐ

莊嚴無比の光明は

世人の身魂を照すべく

現はれませり人々よ

一日も早く目をさませ

四方の國より聞え來る

眞の神の聲を聞け

靈の清水に渴く人

瑞の御靈にうるほへよ

と歌ひつつ本部隊より十數町遅れて、此廣き花野を吾物顔に馬上豊かに進み行くのは眞澄別であつた。坂本は後に引添ひ乍ら☞全くですなア☞と感嘆の聲を漏らし乍ら近頃内地で流行する唄だとして節面白く唄ひ出した。

☞ 僕も行くから君も行け

狭い日本にや住み飽いた

波なみの彼方あなたに支那しながある  
支那しなには四億しおくの民たみが待まつ

昨日きのふは東ひがし今日けふは西にし 身みは浮草うきぐさのそれごとの如ごと

果はてしなき野のに唯一ただひとり人  
月つきを仰あふいで草枕くさまくら

玉たまの肌はだなる此體このからだ  
今いまぢや鎗創刀傷やりきずかたなきず

これぞ誠まことの男をとこぢやと  
ほほ笑えむ顔かほに針はりの髭ひげ

僕ぼくには父ちちも母ははもなく  
生うまれ故郷こきやうに家いへもなし

幾年いくとせ馴なれし山やまあれど  
別わかれを惜をしむ者ものもなし

唯悼ただいたはしの戀人こひびとや  
幼をさなき頃ころの友達ともだちは

何處いづこに住すむのか今いまは只ただ  
夢路ゆめぢに姿すがたを偲しのぶのみ

興安嶺こうあんれいの朝風あさかぜに  
劍つるぎをかざして俯ふし見みれば

北滿州きたまんしゅうの大平野だいへいや  
僕ぼくの住家すみかにやまだ狹せまい

國くにを出でてから十餘年じふよねん  
今いまぢや蒙古もうこの大馬賊だいばぞく

亞細亞あじあ高根かねの間あひだより  
繰くり出だす部下てしたが五千ごせん人

駒こまの蹄ひづめも忍しのばせつ  
月つきは雲間くもまを抜ぬけ出いでて

明日は襲はむ奉天府

ゴビの砂漠を照らすなり

花野も盡きて三方山の谷間に着いた頃、空はどんよりと曇り始め、遂に雲は綻びて雨となつた。日は既に傾きかけた上、前途は山又山が重疊と折重なつて見えてゐる。併し此雨では野營の夢を結ぶなどは思ひも寄らぬ事である。此時こそはと、日出雄は小高き岩上に登り立ち神言を奏上し初むるや、一天ガラリと晴れ渡り、五日の月西天に玲瓏たる慈光を放ち初めた。茲に日出雄一行も心を安じ、就寢の準備にかかると、如何なる軍議が參謀の間に纏りしか、引續き夜間行軍開始の報告が來たので、一行は呟き乍ら又行進し始めると、間もなく再び小雨そぼ降る空となつた。日出雄は「最早吾々の責任でない」と云ひ、眞澄別も別に祈願しようとしなさい、終に豪雨に見舞はれて、全軍山間の岩影に夜を明すの已むを得ざる事となつた。此時張彦三は「先生が折角雨を止めて下さつたのに司令が無斷で宿營地を變更したから神罰を受けたのだ」と吐息を漏らして大に歎じた。

(大正一四・八 筆録)

### 第三〇章 岩窟の奇兆

夏期に相當する二三ヶ月の間は、蒙古奥地は西ベリア方面と同じく夜が非常に短い。西北の空に夕焼の名残が消えたかと思ふと、間もなく早や東天紅を潮すると云つた調子である。月なき夜でも午前二時過ぎる頃から、危険な山路でも安全に旅行が出来るのである。張彦三の所謂神譚の雨を岩影に避けた全軍も、其中雨が小歇みになつたのでヤツと胸を撫で下し、六月七日（陰曆五月六日）午前二時半頃全軍に出發命令が傳はつた。騎馬にての旅行は兔も角、二頭或は三頭立の牛車や騾馬と（馬と驢馬との混血にて牽引力最も強き種類）三四頭立の轎車が、山と云はず川と云はず岩石崎嶇たる難路を、相當の重量を積んで無茶苦茶に進み行くのだから、便乗した人は中々安き心もなかつた。頭を打ち、肱を打ち、時には轉落の犠牲も拂はねばならぬと云ふのだから……荷物があつては黄金の大橋は渡れんぞよ……といふ大本の警告の如く、人生の行路はやはり身軽に限るてふ感を感じ禁ずるを得ない。此日岩山を乗り切つて次第次第に高原地帯を、山と山との間を

縫ぬひて進すすんでゆく。空そらは漸やうやく晴はれて赫かくかく々たる太陽たいやうは冬服ふゆふくその儘ままの全軍ぜんぐんを照てらしつけ  
る。而しかも行ゆけども行ゆけども牧草ぼくさうはあつても、一滴いつてきの溜水たまりみづも見付みつからない。携帶けいたいの  
食糧しょくりやうは已すでに残のこり少すくなくなつてゐる。無論むろん人家じんかは見付みつからず「アア」と云いふ歎息たんそくの  
聲こゑが何處どこからともなく聞きえて來くる。水みづを探たづねて馬うまを急いそがす者もの、食糧車しょくりやうしゃを待まち合あは  
者もの、隊たいは遂つひに三々五々さんさんごごとなつた。此時このとき日出雄ひでをの側そばには眞澄別ますみわけ、守高もりたか、坂本さかもと、白凌パイリン  
閣ク、温長興をんぢやうこう、王瓚璋わうざんじやう、康國寶かうこくほうの七人しちにんが轡くつわを列つらねて居ゐた。坂本さかもとは堪たへかねて、  
坂本さかもと「先生せんせいみなさき皆先みなさきへ行いつて了しまつた様やうですけれども、先生せんせいのお荷物にもつや食糧品しょくりやうひんを積つんだ  
轎車けうしゃはまだ遅おくれてますから、どつかそこらで一服いっぶくしたらどうでせう。人ひとも馬うまもこ  
れではへトへトになつて了しまひますよ」

日出雄ひでを「さうだね、では此處ここは可かなり牧草ぼくさうもある様やうだから一休ひとやすみしやう」

坂本さかもと「先生せんせい、私は今少いますこし位辛抱べんごしんばうも致いたませうが、富士ふじちゃんが可愛相かあいさうです」

富士ふじと云いふのは坂本さかもとの乗馬じようばの名なで、實際じつさい交通機關かうつうきくわん不備ふびの地方ちほうを旅行りよかうすると馬うまが  
唯一ゆめいつの友ともであり、馬亦騎うままたのり乗者りてを慕したひ、人間にんげん同士どうしに此情愛このじやうあいが保たもてさへすれば、喧嘩けんくわ  
など夢ゆめにも起おこらないであらうと思おもはれる位くらゐだ。而しかして日出雄ひでをの馬うまは白金龍はくきんりう、眞澄ますみわ

別の馬は白銀龍、守高の馬は金剛と命名され皆白馬であつた。馬は鞍を外されて  
牧草の間に放たれ、人はポケットに残つた煙草を譲り合ひつつ青草の上に寝ころ  
び、紫の煙りを天に向つて吹き出し乍ら、相變らず減らず口の叩合をして轎車を  
待つてゐる。併し轎車は何等か故障の起つたものか、中々追ひついて来ない。遅  
れ来る兵士に訊いても「まだまだ大分後方だ」と云ふ。日出雄は「ナア二牛や馬  
の喰ふ物が人間に喰へない筈はない」とて、其處等の草を引抜いては美味い美味  
いと喰べ初める。附添ふ人々も「なる程そらさうだ」とムシヤリムシヤリとやり  
出した。

坂本「併し盧占魁は怪しからぬ奴ですな、先生に何の答もなしで自分が大將面を  
して轎車に乗つて先へ行つて了ひよつた。自分が護衛を直接に申し上げるから、  
外の者の側へ御越しにならぬ様になんて云つておき乍ら……」  
守高「何でも劉陞三と盧占魁との間に、先生を中心として勢力争ひが起つてると  
いふ評判もあるがね」  
坂本「それなら尚更先生のお側を離れなきや可いぢやありませんか」

眞澄別「マアそれはそれとして兔に角、も少し位水のある場所がないとも限らぬから、モウ一息進ませう。其間轎車も参りませうから」

日出雄「それが宜からう」

と再び鞍上の人となり、宣傳歌やら出鱈目歌を唄ひ乍ら行を續けた。日は益々照り渡り綿入の肌着は愈々熱して来る。雨少なく空氣が乾燥してゐる地方だから餘り汗は出ないが、喉の渴く事夥しい。何うしたものが此日に限つて水らしい物は馬の小便の溜すら見付からぬ、さりとして他に取るべき手段もない、行路を馬に任せつつ進むうち、奇岩を折り重ねた如うな岩山の麓に達した。時既に午後五時を過ぎる頃であつた。岩山を取り巻く麓の青野原の一部に、土地の一間許り陥落した場所があり、地下層解氷の爲か眞黒い水が湧きこぼれてゐる。馬を其畔に近付けて見ると、馬は喜び先を争うてガブガブと呑み出した。すると如何にしけん日出雄は「俺はモウ此處から動かぬのだ」と大喝したかと思へば、もう其姿は見えず、其馬は素知らぬ面で草を食むである。坂本は早速下馬してウロウロと捜し廻り、臆て走せ來つて眞澄別に向ひ、

坂本「先生は彼の山の腹に岩窟がありますが、其中に瞑目静坐してゐられます。

何うしたら可いでせう」

眞澄別は守高と共に直ちに岩窟に到り見れば、日出雄は神懸となつてゐる。眞

澄別はその意を悟り、

眞澄「守高さん、今の進路は吾々の想うて居るのと違ふ様だし、大分怪しい點も

あるから、暫く此處を根城とする事にしようぢやないか」

守高「さうだ、僕も賛成だ、此處は高熊山の岩窟に能く似てもゐるし、尋常事ぢ

やなからう」

一行は此處に當分宿營の決心を定め、王瓚璋をして此事を報告せしむべく盧占

魁の後を追はしめた。日出雄の荷物即ち西王母の服、宣傳師服その他手廻り品竝

に食糧の殘品を積んだ二臺の轎車は、約一時間半遅れて此處に到着した。此二臺

の轎車は山田文次郎が便乗監督し、洮南より軍需品等を積載して索倫に來り、其

儘歸途の危険を慮つて隨伴したのである。轎車より材料を取出して野營の準備に

着手される、一方、馬の渴を醫やした眞黒の水は、明礬を利用して飲料用に淨化

せられる。枯木の枝を集めて之を沸かす、茶を入れたら黒インキになつたから、こら鐵鑛泉ですよ」と騒ぎ立てるのは坂本である。

日は漸く西に白搗き空に星の輝き初むる頃、張彦三の部隊が殿りとして到着し來り、眞澄別より事情を聴取り、

「それでは私が盧に代つて御保護申し上げます、私の方には未だ米も牛肉も幾らかあります、先生がお動きにならねば、私も何時迄もお側に止まつて御保護いたします」

とて部下に命じて炊き出しを開始し、スツカリ腰を据ゑて了つた。やがて日出雄も岩窟より出で來り、賑やかな野天食堂が開かれた。

此時王瓚璋馳せ歸り、盧以下全部隊は約五十支里前方に屯營し居り、其處には人家四五軒あれど飲料水の不足なる事や、盧は水を求めて急いだのであるが部隊整理次第直ぐ迎ひに來る事など報告した。眞澄別は更に岡崎と萩原に對し何事か名刺の裏に認め、温長興を使として前方の駐屯所に向ひ馬を急がしめ、茲に一同寢に就くこととなつた。

第五篇 雨後月明

第三一章 強行軍

岩窟がんくつの附近ふきんもホノボノと明け初あめれた頃ころ、馬うまを飛とばしてやつて來きたのは萩原はぎはらである。

萩原はぎはら「昨晚さくばん眞澄ますみさんからのお知らせしに依よつて早速さつそく引返ひきかへさうかと思おもひましたが、どう云いふものか道筋みちすぢが眞暗まつくらで馬うまが一ち寸よつとも進すすみませぬので、漸やうやく只今ただいま参まゐりました。昨さく晩ばんは人家じんかが四五軒しごけんあつた爲ため、却かへつて混雜こんざつしてゴタゴタしてゐましたから、お越こし

にならなかつた方が好都合でした」

坂本「ヤツパリ神様は前途が見える哩」

萩原「岡崎さんは非常に憤慨して盧占魁に當り散らしてゐましたよ。それから名

田彦さんは病氣で困つて心細がつて居ましたが、何でもポツポツ歩行いて引返し

て來るらしかつたですよ」

日出雄「そら可愛相だ。オイ白凌閣、馬を曳つて名田彦さんを迎へて來い」

白凌閣は直ちに駒に跨り、守高の乗馬を名田彦の迎へ馬として引具し驅け出し

た。それと入れ違ひに、五六頭駒の頭を立て並べて疾驅し來たのは、盧占魁と其

副官連とであつた。盧は直ちに日出雄の側に行き叩頭して何事か辨じたが、生憎

此場には山西省訛りの彼の支那語を通譯し得る者がなかつたが、要するに「露營

に適當の場所を選定する爲に急いだので、無斷で行つたのは誠に濟まなかつた。

軍の整理もせねばならず、混雜してゐるから、自分の心裡を察して一緒に進んで

貰いたい」といふ意味であつたらしい。日出雄は唯、

「御苦勞であつた」

との一言を残し、眞澄別、守高を伴ひ岩山の頂上に登り、東天に向つて祝詞を合奏し、萩原をして記念の撮影をなさしめ、悠々として朝食を喫した。盧は再び日出雄の側に寄り懇願の意を表すると、日出雄も諾き乍ら馬に跨つた。

眞澄別「先生、またお進みなさるのですか、巧く話して別行動を取らうではありませんか」

と引止むれば、

日出雄「折角盧も懇願するから皆の居る所まで行つて其上の事にしよう」

と出發を急ぐ。名田彦は山田と共に轎車に便乗し、司令部駐屯所迄進む事となつた。

眞澄別「チエツ盧氏に曳かれて善光寺参りか」

と呟き乍ら、日出雄が盧に促され砂煙りを立てて馬を急がすのを見送つた。途中まで出迎へに來た猪野軍醫長と轡を並べ、何事か語り合ひつつボツボツ進み行く。猪野「二先生、盧占魁を力にして居ては前途心細い事はありませんまいか。岡崎さん、現状では危くて仕方がないから、何とか方法を講じて來ると云つて、包圍

長の轎車に同乗して先程出發しましたよ

眞澄別「兔に角神様からの第一命令が盧占魁に下つたのだから、安全に入蒙出來

たのは盧占魁の活動ぢやないか

猪野「昨晚から段々兵隊も減る様だ……盧の命令は少しも權威がありません。こ

れ位な部隊の統一が出来ない様では不安で堪りませぬ。ヤハリ最初岡崎さんの計

畫で奉天へ日出雄先生のお住居まで用意して居つたと云ふ趙倜や趙傑をお利用に

なつた方が良かったらうと思ひますが、何うでせう。岡崎さんも切りにさう言つ

て居られましたよ

眞澄別「神様の思ひと人間の想ひとは大變な相違のあるもので、實際人間には善

悪正邪を批判する資格もないのだから、要するに盧占魁は盧占魁としての使命が

あり、劉陞山には劉陞山としての使命があつて従軍してゐるのだから、最後迄行

かなきや其真相は分るものでないよ。マア行く所まで行くのさ

猪野「全く劉が却つて盧に命令する様な傾向ですよ。劉の隊は人数も一番多いし

武器も揃ふてますからなア。私は何だか危険味を感じるので、一度洮南へ歸つて

みたい様な氣が致しますが如何でせう」

眞澄別「それは大先生に伺つてお定めなさい。私としては何れとも御勧めする譯には行かない。私は大先生自身を神と信じて居るので、假令自分の考へと違つた言行が大先生にあつても、何事も其舞臺々々の筋書は神様でなくては判らぬから、大先生に對し維れ命維れ従つて行くのだ。何だか最前の岩窟から前進するのは厭で仕方がないけれども、大先生がああして盧と一緒に進まれるのだから神に任せて行くのですよ」

猪野「そんなものですか」

と腑に落ちぬ顔色で従ひ行く。此時の司令部の駐屯所は熱河の最北部に在る民家で、輓近大英子兒が活動の根據は、右の岩窟の附近だといふのも何等かの因縁事であらう。さて日出雄一行の到着した司令部は兵員整理の爲如何にも混雑中で、岡崎は包金山と共に應援軍組織の爲奉天に向つた後であつた。茲で陣容は一新され、乗馬や銃器の調のはざるものは、それぞれ旅費手當を給與して歸還の途に就かしめる事となつた。盧の實弟盧秉德、名田彦、山田、小林善吉其他支那人二名

は、洮南より來れる二臺の轎車に分乘し、強行軍に邪魔になる様な携帶品をも積み込み、四百餘支里の距離と稱せらるる洮南に向つて歸奉の途に就いた。此一行は後に至り突泉にて支那官憲の手に捕へられ、盧秉徳は洮南に於て銃殺せられ、日本側三名は領事館渡しとなつたのである。

或る民家の一室には、眞澄別が日出雄の意を受けて劉陞山と筆談を交換してゐる。其意味は左の通りである。

眞澄別「一體此部隊は之から何方へ行く事になつてゐますか」

劉「物資の豊かな綏遠で冬籠りをするのだと云つてゐますから、先づ察哈爾へ向ふのでせう。それに就てはこれから三百支里程行つた所で、開魯の兵と一戦せねばなりませんから、此處で可成り手足纏ひを少なくする様に計つたのです」

眞澄別「あなたは何處迄も盧司令と行動を共にするお考へですか」

劉「大體私は何も知らずに參加したのです。奉天第一師長の李景林から、鄭家屯の闕旅長に手紙をやつた結果、闕中將も君等を保護すると云つてるから、早く索倫へ行つて盧占魁の軍に参加せよとの事でしたから、實は盧軍の目的も何も聞か

ず、好きな道だから、早速手兵を率れて参加した次第ですが、私は兔に角大先生を中心にして何處迄も押立てる考へで居ります。おゝ司令も其處へ見えまして」

盧は此時微笑し乍ら入り来り、

盧「これで武器を携帯した騎兵のみ五百騎となりました。こんな所に駐屯して居ても仕方がありませんから、今少し兵糧の得られる所まで参りませう。大先生は今日から轎車に乗つて戴く事に致します」

とて直ちに出勤の用意を整へた。劉陞山の部隊は先鋒に立ち、日出雄は自分の手廻り品と盧の貴重品を積み合はした轎車に乗り、盧占魁自ら馬を馭し、守高竝に二三の支那將校は日出雄の轎車に附添ひ護り、眞澄別は或は先頭に或は後方に出て没して全軍を見守り、萩原は寫眞機を肩にして自由に飛び廻り、茲に西南に向ふて強行軍を開始せられることとなつた。但し宿營の場合には、日本人一同日出雄の側に集り一團となる事は忘れなかつた。

六月十一日（陰曆五月十日）の朝、熱河区内の喇嘛廟へ到着する迄は、時に數戸の民家を中心として休息する外殆ど晝夜兼行の強行軍で、索倫より携帶せし食

料は已に盡き、巻煙草一本の喫み廻しも元が切れて了ふ。盧其他阿片の嗜好者は顔色憔悴して勇氣頓に衰へ、馬の斃る者或は落伍する者漸次増加の窮境に陥つた。漸くにして喇嘛廟において炒米の供給を得、附近民家より羊を購めて全員腹を充たす事が出来たのである。蒙古内地の喇嘛廟は概して小高き丘上又は山腹に建立せられ、本堂を最上中心として數多の僧坊が、それぞれ西藏本山を模して羅列し、之を遠望すれば宛ら一大城廓の觀がある。地方に依りて美觀壯觀に程度はあるが、一般民家の茅屋若しくは羊皮天幕住居に對照して、調和の取れない事夥しい。尤も之れは蒙古民族信仰の結晶として現はれてゐるのだから批判の限りではあるまい。又炒米は日本の粟を煎つた様なもので、其儘食べても香ばしい味がある。お茶若しくは牛乳を「ブツ」かければ猶更喰べ易い蒙古唯一の穀物である。此日より更に方向は一轉されて東南指して進む事となつた。局面は展開して、或は小砂漠、或は砂山の僅かに草木の生ひ茂れる所を横斷せねばならなかつた。六月十三日（陰曆五月十二日）又もや喇嘛廟に宿泊する事を得たが、方向は依然東南に向ひ奉天省の勢力範圍に近づく様子なので、眞澄別が盧に糺すと、

「民家の多い所へ行かねば、兵糧と馬糧が不足して、何うする事も出来ませぬ」と力なげに答ふる許りであつた。漸くにして十四日の夕暮に近き頃、達頼汗王府の一族と稱する管内に入ると、輪奐の美を極めた朱欄碧瓦の形容詞が相當しさうな喇嘛廟と王府が、約十丁許り離れて對立し、外に支那風建築の民家が十數戸建ち竝んで居る。盧司令は王府へ使を遣はし面會を申込むと、王は不在なりとて數人の留守居が誠に無愛想な挨拶なのに、盧も不審の思ひをし乍ら、西南方の谷間に民家を探し當て、一同の宿泊所と定めた。此處の喇嘛廟は全部戸を鎖し、猫の子一匹みない靜寂さであつたのは、頗る一同の眉をひそめしめた。

此夜薄暗き宿營の一遇に、日出雄は何事かヒソヒソと眞澄別に向ひ囁いてゐたが、唯最後に眞澄別の聲として、

「洮南の御神勅に、今度の擧に必要な金は十萬圓だと承つて居ましたから、其れ以上の金額は早く言へば死金だと私は信じてゐます。そして最後に上木局子で大石氏に迫られて、先生が矢野さんへ送金する様依頼状をお書きに成つたなどは、全く一種の脅迫でしたね」

と聞きこえたのみで、あとは犬いぬのけたたましき鳴なき聲こゑに夜よは森閑しんかんと更ふけ行ゆくのであつた。

(大正一四・八 筆録)

### 第三二章

#### 彈丸雨飛

谷間たにまを通とほり抜ぬけて廣くわつだい大な草野くさのに面めんした山裾やますそに、一臺いちだいの轎車けうしやを取とり巻まいて守高もりたか、萩原はぎはら、坂本さかもと、白凌閣パイリンク其他そのた日出雄ひでをに近侍きんじせる支那將校しなしやうかう以下い一團いちだんの部隊ぶたいが、不安ふあんの色いろを現あらはし乍ながら後續部隊こうぞくぶたいを待合まちあはせて居ゐる。そして銃聲じゆうせいが盛さかんに笏こたまに響ひびき亘わたるにも係かかはらず、轎車けうしやの中なかには雷らいの如ごとき鼾聲かんせいが聞きこえて居ゐる。折柄をりから猪野軍醫長いのぐんいちやうは顔色がんしよくを變かへて飛とび來きたり、倉皇さうくわうとして下馬げばし、轎車けうしやを覗のぞき込み、  
『先生大變せんせいだいへんです』  
と叫さけぶ。

「ア、ホンに銃砲の音が聞えるなア」

とやをら身を起したのは日出雄である。

猪野「先生どうやら開魯の兵隊が盧の軍を迎撃する爲に來て居たらしいです。左

側の山から射撃し始めました。眞澄別さんに早く逃げなけりや危いですよと注意

したのですけれど、眞澄別さんは先に行つても後方に居つても弾丸は飛んでるん

だ……なんて悟つたらしい事を云つて見物して居られますが、あれや駄目ですよ

日出雄「ア、さうか、モウ直に追ひ付くだらう」

と之れ亦悟つたらしく寝ころんで了つた。此時眞澄別は井上兼吉を従へ、悠々と

弾丸雨飛の間を進みつつ、

眞澄別「井上さん、吾々を狙撃する連中は一體何だい」

井上「此處の王府の兵でせう。弾丸が上の方を通る所から察すると、早く此管内

を立退いて呉れ、迷惑が掛ると困るからと云ふ合圖かも知れませぬなア。ア

ハ、ハ、ハ、

眞澄別「併し昨日喇嘛廟も王府もがら空だつたのが曲者だよ。盧を馬賊としての

討伐令でも廻つて來てるのぢやなからうか」

井上「まさか……と思ひますが……おゝあれ御覽なさい。猪野の奴、衛生材料を放つたらかして逃げ出しましたよアハ、ハ、ハ」

斯かる折りしも、眞澄別と井上との中間へピチーンと銃弾が落下した。井上は平氣な顔で、

井上「オヤこん畜生狙ひ撃ちを始めよつたぞ」

と言ひ乍ら、眞澄別と轡を竝べて見物氣分で日出雄の轎車を目當に辿り行く。

盧占魁は前後に馬を飛ばし乍ら聲を勵まして、

「應戦するな、應戦するな」

と叫び廻つて居る。全隊が青野ヶ原を進む頃には、最早銃聲も聞えずなつてゐたが、それでも二名の負傷者は出來たのである。銃聲を他所に眠れる日出雄と、彈丸雨飛を平氣で眺めてゐた眞澄別との大膽さは、盧以下各將卒の賞讃の的となつた。是より周圍の警戒を益々嚴重にして進むこととなつたが、十五日又々山間の通路に於て王府の兵が要撃を開始せむとするや、盧占魁は單身馬に鞭打ち兩手に

モーゼル銃を提げて走せ向ひ、劉陞山の部隊また機關銃の火蓋を切つたので、王府の兵は銘旗と若干の馬具を遺し地の理に通ぜるだけあつて、逸早く何れへか姿を隠して了つた。相變らず強行軍は南方もしくは東南方に向つて續けられた。馬が斃れて自然に落伍する者もあれば、中には又野馬を捉へて乗り移る者もあり、劉の部隊には十數頭の駱駝を徵發して乗り廻して居る者さへあつた。

六月十六日（陰曆五月十五日）青草のまばらに生え茂つた高原に三々五々建ち竝んである民家の附近に腰を下ろして朝食を喫した。前日來人馬共に食料缺乏の爲休む間とて與へられず、民家を求めて此處まで急いだのである。民家より炒米と鶏を徵發補充し、一同元氣漸く回復した。炊事道具は何時も洗面器と鐵鍋を利用するのだが、調味料は鹽のみで、それも有つたり無かつたりと云ふ状態であつた。此處の附近には畑らしい場所があり、其處にたまたま葱や菜つ葉が見付かつた時には、皆々先を争ひ、ちぎつては土を手で擦り取り貪り喰ふた。食事後日出を轎車の中に眠り、其他の隨員は之を取巻いて大地の上にゴロリと晝寢の夢を貪つてゐると、遙か後方に當り一時盛んに銃聲が聞えた。盧占魁は直ちに二三の

從卒と共に驅出し、一時間許り経つた後、菱々と歸り来て涙ながらに語る。

「あの王府の兵が數十名執念深くも、沿道の民家に潛み居り、最後方部隊の曼陀汗を狙撃したので、曼陀汗は部下を前進せしめおき、単身で之に向つて近寄る途端に馬が銃弾に斃れる、第二の弾丸で曼陀汗は太腿を撃ち抜かれ、バツタリ倒れたさうです。それでも部下に向ひ……お前等は進め進め心配するな大丈夫だ……と云つて居る間に、人家より六七名の王府の兵が曼陀汗の側近く走せ寄り、銃先を揃へて撃ち込み、曼陀汗はあへなき最期を遂げました。曼陀汗の副將は振返つてみて驚き、矢庭に二三人を撃殺した相ですが、これも胸部を射貫かれて倒れる。其間に王府兵は姿を隠して了つたさうです。張彦三は私の左の腕、曼陀汗は私の右の腕です。今日の私は右の腕を取られました、お察し願ひます」

と涙滂沱として腮邊を傳ふ。聴き居る者皆貰ひ泣きをし、

「惜しき英雄を殺したものだ」

「それだから最初にあの王府をやつつけて了へば良かったのに」

など口々に呟き乍ら切齒扼腕する。斯る折しも胸に貫通銃創を受けた曼陀汗の副

將は運ばれて来た。猪野軍醫は繃帶手當をし、眞澄別は鎮魂を施して痛みを止め、食料を積んだ空車の轎車に乗らしめ、全體の行進が開始された。此時盧は日出雄に向ひ、

「大先生、茲二三日の中に戦争はありませぬか、神様に伺つて下さい」

と云ふ。日出雄は眞澄別に命じて神勅を請はしめた。神勅は、

「二三日中に戦争は無い、但し當方から手出しすれば此限りに非ず」

との意であつた。そして眞澄別は盧に向ひ、

「最初と大分方面が違つた様ですが、何處へ落付く積りですか」

と問ふ。

盧占魁「どうも張作霖の方に何か誤解がある様ですから、先生方は青溝と云ふ安

全地帯へ御滞在を願ひ、其間に私は奉天へ行つて萬事都合よく解決してまゐりま

す」

と答へ、日出雄の轎車にヒラリと飛乗り、長い鞭を動かし始めた。

露營に體軀を休めて行を續けた十七日、又復銃聲が盛んに聞えたが、之れは次

の王府の兵が其國境まで見送り來り、雙方禮砲交換の響であつた。

翌十八日（陰曆五月十七日）進軍中、周圍二三里位と思しき大沼地に出會した。

水は全面に漲らず、所々に大池小池が形作られてゐる。其間に介在せる沼草の生え茂つた部分を選んで横斷する事となつたが、微細な灰の如き砂の稍濕氣を帶びた所とて、馬の歩行困難一方でない。折しも日出雄の搭乘せる轎車は相變らず、盧占魁が自ら馭者となつて、近路を選んで約央過ぎまで巧みに進んで來たが、如何はしけむ、其轎車はツブツブと半ば土中に滅入り込んで了つた。鞭打てど馬の動かばこそ、

「サア事だ」

と應援馬を派遣しても足場悪く、車體を引上げることが出来ない。遂に車體の全部解體して漸く安全地帯に運び、再び組立てらる迄には可なり時間を費やしたのである。日出雄、盧占魁等は應援に向ひし白銀龍其他の馬に跨り、漸くにして對岸の丘上に待ち合せてゐた張彦三の部隊に到達する事を得た。守高は泥塗れの靴を掃除し乍ら、

「これは今度の神業の暗示だ。一變解體して、新規時直しに組立てよといふ事に違ひない」

と呟く。

眞澄別「まあ、そこらの見當だ」

日出雄「時に盧さん、只今神勅があつて、あなたが奉天へ行くべく白音太拉に向はれるのは、薪を抱いて火に飛込む様なものだとの事でしたよ」

盧は深く意に留めざる面色で、

盧「ナニ、大丈夫です。御安心下さいませ」

張彦三「察哈爾迄参りますと、私の部下が二萬許り準備して待つて居りますから、早く其處まで行きたいのです。けれど途中一度や二度戦争の必要があるかも知れませぬので、盧司令は今少し武器を手に入れたいと云つてますから、奉天へ行きたいと申してゐるのです」

眞澄別「神勅をたよらぬ様になれば、モウ駄目だ駄目だ」

と小聲に囁いた。

此夜露營所の一室には日本人側全部集合し、雑談交りに評議が凝らされた。

坂本「どなたか紙をお持ちぢやありませんか。支那人や蒙古人は、其處等に轉が

つてゐる小石や木の枯枝なんかで、便用を達しますから構ひませぬが、私等はま

だ、そこ迄勉強が出来てゐませぬからなア」

眞澄別「そんな事もあらうと思つて、持てる丈ポケットへ捻ぢ込んでおいたが四

五日前だつた。あの……ソレ澤山の牛乳にありついた時、喉の渴いてるに任せて

ガブガブやつた所が間もなく、大先生と萩原さんと揃ひも揃うて、牛乳其儘のパ

サパーナを「シヤア」とやつた時、大分減らして了つたが、まだ二三日間は大丈夫

だ。アハ、ハ、ハ、」

と笑ひ乍ら二三枚の塵紙を渡す。

猪野「先生そんな呑氣な話所ですかい。私の從卒にしてゐる蒙古人に村民の噂を

調べさして見ましたが大變ですよ。白音太拉では盧を討伐すると云つて、數千の

軍隊が出動準備をしてゐるさうですよ、隙を伺つて遁げようぢやありませんか。

こんな所で生命を捨てるのは馬鹿々々しいですからなア」

日出雄「遁げるつて何處へ行くのだ」

猪野「私は此處から白音太拉方面の地理は能く存じてゐます。白音太拉は出動準備で危いかも知れませぬから、錢家店までは責任を以て御案内致します」

井上「さうだ。猪野君が其處まで責任を持つて呉れば、哈爾濱から東支鐵道を

利用して興安嶺に乗り込む順路は僕が責任を持つて」

猪野「先生、さうして頂いて興安嶺へ行つて修業さして頂くのでしたら、私も永久にお伴致します。實際の事、私は國には兩親も妻もありませんから、生命が惜しいです」

眞澄別「それは非常に結構な計畫だが、うつかりすると味方に敵が出来来るよ」

日出雄「さうだ、兔に角盧占魁に相談して同意を得その上にするがよからう」

猪野は直ちに盧占魁を迎へ來り、白音太拉軍の出動準備の事や、自分の提案を

逐一話した。盧は、「猪野奴、餘計なことを云ふ」といふ顔付にて、

盧「吾々を討伐なんて、そんな事があるものですか。そして哈爾濱行なんて、却

つて危険です。それよりも私がお供を致しますから營口の悦來棧で御待ち願ひ、  
私は張作霖と話を纏めて直ぐ伺ひます。そして上海に私の親友が居りますから、  
其處で私が陣容を立直し、根據地を定めてお迎へに参ります迄、御滞在を願ひま  
す。何れ上海へも先生の爲に大喇嘛廟を建てて差上げますから、決して御心配な  
さいませぬ」

とて臨時司令部と定められた喇嘛廟の一坊に歸り行く。

六月十九日（陰曆五月十八日）喇嘛廟に暇を告げて白音太拉に向つた日の午後  
は、茫茫として見渡す限り山の影も見えない大草原を進むのであつた。進むに  
つれて白音太拉方面より吹來る風は益々強くなり、帽子を飛ばす者、紐を切つて  
笠の空中に舞ひ上る者、姿勢正しく馬上に居る事の危険を感じずる程である。  
草より出でたる太陽のまた草に入る頃、風は愈々其力を添へて來た。眞澄別は

猪野を顧みて、

「意味深長な風が吹くね」

と云へば猪野は、

「私もさう感じます。白音太拉へ行くなと云ふ神様の御警告でせう」

と答へ乍ら共に日出雄の轎車を追ふて疾駆する。行け共行け共草野は盡きず、宵

闇の頃、草原中に竝ぶ五六戸の民團に着いて、眞澄別は日出雄に向ひ聲をかけた。

眞澄別「先生、萩原さんは馬が痛んだので、大分遅れてる様ですから、暫く待つ

てやらうぢやありませんか」

日出雄「さうか、そりや待つてやらねば可かぬ」

温長興「併し盧司令は今日は馬でモウ大分先へ行きました。早く進まねば道が分

らなくなりますよ」

坂本「こら温、餘計な事を言ふな、先生が待てと仰有つたら黙つて待たぬか」

十八日の月は雲に蔽はれて薄き光を草野に洩らすのみである。萩原の到着と共

に日出雄の轎車は動き始めた。

「他の部隊の進んだのは、確か此見當」

と數十分間進んだと思ふ頃、民家の脇へ出て来た。

「何だ、狐に魅まれたのぢやないか、又後歸りだ」

と坂本が叫んだのも道理、此一隊は草野の一部を廻つて又元の民家に立歸つたのである。護衛の兵士は呆氣に取られて、他の部隊と連絡を計る爲、空に向つて發砲すれば前方より合圖の銃聲が聞える。銃聲を便りに進行し始めると何時しか又元の民家の傍へ歸つて来る。草野の小路は幾筋もあるのにも係らず前進することが出来ぬ。そして風は既に其勢を減じてゐる。

眞澄「先生、白狐が之れだけ氣を付けるのですから、モウ危険地帯へ進むのは止めやうぢやありませんか」

日出雄「中止めたつて仕方がないぢやないか」

眞澄別「ハハア、大神さまの御都合は又別ですなア、それぢや兔に角此處で一時停電しませう」

露を浴び乍ら日出雄の轎車を中心に思ひ思ひの夢路を辿つた。此一隊は草野のホノボノと明け渡る頃、盧占魁よりの傳令に喚び起されたのである。

(大正一四・八 筆録)

### 第三章 武装解除

盧の傳令騎に夢を驚かされた日出雄一行が盧の宿營民家に到着するや、盧は不機嫌な面色で坂本や白凌閣に散々に當り散らし乍ら、直ちに日出雄の轎車に同乗し、漸く笑顔を作つて進發の合圖をした。猪野は前夜の中に蒙古人の從卒を引きつれ、勝手知つたる白音太拉に向つて脱走したのであつた。此地方は最早白音太拉へ七八十支里の距離なれば、支那よりの移住者も多く、耕地開け、廣大なる高粱畑の耕作最中である。其中を通り過ぎて山地に掛る頃、左手の谷間に當り、七十騎の支那兵が竝行して進むのが目に付いた。之を見るや盧占魁は轎車より飛び下り、馬に跨つて先頭部隊を追つかけた。日出雄の轎車が丘陵の頂上近く進んだ頃は、盧が劉陞山其他重なる部將と密議を凝らしてゐる最中であつた。

やがて全部隊は右方に向つて丘を驅け下り、村落の民家にそれぞれ宿營することなり、盧の司令部は日出雄の假寓所構内の別館と定められた。稍暫くして盧は井上兼吉を通譯として伴ひ、日出雄及眞澄別に人拂ひの上面會を請ふた。

盧「私は何うしても張彦三に跡を任せて、一度奉天へ行つて談判せねば蟲が治まりませぬ。尤も白音太拉まで行つて、佐々木を呼び寄せ、奉天の模様を一應聞いた上でも構ひませぬが、一つ神勅を伺つて下さいませ」

日出雄「眞澄別さま、神勅は先般の通りだから、さう言ふてな」

眞澄別「ハイ、承知いたしました。……盧さま、神に二言なしで、薪を抱いて火

に飛び込むが如し……と言ふのが貴下の白音太拉行の運命ですよ」

盧「そんな筈はありません。最前吾々と竝行して進んだ騎兵は通遼旅團の部下で

す。若しそんな傾向があるのなら、あの時に大先生の轎車に向つて發砲する筈で

す」

眞澄別「盧さん、貴下のお考へは間違つてる様に思ひます」

と眞澄別が何事か語らむとする時、盧の副官は嚴封せる手紙を齎らしたので、盧

は直ちに開封して讀み下した。此手紙は、盧が急使を以て此時白音太拉方面に出

發して居た關中將の參謀長へ何事か照會した返書で、それには武装解除の上でな

くては白音太拉方面へ來て下さるなどの意味が認めてあつた。盧は之を見るより、

「萬一の事が有りましたら、白音太拉到暴風雨が大洪水が起る様に御祈願を願ひます」

と云ひ棄て慌ただしく駆け出した。日出雄は止むを得ず、眞澄別と共に庭前に跌座し、神に祈願を凝らした。此時に神示は日出雄、眞澄別共に同一様に感じ、當日午後六時以後より異變打ち續くべし、されど洪水などは妄りに起すべきものに非ず、皆それぞれの人心、時機に應ず…との旨であつた。日出雄等が白音太拉の獄舎を立出でて後、白音太拉は二回迄大洪水に見舞はれ慘憺たる光景を呈して了つた。若し此洪水が早かりせば、日出雄等も其渦中に投ぜられたに違ひない。吁實に神の攝理は毛筋の横幅程も隙がない。

斯かる折柄五六丁西方に陣取つて居た張彦三の許から、從卒が激しい腹痛を起してゐるからとて眞澄別を迎へに來た。眞澄別は早速赴いて鎮魂を施し、病人は直ちに平癒し馬を曳いて野外に出た。其時張彦三の副官王増祥は眞澄別を一室に招き、食膳をすすめながら、

王増祥「いろいろ有難うございました。あなたも司令と同道に奉天へお越しになる

のですか」

眞澄別「イ、エ、併し道筋は何うなるか分らないが、結局大庫倫へ行く積りです」  
王増祥「それならば何處迄もお使ひ下さいませ。實は綏遠に私の部下が血氣盛りの青年のみで一千人程居りますから、大丈夫お役に立ってます。どうぞ、これで暫くお別れ致しまして、連絡を断たない様御願ひ致します」

眞澄別は名刺に何事か記して之を渡した。王増祥は名残り惜しげに眞澄別の影の見えなくなる迄見送つて居た。

一方日出雄の假本營には、既に支那官兵の幾部が入込み來り、雙方に打解けて談笑してゐる。煙草に焦がれてゐた連中は、支那官兵から煙草の寄贈を受けて、彼方にも此方にも小さな煙突が立竝んだ。日出雄は眞澄別を呼び迎へ、日出雄「先程盧が來て、俺と井上とを同伴して今夜の中に、今來てる官兵の案内で白音太拉へ行くことに話が纏つた。貴方は明日轎車に乗つて皆と同道に行くのださうな。矢張り官兵が護衛して行くと云ふこつちや」

と萬一の用意にと残してあつた金子を日出雄はそれぞれ分與携帶せしめた。此夜

日出雄が盧に伴はれて白金龍に跨り出立した跡の光景は、實に慘憺たるものであった。噂は噂を生み、不安の空氣は各宿營に漲り、劉陞山の部隊は何時の間にか影を没し、或は泣聲を出して愚癡をこぼす者、脱營を企つる者を引止むる聲、或は變装して宿營を脱する者など、斯かる状態は夜の明くる迄繼續した。併し日出雄に直屬して居た白凌閣は日本迄も從つて行くと言ひ、温長興は心臓を損ねてゐるから奉天迄歸りたいと言ひ、共に眞澄別一行に隨行する事となつた。王瓚璋、康國寶は心細がつて別れを惜しむ。眞澄別は他の人々と協議の上、それぞれ手當を與へ夜の明くるを待つて眞澄別、萩原、坂本は轎車に乗り、守高は眞澄別の乗馬白銀龍に跨り、白音太拉に向ふ事とした。守高は馬を萩原に譲つて轎車に乗り込み、今正に華胥の國に遊樂中の眞澄別を揺り起し、

「あれ見給へ、大變な兵隊だよ」

眞澄別「さうか、モウ白音太拉に着いたのか」

守高「何を言ふのだ、元の場所へ追ひ返されたのだ、馬副官の奴馬鹿だから、先頭に立つて向方の軍隊の正中へ割込んだからだよ」

眞澄別「君は何うして馬をやめたのだ」

守高「兵隊の奴、此長靴に目をつけたのか、足を引張つて仕様がなから下馬り

たのだ、砲兵まで引出してるが……どうしても一個師團は十分居る」

坂本「猪野の奴、巧い事をしましたなア、温長興は反対の方向へ全速力で、先刻

逃げ出したが、何うでせうなア」

守高「包圍される前だつたから、大丈夫だ。吾々だつて先生さへ居られなけりや

なア……」

萩原「どうです眞澄別さん、斯うなりや領事館渡しでせう」

眞澄別「結局さうなるだらう」

一同、支那官兵に促されて下車した。すると數多の官兵が集ひ來り、目星しい

物を片つ端から沒收するやら、眞澄別と守高を指して、

「これは韓國人だ」

と評するやら、思ひ思ひの行動に混雜の最中、日出雄を白音太拉へ送つた盧占魁

は官兵に送られて歸り來り、茲に關中將との間に武装解除に關する協約が議せら

れた。其間に基督教信者と稱する軍曹は、一旦沒收した銀貨包を眞澄別に返し領收書を請求する、一方には萩原が腕時計を奪られたとて、  
「何だ、支那兵は皆泥棒だ、見せると言ふから、腕時計を見せてやつたら、外して持逃げしやつた」  
と小言たらたらである。

長時間の協議の結果、盧軍全部の武器は官兵持參の大車數臺に積みこまれ、眞澄別、守高、坂本は轎車に乗り、萩原は白銀龍に跨り、馬を失ひたる者は牛馬に便乗し、鬪旅團に前後を護られつつ白音太拉に進み行くこととなつた。途中騎兵聯隊に於て、茶湯の響應を受け、白音太拉の市街人垣の中を辿り行くと、日出雄と井上との無事な顔が馬車の中に見えたのに一同心を安んじ乍ら、兵營内に導かれて行く。兵營には藝者が繰込む、御馳走が運ばれるといふ混雑で、盧占魁以下の歡迎宴準備の最中を、支那旅團の少佐に案内せられて、日出雄の宿所なる鴻賓旅館に向つたのである。

(大正一四・八 筆録)

### 第三四章 龍口の難

是より先き日出雄は井上兼吉を從者とし、盧占魁、外十數名を伴ひ、二十名の支那官兵に前後を守られ乍ら、五十支里を隔つる白音太拉に向つたが、彼は七月二十日の大本裁判に出頭する爲に、白音太拉に於て武器の授受終了の上、一先づ日本へ歸國し再び出國する覺悟で、勇み進んで白音太拉に向つたのである。

三十支里許り來た所に通遼縣の兵營分隊駐屯所があつた（通遼は白音太拉の支那名である）。支那の將校と共に此兵營に暫し休息し、盧は兵營長と少時談合の上再び東に向つて進んだ。殆ど夜の明けむとする頃、前方より數百の騎兵隊が進み來り、盧占魁と再び何事か交渉の上、もとの軍營に引歸し行く。此時盧は井上に向つて、

大先生を宜しく頼む

と幾度も繰返し繰返し言殘して行く。日出雄は井上と共に馬を下り傍の青草を喰ませてゐたが、一時間許りすると通遼旅團の參謀長が十數名の騎兵を引連れ來り、

日出雄に向つて日本語にて、

「貴方は日本人、一時も早くお逃げなさい。お逃げなさい。」

と手を振つて南の方を指して教ふる。日出雄は、

「眞澄別其他の日本人を後に残して遁走するは日本男子の恥辱だ、兔も角どうな

るも神様の御經綸だ、寧ろ自分の方より兵營に飛込んで武器受取の談判をやらう、

その間に盧が出て来るだらうし又後に残つた日本人の消息も分るだらう。」

と又もや駒に鞭ち、白音太拉に向け驅け出した。後より孟祕書長は一人の従者と

追かけ來り、一行四騎は轡を竝べて堂々と通遼縣の西門に進んだ。

城門の前迄進んで行くと、太陽は草の中から赤い顔をして昇りかけた。門の兩

方には嚴めしく武装した兵士が數名立番をして居て、一人につき五十錢宛の通行

税を徴収した。日出雄と井上は旅團の所在地を尋ねると、衛兵四名が前後となつ

て兵營へ案内した。

日出雄は營内に入り、高等武官らしきものに井上の通譯を介して挨拶をなし、

且つ、

□ 盧占魁の来るまで當營に休息したし□

と申込んだ。將校はいと慇懃に美しい座敷を與へ、茶菓子を出して響應し、柔かい毛布を敷いて、

□ 先づお休みなさい□

と勧めた。日出雄も井上も夜中強行軍の爲身體が疲れてゐるので、其好意を感謝し乍ら、前後も知らず寢に就いた。殆ど三四時間も眠つたと思ふ頃、參謀官は四名の兵士と共に銃口を向け乍ら、井上兼吉を揺り動かし懷中の十連發のモーゼルや六連發のピストルを捲き上げ、且つ所持品を調べた上、後手に麻繩を以て縛り上げ、次に日出雄を揺り起した。日出雄は安らかな夢を結んでゐた所を起されて、目を擦り乍ら四邊を見れば、井上が已に縛されてゐた。參謀官は金盃に湯を汲みタオルを浸し、

□ 先づ之にて顔を洗ひなさい□

と日本語にて親切に云ふ。日出雄は、

□ ハイ有難う□

と其湯に浸したる手拭にて顔を拭ふた。兵士は代る代る湯に浸しては絞り日出雄に渡し、首筋や手を洗つてくれた。さうして日出雄の所持品を調べ、  
「天國」の銘刀や如意の寶玉並びに白金の時計、所持金八百七十圓を目の前で調べて、

「盧占魁が来る迄お預りします」

と云つて持つて行つた。次の室を見ると、孟祕書長及び一人の支那兵が井上同様に縛られてゐる。日出雄は意外の出來事に訝かり乍ら參謀に向つて、

「何故井上を縛りましたか」

と尋ねた所、

「井上は武器を携帶してゐたから馬賊と認めて縛つたのだ。彼等二名の支那人も馬賊だから縛しめたのだ。そして盧占魁が来る迄貴方もホンの形式乍ら縛ります」

と云ふので、日出雄は、

「御自由になさい」

と手を後へ廻した。參謀は形式的に極ゆるやかに手を縛り、日人二名支那人二名と共に兵營に坐らせて置き、いろいろと日出雄に向つて日本語にて話を交換した。

さうして、

「貴方は武器を携帯せず且つ宗教家であるから、貴方は直ぐに放免されませう」と云つて慰めた。ここで日出雄は愛馬に涙と共に別れた。愛馬も亦日出雄の心中を解するものの如く落涙したと云ふ事である。

其日の午後四時頃、盧占魁は二十数名の幹部連と共に支那軍隊に送られて、日出雄の繋がれて居る旅團司令部に到着した。そして盧占魁と參謀長と交渉の結果、日出雄外三人の縛を解き茶菓等を運び、又もや親切に響應し始めた。參謀長は、  
「今晚は是非貴方方の歓迎の宴を催し度いから、兵營に泊つて下さい」と勧める。そこへ盧占魁、何全孝がやつて来て、日出雄を旅團長室へ誘つて行き筆談を以て、

「愈々武装解除の止むなきに立到りました。乍然、この旅長も自分の義兄弟でもあり、又自分の部下もここに澤山ありますから大丈夫です。安心して下さい。萬一非常な事が起つても私等は生命に別條はない、さうして日本人は猶更安心して宜しい。私は王祥義と變名し盧占魁と云ふ名は今日限り葬つて了ひます。もし

私わたしが殺ころされるやうな事ことがあつたら、此際このさい貴方あなたの生命せいめいもないでせう。兔とも角かく明日みやう日は私わたしと奉天ほうてんに参まゐりませう〇

と云いつた。日出雄ひでをは

「フンフンフンフン〇」

と首くびを豎たてに二ふたつ三みつつ振り乍ながら、再ふたび参謀長さんぼうちやうの室しつに這入はいつて、

「今晚こんばんはあまり疲つかれたから何處どこか好よい日本にっぽんのホテルに案内あんないして欲ほしい、そして久ひさ

振しぶりに日本料理にっぽんれうりを食たべたいから〇

と云いつた。さうすると参謀さんぼうは答こたへて言いふには、

「一昨年頃迄いつさくねんごろまでは日本人にっぽんじんの旅館りよくわんがありました、今はもうありませぬ。鴻寶館こうひんくわんと云い

ふ支那しなの一等旅館いっとうりよくわんがありますから、それに案内あんないさせませう〇

と日本語にっぽんごの解わかる若わかい兵士へいしを案内役あんないやくとして馬車ばしやを命めいじ、日出雄ひでを、井上いのうへを鴻寶館こうひんくわんに送おく

り届とどけた。白音太拉パイインタラの街まちは人山ひとやまを築きついて、日出雄ひでをの通行つうかうを物珍ものめづらしげに眺ながめてゐ

る。そこへ數千すうせんの兵士へいしが盧占魁るせんくわいの殘部隊ざんぶたいを引連ひきつれて、ラツパの聲こゑも勇いさましく歸かへつ

て來きた。眞澄別ますみわけ、守高もりたか、坂本さかもとの三人さんにんは日出雄ひでをの荷物にもつを積つんだ轎車けうしやに乘のり、萩原はぎはらは

騎馬にて歸つて來るのに途中で出會した。日出雄は車上より聲をかけ、

「今晚は鴻賓旅館に泊るから白凌閣と共にホテルに來てくれ」

と呼ばはりつつ、日の暮るる頃旅館につき一室に入つて休息してゐた。

一時間許り経つと眞澄別一行四人と蒙古人一名、支那人一名と共に旅館に着い

た。此蒙古人は張貴林の片腕の副團長であつた。彼は銃彈を胸に受けて居たが、

平氣な顔で坐つてゐた。支那の將校で少佐の肩章をつけた軍人が、非常な愛嬌を

振りまいて日出雄一行を歓迎した。膏の多い支那の料理に何れも舌鼓を打つた。

然るに日出雄は其日に限りて氣分が進まず、食事は箸もつけなかつた。今や寢に

就かむとする時、盧占魁は二人の副官と共に日出雄を訪ねて來て筆談を始め、

「今晚は何だか怪しいやうだ、乍然自分は先刻申上げた通り大丈夫だと思ふ。之

から熱、察、綏の特別區域に部下と共に身を以て逃れ再擧を圖る考へです。之は

日本への旅費の足しに……」

と云つて一百圓を差出したが、日出雄は固く辭して受取らなかつた。そして盧占

魁は日出雄と握手を交換し涙を拂つて別れて行く。其夜旅團の兵營では數十人の

妓チヤンを呼んで芝居をしたり、いろいろの面白い事をして盧以下を歡待し、阿片をふるまひ、澤山の馳走を饗應したのであつた。大勢の將卒は「一先づ安心」と酒を飲み、馳走を喰ひ、妓チヤンの芝居を見て、十二分の歡を盡し寢についた。其眞夜中頃下着一枚になつて寢てゐる所を、一人々々營門外へ引出し、機關銃を以て、小口から射殺を始めたのである。

支那の少佐は、

「今晚はお湯に御案内が致したいのですが、あまり遅くて汚れてゐますから、明朝新しい綺麗な湯に案内しませう。散髪は如何ですか、大分に髪が延びてゐますが、理髪師を呼びませうか」

と親切に云ふ。そこで萩原、井上の二人は理髪師を呼んで貰ひ散髪した。日出雄其他は、

「明日にする」

と云つて眠つて了つた。表門には官兵數名、巡警數名が固く警護してゐた。此少佐は蜜蜂の如うな男で口に甘き汁を含み、尻に鋭き劍を隠してゐた。夜半一時頃

になると、ドヤドヤと室内に澤山な足音がしたと思ふと矢庭に兵士が室内に闖入し、先づ第一に萩原を揺り動かして、五六の兵士がピストルを向けて、

「神妙に繩にかかれ」

と云ふ。次に守高、井上、坂本、眞澄別、日出雄と云ふ順に、ガタガタ慄へながら漸く日本人六名、支蒙人二名を捕縛して了つた。よくよく見れば此宿に一行が泊つた時、親切さうにお世辭を振り廻してゐた少佐が指揮をやつて居た。日出雄は少佐に向つて、

「何故こんな事をするか」

と詰問すれば、

「俺は何も知らぬ知らぬ」

と首を左右に振るばかりだ。そして十數名の銃を擬した兵が身構へをして居る。

そして最後に此旅館の庭前に引出され一列に立たされた。日出雄と眞澄別、井上と萩原、守高と坂本と云ふ組合せに、二人づつ綱にかけ、一行の携帶品は残らず、少佐始め部下の兵士が先を争ふて分捕し、只ラマ服のみを轎車に乗せ、何處かへ

持つて行つた。此騒ぎの中に、支那語に通じた井上は支那兵の囁きや罵り聲を聞き、日出雄に向ひ、

「先生、只今支那兵が吾々一同を銃殺すると云つて居りますぞ、もう仕方ありません。ませぬな」

と泰然自若として叫んだ。此聲に應じて日出雄は、

「ウン、さうだらう。支那の奴は御馳走政策で卑怯にも騙討をせうとするのだらう、それでは私は愈々キリストとなつて昇天すべき時期が來たのだらう。君達も盧の部下も皆天國に連れて行くから、君達は靈が離れないやうにするが良い」  
と二三回繰返し、且つ死後の世界の壯嚴なる事を説いた。井上、坂本は之に答へて、

「どうか、宜しくお願い致します。假令地獄の底へでもお伴を致します」と答へた。他の四名は平然として沈黙してゐた。此時日出雄は、

「惟神靈幸倍坐世」

と三唱し、眞澄別は天の數歌を大きな聲で唱へ出した。支那兵はビツクリして、

☞ 八釜しく云ふな

と叱りつけたので、兩人は更に中聲になつて、「ワイワイ」と騒いでゐる澤山の兵の中を、宣傳歌を歌ひ乍ら、白音太拉の長い町を引廻され再び兵營の門内に送られた。其中支蒙人二名は日出雄一行と離され、銃殺場へ送られる。日出雄一行六人は再び營所の門を出で、北へ北へと引かれて行くと、道の兩端には盧の部下が大の字になつて血潮に染まつて倒れてゐるのが澤山にある。そして大車を持つて來て兵士が運んでゐる。日出雄は一々其大車の死骸を電燈の光に査べ乍ら進んで行くと、やがて一列に竝べられた。

眞澄別、日出雄、萩原、井上、坂本、守高と順に竝べられ、今や機關銃の彈丸が此等日本人の胸先に飛んで來ると思ふ矢先、射手は銃の反動を受けて後方に倒れた爲數分を要した。日出雄は日本人一同に向つて云ふ、

☞ 最早かくなる上は昇天の時が來たのだ、自分は之から天國へ上り、靈國天人となつて日本は云ふに及ばず、世界の守護をする考へだ。君達も俺について來い、そして男らしく討たれて死なうぢやないか。日本男子の名を汚すやうな、卑怯な

眞似はしともないからのう」

と諭すやうに云つた。坂本は涙聲を出して、

「どうか、よろしくお見捨てなきやう」

と云つた。眞澄別は日出雄の言葉を遮つて云ふ、

「先生、決して貴方は生命を取られる氣遣はありませぬよ。貴方は今天國へ行く

と云はれましたが、今度の世の立替は肉體がなくては出来ないのです。若し貴方

がここで生命を取られるやうな事があれば、神様が人間を騙したことになります。

私は屹度お助かりになると思ひますから……」

と確信あるものの如く主張する。

「それでも眞澄別さん、何程神の道に仕へてゐると云つても、日出雄の體は肉體

だ。鐵砲が中れば死ぬのが當然だ。あんたも死なないと思つて安心して居る途端

に一發食つたならば、あなたの靈魂は豫想に反して中有に迷ふだらう。それだか

ら死ぬものと覺悟して居ればよいぢやないか」

と諭す。眞澄別は頑として其説をまげず、

「イエイエどうあつても先生は死んで貰ふ事は出来ませぬ。もし貴方が生命がなくなる事があれば、神様は私を身代りに立てられるでせう。私は初めから貴方の身代りと云ふ名義で来て居りますから、そんな心配は要りませぬ」  
と云ふ。日出雄は、

「何も心配はして居ないよ。何事も惟神と諦めてゐるのだ。疊の上でも死ぬ時は死ぬのだ。日本男子が蒙古の野邊に骸を曝すのも愉快だ。然し死後の生活が肝腎だから……」

と一同の靈魂を救ふべく、そのみに心を集注してゐた。それから日出雄は、

「よしや身は蒙古のあら野に朽つるとも日本男子の品は落さじ」

と辭世を詠み、銃彈の吾胸に飛來するを待った。それから井上兼吉は、  
「早く討たぬか、俺の胸を討て、下手な打ちやうをすると彈丸が餘計いつて損がいくぞ、見事一發で俺を打殺せ」

等と怒鳴つてゐる。日出雄は又、

「いざさらば天津御國にかけ上り日の本のみか世界を守らむ  
日の本を遠く離れて我は今蒙古の空に神となりなむ」

等と辭世を七回迄詠み、大日本帝國萬歳、大本萬歳を三唱した。眞澄別は、  
「どうか止を得ざれば大先生と井上とを助けて下さい。井上は屹度先生を目的地  
へ連れて行く事が出来ませう。私が身代りになります」  
と祈願してゐた。さうかうするうち銃殺は止めになつて、又もや兵士が日出雄一  
行を引立てて通遼公署付屬の監獄へ連れて行つた。一々堅固なる足枷をはめ、手  
には手枷をはめ、二人づつ繋いで尚其上に麻繩にて六人を一つに縛り、窓を通し  
て外の材木に括りつけ、嚴重な死刑囚の取扱ひをした。

(大正一四・八 筆録)

### 第三十五章

黄泉歸 よみがへり

日出雄が六月二十一日の夜、白音太拉の鴻賓旅館で寢込を捕縛された時、折よく其處に宿つて居た日本人某が、朝になつてふと庭を見ると、皇道大本の神器として病者の祈願に用ゆる杓子が一本遺棄されてあつた。  
其杓子には、

天地の身魂を救ふ此杓子心のままに世人救はむ

と表に誌し其裏には、

この杓子我生れたる十二夜の月の姿にさも似たるかな

王仁 おに

と誌し、【ス】の拇印が押捺してあつたのを見つけ出し、驚いて日出雄一行の遭難を知り、白音太拉から一番汽車に乗り、鄭家屯の日本領事館に届けて出た。領事館では驚いて土屋書記生を急行せしむる事となつた。扨て日出雄は總ての所持品を兵營に預ると云ふ名の下に没収され、眞澄別外一同は所持金から帽子、靴、帶革其他所有携帶品を支那巡警から掠奪されて仕舞つたさうである。彼巡警等は今晚日本人全部銃殺の刑に處せらるると云ふ事を聞いて居たから、取つたら取得だと云ふ考で、眞裸體として了つたのである。一方土屋書記生は二十二日の夕頃に白音太拉に着き、通遼公署に到り、知事に面會し、日出雄一行の引渡しを交渉した。さうして翌早朝土屋氏は日出雄の繋がれて居る監獄へ見舞に來て、親切に慰め、もう領事館から出て來た上は、生命は大丈夫です安心なさいと云ふて歸つて往つた。

書記生が白音太拉に着いた二十二日の夜は、何となく騒がしく、四方八方から數百千とも知れぬ犬の聲が聞え、何事が勃發しさうな形勢であつた。後から聞いて見れば、書記生が日出雄に面會する前、蒙古人として銃殺する準備をして居た

と云ふ事である。併し乍ら最早日本領事館に判つた以上、國際上後難を怖れ、其夜は決行に至らなかつた。書記生が日出雄等に面會してより漸くにして繩を解き、各々足枷を入られ、日出雄と守高、井上と萩原、眞澄別と坂本と三組、二人づつ手枷で連がれ、便所へ行くにも彈丸をこめた兵が銃劍を擬して警戒し、巡警は彈込め銃を持つて、大小便ともついて來た。

其翌日、居留日本人會長太田勤及び滿鐵公所の志賀秀二の二氏が面會に來て、種々支那官憲と交渉した結果、漸くにして手枷のみを解かれる事となつた。四五日經つた時、日本より廣瀨義邦が水也商會の小野某と共に公署を訪ひ日出雄に面會し、かつ太田、志賀の兩氏に金を預けて日出雄等一行の凡ての差入れを依頼した。それ迄は日出雄一行は支那食の高梁飯に不味い味噌をそへて食ひ、不自由な獄舎生活を送つて居たのである。種々の差入ものが出來ると、支那の巡警部長は一々折箱などを開けて見れば、之は美味だらうとか、不味だらうとか云つては一口食ひ、二口食ひ、辨當の餘剩つたのは餓鬼の如く争ひて食て了ふ。又ビールやサイダー、葡萄酒などの空瓶が出來ると私に呉れ呉れと、日出雄一行に頼み込

んで持つて歸るのであつた。

さうして知事や監獄長、其他から、吾々にも相當の謝禮を貰ひ度い、貴方方が殺される所であつたのを、知事や監獄長の斡旋で生命が助かつたのだ、と公然賂を要求する。日本の警察官に比ぶれば其卑しい事、品格の下劣なること、口卑しい事など、到底内地人の想像せられぬ程である。巡警部長の王某は親切に日出雄の垢の付いた足を湯で洗ひ、肩を揉みなどして親切に介抱をし、

大人が日本に歸らるる時は私も連れて歸つて下さい、巡警を止めて大本の信者となり、お庭掃除でもさして頂き度い」

と頼み込むのであつた。日出雄は、

「奉天に着いた上、模様によつて電報を打つから、電報が届いたら奉天迄出て來い、日本へ同道する」

と云つてやつたら、王部長は非常に喜んだ。國際法に依つて領事館から引渡しを要求した時は、二十四時間内に引渡すべきものなるに、二十一日の夜から三十日迄十日間サインタラに繋いで置いたのは、餘程日本領事館と支那官憲との交渉が

六ヶ敷かつた爲であつたとの事である。

四日経つてから日本人一同は通遼縣知事の法廷に引出され、日本語の通譯官を介して取調べを受けた。此取調の要點は、日出雄の名刺に素尊汗と書いてあるが、汗と云へば蒙古第一の王の名稱である。又出生地が蒙古の國としてあるが、蒙古は支那の版圖であつて、蒙古國と云ふ國名は無い筈だ。汝は盧占魁を使噉して宗教を表に蒙古獨立を企てたのであらう、と云ふのである。日出雄は平然として、

「自分は支那の新宗教道院の宣傳使だ。蒙古の地に宗教を宣傳するの特權を持つてゐる。さうして蒙古の國と云つたのは別に深い意味があるのでは無い。我々日本國には八十餘個の國名があり、丹波の國、丹後の國、山城の國などと小區劃に國名を呼んで居る。さうだから支那の一區域たる蒙古を蒙古の國と書いたのだ。自分は蒙古のみならず、新疆、印度、西藏、支那は云ふに及ばず、露西亞、西比利亞を経て歐羅巴の天地に迄宗教的王國を建設するのだから、小さい蒙古などに執着して居るのではない。さうして宗教は國境を超越して居るのだ」

と述べた所、知事は二三回うなづいて、日出雄を獄舎に歸した。次には眞澄別以下かごめいひとりの五名は一人づつ引き出されて取調べを受けたが、眞澄別は憤然として知事其他たじんもんくわんむかの訊問官に向ひ、

「吾々を馬賊とは怪しからぬ、貴官は盧占魁を馬賊と云はれるが、彼と久しく行動を共にして見て居たが、彼には少しも馬賊的行爲は無かつた。それよりも支那官兵は自分等の所持金を掠奪し、其他一切の所持品を盗み取つたではないか。泥棒ばうする者を官兵と云ひ、泥棒せない者を馬賊と云ふのか、張作霖だつて、其他有名めいの督軍だつて元は馬賊ぢやないか、自分を馬賊と云ふのならそれでよい。まづ馬賊ばぞくの定義から聽かして貰ひ度い」  
と云ふ。萩原も亦眞澄別と同じ事を云ふて知事其他を手こずらす。

次に守高、井上、坂本の三人に對し、武器を携帶して居ただらうと厳しく訊問した。何れも日出雄先生のお弟子であつて宗教家だと云ひ抜け、やつと公署の調べも濟んだ。それから一行六人は足枷を嵌められた儘、門口に竝べられ一葉の寫眞を取られた上、其翌日六月三十日荷車三臺に載せられ、銃劍をつけた兵士六名

に送られて汽車に乗り、鄭家屯道尹に護送され、次で同地の警官教習所の拘留所や警官室に足枷を嵌められた儘分置せられた。其處へ横尾敬義、井口藤五郎の兩人が見舞に來て日出雄一行を慰めた。其處で再び道尹の取調べを受けたが、尋ねる事も、答へる事も、白音太拉と同様であつた。

七月五日の夕暮、鄭家屯の日本領事館に引き渡さるる事になつた。別れに臨んで道尹の高等官以下十數名は、墨と筆とを用意して日出雄の揮毫を乞ふた。日出雄は快く彼等の請求に應じ、腕を揮ふて大小數十の文字を書き與へた。夜の十二時頃日本領事館の手に渡り、一應の取調べを受け、領事館にて久し振りで湯を使ひ垢を落とし、監房に一夜を明し、翌六日通常服の領事館の警察署長以下五人に送られ奉天總領事館に收容された。其時既に名田彦、山田、小林の三人は收容されて居り、暫くして大倉が這入つて來て都合十人になつた。取調べの結果三ヶ年の退支處分で一件落着した。

是より先、日本から中野岩太、隆光彦の二人が役員信者代表として出張し、差入れ物其他について奉天支部の西島と共に奔走した。

七月二十一日三浦檢事外三名の警察官に送られ大連の水上署に着き、此地より又二名の警官に送られ、ハルピン丸にて門司に着いた。航海中日出雄は船長以下乗客の依頼に應じて大本教義に關する演説を爲し、澤山の揮毫をし、數多の信者に迎へられ、日本の玄關口に安着したのは七月二十五日の午前であつた。其光景は恰も凱旋將軍を迎ふるが如き有様であつた。

(大正一四・八 筆録)

### 第三十六章 天の岩戸

異境萬里の旅を終へ、不敬竝に新聞紙法違反の責付取消と云ふ、あんまり有難からぬ悪名を負ひ、漸くにして再び日本の風光に接し、純眞なる役員信徒に遙々迎へられ、門司水上警察署に送られ形式ばかりの質問を受け、門司署の三階の風當りよき北側の窓にそふて椅子にかかり煙草をくゆらし乍ら、階下の街道を見れ

ば、數多の信徒は羽織袴又は洋服姿にて大道に列を作り、自分等を見上げてゐる。中には嬉しさの餘り、戯歎するものさへあつた。日出雄、心の中にて思ふやう、  
「あゝ、ああして信徒が自分を迎へて呉れて居るが、ゆつくりと蒙古の話をする時間も與へられず、諸所の警察から警察へと送られ、二三日の中には、目出度目出度の若松さまでは無うて、よしもあしきも難波江の若松監獄に未決收監の身とならねばならぬ。自分は空前絶後の大業を企て、不幸にして中途に歸國するの止むを得ざるに立到つたのも、神界の御經綸として是非なき事である。又別に大きい心配もしてゐない。乍然妻子、兄弟、役員信者の心の裡はどんなであらう」  
等と思へば萬感胸に充ち、不思不知兩眼に涙がにじみ出た。吾と吾手に心を、とり直し、

「エー、馬鹿々々しい、こんな氣の弱い事でどうして天下を救ふ神業に奉仕する事が出来やうか、比較的……人間と云ふものは強いやうでも弱いものだなア」  
と自分の心をたしなめたり嘲つたりもし乍ら、時の移るを待つてゐると、門司署は又逃げられては大變だとも思つたものか、數多の信者を驛の方へ追ひやり、

倉皇として日出雄、眞澄別其他を小蒸汽に乗せ、下關署へ送り届けた。下關署へ行つて見ると信者らしいものは一人も来てゐない。暫らく休憩の後、下關署員三名に送られて自動車の客となると、直靈が警察の門口に待つてゐた。

内地へ歸つてから初めて見た青物店屋の西瓜や甜瓜、バナナ、林檎等が、うまさうに芳しい香を立てて蒙古の荒野をさまよつた鼻を非常に刺戟する。『久振りで一つ西瓜を喰つて見たらなア』と思へど、そんな氣儘を云ふては悪からうと遠慮した。

驛につくと汗をタラタラ流し乍ら柴田健次郎氏が只一人、あわてて飛んで来た。護送の警官と共に三等室に乗つて見ると、直靈、井上會長、東尾、湯淺其他の役員信者が満載されてゐた。次いで大竹、上郡等の警察の拘留所に一泊し乍ら大坂へと向ふのであつた。大竹警察署で湯を沸かして貰ひ、盥で行水をやつた。體量頓に減じて十五貫五百目、肩の骨が尖り、肋骨は高く現はれてゐるのを見て、背を流しに來た加藤明子が、あた外聞の悪い泣くのは一寸面喰らはざるを得なかつた。上郡では眞澄別と一所に新しい拘留所で一夜を明かし、神戸驛へ着

くと澤山な出迎人がやつて来て一々挨拶をする。二代、宇知丸は上郡驛から一所であつた。相生橋署を経て大坂驛に下車するや、見物人は蟻の山の如く、毎日新聞の活動寫眞隊や各新聞社がレンズを向けて待ち構へてゐる中を、人波を分けて人力車に乗り、曾根崎署へと送られ、次いで天満署の拘留所へ三十分ばかり投げ込まれ、同署の裏門から徒歩にて若松支所へ行かむとするや、大本役員信者及び見物人は山の如く雑踏を極めた。支所の入口には又もや澤山な新聞社の寫眞班が待ち構へてゐて、盛んにシャツターの音をさせてゐる。此門を潜るや否や、信愛なる役員信者に別れねばならぬ。殆ど暗い穴へでも、もぐり込むやうな氣分が漂ふてゐた。直に支所長の室に導かれ、先づ第一に背の高さや、體の目方や、身體の特徴などを調べた上、前以て差入れてあつた軽い浴衣と着換へ、支所長の役人氣離れての打解話に、蒙古に於ける奮戦苦闘の状況を面白く聞かせ署長をアツと云はせ、直ちに、同所の二階の九十八號に收容されて終つた。此室は北に窓があけてあり、さうして建物が立つてゐないので風當りが非常によい、そして窓からのぞけば梅田の停車場附近まで見られる、支所内第一の上等室であつた。どの室

もどの室も獨房は横巾四尺、縦七尺強にて殆んど一坪に足らない狹隘なる西洋式の監房である。その中で布團も布き、手水も使ひ、荷物も置き大小便もやらねばならぬ。おきて半疊、寝て一疊といつても悟つた顔して云つて居つても、實際、こんな所に突込まれたのは可なりつらかつた。渺茫として天につらなる蒙古の野邊に、ツツパリのない空を屋根となし際限もない大地を褥となしてグウグウと寝てゐた事を思へば、俄に、象が黴菌に變化したやうな氣分になつた。當年は特別暑熱しく、殆んど堪へきれない程で、身體一面から油のやうな汗が滲じみ出る、窓はあつても六尺も上にあいてゐるのだから、あまり涼しくもない。乍然パイソンの遭難の事を思へば、

「マアマア結構だ、ここに居れば生命は大丈夫だ、今こそ、こんな狭い所に蠶の蛹のやうに繭の中にすつこんでゐるが、メツタに熱湯の中に放り込まれて殺される心配も要らず、やがて此殻を破つて蝶と孵化し、澤山の子を産んで再び再生の春に會ふ」

のを唯一の楽しみとなし二日三日と日を送つた。今迄刑務所へは法律に關する書

籍と宗教に關する書籍の外差入を許されなかつたのが、一ヶ月以前から肩のこらぬ講談雑誌や面白俱樂部その他時事に關するものも差入を許す事となり、非常に無聊を慰むるに都合よくなつてゐた。又「神の國」や「靈界物語」の差入が許されたので、みながらにして大本の状況を知る事を得た。が然し、いい事があればその反面に悪い事のあるものだ。大本役員が債權問題について青くなつてゐる事や、新に債權者が、きびしい請求を始めた事が分つて非常に齒がゆく思つたが、何と云つても囚れの身、自由が利かぬのに少しく當惑せざるを得なかつた。役員信者の面會、辨護士の面會にて午前中は相當に忙しく、隔日に葉書を書く、一週間目に散髪をする、四日目位に風呂に這入る、醫者の診察を受ける、その間に筆硯を握つて詩歌を書きつける、面白い小説を読む、随分日を経るに従つて手紙の數も殖えて來るなり、忙しさを感じて來た。その爲め九十八日間の收監もあまり長くは感じなかつたのである。殺人犯や暴動罪や詐欺、泥棒等の未決囚と共に、日曜を除く外は毎日看守に送られて長い廊下を渡り面會所に順番の來るのを待つてゐた。その間には種々の面白い話を聞き、彼等の心理状態を知悉する事を得た。

足立辨護士がやつて来て、その筋の諒解を得て置いたから、直ぐに保釋の許可になるだらうから安心せよと云つた。自分も是非一度歸つて早く蒙古事情を役員信者に話して安心させ度いと思つた矢先だから、一日も早く出監し度いと思つてみると、原嶺氏より大變都合の悪い長たらしい書面が日出雄名宛に舞ひ込んできた、その結果はたうとう保釋もオジヤンになり、九十八日間入牢せなくてはならぬやうな破目になつたのである。乍然その間に精神の修養をなし、今日蓮の豫言録や蒙古王國の夢等と云ふ日出雄の記事を読み、澤山の信徒から送つて来る名所八ガキを見て、非常に面白く楽しく入獄の身たる事を忘れ、夏と秋とを知らぬ間に送つて終つたのである。入監中に澤山の面白い夢を見た。その一二をここに書き止めておかう。

舊七月十五日の夜、十七八歳の女神が忽然と現はれて自分に朝日煙草一ケを手渡し……莞爾として姿を消し玉ふた。自分は目が覺めてから、やがて岩戸が開くだらう、朝日の煙草を賜はつたから。然しユツクリ一服して時節を待てとの事だらう、到底ここ五日や十日の中に出獄する事は出来ないだらうと感じたのであつ

た。

それから四五日すると、北海道に自分は巡教に行くと大きな南瓜畑があり、南瓜の作り主は自分にその中の最も大なるものを、むしり採り、二個呉れた夢を見た。出獄して綾部へ歸つて居ると、四五日してから北海道の信者が、日出雄が夢に見た同様の南瓜を二個持つて来てくれたのには、夢の適中した事を感じせずには居られなかつた。

新十月の中頃、本宮山のやうな丘陵があつて、その山麓を自分の母と二人歩いてみると、母の姿は俄に見えなくなつた。自分は山の中へでも母が隠れたのではないかと思ひ、小山の南麓から青々とした萱草を分けつつ上つて見ると、大本信者の一人が一生懸命に一丁ばかりの間雑木を伐り、土を引きならして三間許りの道を開いてゐる。そこを歩いて上つて行くと、十字形に大道が貫通してゐた。つまり塞がつてゐたのは五六十間許りの間であつた。こりや屹度保釋を許されて近い中に出られだらうと感じた。

その次は自分が非常な高い尖つた岩山の上に、いつしか上つてゐたが、何處か

らも下る道がない、どうしやうかと思つてみると、白馬が二頭現はれて、鐵のくさりを銜へて自分の居る岩の上にガチリと音をさせて掛けおき、山の横腹を一瀉千里の勢で歸つて終つた。目が覺めてから、自分の爲に活路を開くべく獅子奮迅の活躍をしてゐる信者のある事を感じた。

次に本宮山の東麓の傾斜地を、中野岩太氏が一生懸命に引きならし、行儀よく小松を植ゑてゐた夢を見た。

或日眞澄別が面會に来て云ふのは、

先生、私は靈眼で十一と云ふ事を見せて頂きましたが、どう云ふ事でせうか」と尋ねたので日出雄は、

「フン、大方十に」と云ふ事だらう、十中の九まで保釋が許されないのかも知れない。又考へて見れば十中の十一迄無罪になる事かも知れぬ」

と云つて笑つて別れた。然るに日出雄の保釋が決定したのは舊十月一日であり、若松支所を出たのは新曆十一月一日の午前十一時一分であつた。十五貫五百目の體量に減じてゐた自分は、九十八日間の監房生活の結果十七貫六百目に體量が

増ましてゐた。支し所しよ長ちやう始はじめ所しよ内ないの役やく人にん全ぜん部ぶにみ送おくられて門もん内ないをで出でると、大おほ本もと役やく員めん信しん者じや數すう百ひやく名めい、其その他た新しん聞ぶん記き者しや及および大おほ坂さか市かし内ないの見けん物ぶつ人にんが黒くろ山やまの如ごとくに沿えん道だうに堵とれ列つしてゐる。小こ雨さめがシヨボシヨボと降ふつてゐる中なかを、さぬきや旅りよ館くわんに這はい入いり、ここにて數あま多たの信しん者じやと食しよ卓たくを共ともにし、無ぶ事じ歸きり綾ようする事こととなつた。

これより先さき、聖せい地ちでは秋しゆ季き大たい祭さいがあり、分ぶん所しよ支しよ部ぶ長ちやう會くわい議ぎが始はじまり財ざい政せい整せい理り問もん題だいについて、か  
なりの激げ論ろんが始はじまつてゐた。そこへ保ほ釋しやく許き可かの電でん報ぽうが大おほ坂さかの辨べん護ご士しからついたので、今いま迄までの争そう論ろんは水みづの泡あわの如ごとく消きえ、何いづれも一いつ齊せいに神かみ言ごとを奏そう上じやうし、それより一いち同どう打うち揃そろふて大おほ坂さかに迎むかへに來きたのであつた。

これで蒙もう古こ入いりの大おほ芝しば居ゐも一ちよ寸つと黒くろ幕まくが下おりたやうなものである。

(大正一四・八・一六 北村隆光筆録)

### 第三七章

おほもとてんおんきやう  
大本天恩郷

財政問題や日出雄の保釋問題に關する、小田原評議で低迷せし周章狼狽の空氣は、日出雄の保釋歸綾と共に一掃され、全くの嵐の跡の夫れの如く、天地清明の聖地と復活したのである。

爾來進展主義の日出雄は、負債や世評に屈することなく、瑞祥會本部を龜岡より綾部に移して諸務の總攬を宇知磨に一任し、自らは眞澄別其他を率ゐて、萬壽苑に根據を定め、入蒙出發の際宣言せし如く、單に三五聖團の日出雄としてでなく、世界の源日出雄として、萬界の暗を照破すべき、神界經綸の實現に着手したのである。

先づ以て萬壽苑は天恩郷と命名され、日出雄の居館たる光照殿が新築される事となつた。久しく寂寥を感じて居た萬壽苑は頓に活氣横溢し、數多の信者は各地より、吾れも吾れもと先を争つて參集し、光照殿造營に奉仕する事となり、龜山城趾の基礎石は夫れ夫れ掘り起されて、誂へた如く神業に役立つ奇縁に、彌永久世彌永の掛聲も勇ましく、四邊の空氣を震撼せしむる盛況に、驚嘆の眼を睜るは龜岡町の人々のみならず、日出雄が天下無敵の經綸振と其説示の絶對なるに、今

更さらの如ごとく耳じもく目を敬そばたて、或あるひは教をしへを請こふべく、或あるひは事業じげふ經營けいえいの主しゅざい宰さいと仰あふぐべく、往わうらい來らいする人ひと々びと引ひきも切きらず、更さらに歐おう文ぶん印いん刷さつ所じよの新しん設せつ、海かい外ぐわい宣せん傳でん部ぶの移いてん轉てんなど、月げつ照せう山の彌みろく勒たふ塔たふ日ひに日ひに其その光くわつ輝きを増ます瑞ずい祥じやうに、月げつ宮きう殿でん造ざう營えいの日ひをも鶴かく首しゆして待まつのは、敢あへて信しん徒とのみではないのである。あゝ惟かむ神な靈が幸ら倍たま坐ちは世ませ。

(大正一四・八・一七 筆録)

### 第三八章 世界宗教聯合會

天てん恩おん郷きやうに新しん築ちくせられる光くわう照せう殿でんの礎そ石せきは、道だう義ぎ的てき世せ界かい統とう一いつの基き礎そたるべき世せ界かい宗しう教けう聯合がふくわいの證しやう兆てうなれば、一いち石せき塊くわいを積つみ重かさぬるにも、心こころせざる可べからずとて、源みな日もと出ひ雄をは親したしく基き礎そ工こう事じ監かん督とくの任にんに當あたり、一いつ方ぱう岡をか崎き鐵てつ首しゆの報はう告こくに基もとづき、同どう人にんが同どう道だうして綾あやの聖せい地ちに參さん拜ぱいせし、李り松しやう年ねんを先せん驅く者しやとなし、眞ます澄み別わけに全ぜん權けんを委ゆねて、世せ界かい宗しう教けう聯合がふの成せい立りつを促つすべく之これを北ペ京キンに派は遣けんする事こととした。

眞澄別は神命を畏み、隆光彦、岡崎鐵首並に頭山滿及内田良平兩氏の代表者たる岡貞吉氏の三名を伴ひ、陰曆四月十二日、天恩郷を後に船路を北京に向ふ事となつた。

北京にては熱心なる佛敎家として知られたる洪徳滋が、李松年より傳へられたる使命を知得し、出來得る限りの準備を整へ、眞澄別一行の來着を待つて居た。眞澄別は先づ以て、折柄北京に滞在し一行の來意を傳聞して歡迎の意を表すべく心待に待つて居た章嘉活佛と會見し、將來を約し、且此際支那に於て世界宗教聯合會の發起せられる事の、機宜に適した事、昨春蒙古人の神意など、神界經綸一部の消息を傳へた。章嘉は怡々として、自分の本懐も實に此に存するとて固き握手を交換した。

昨春盧占魁は大庫倫に進むに先立ち、内蒙を横斷し章嘉の許に日出雄一行を導き、内蒙に於ける根據を之に依つて堅めたいと聲明してゐたが、一箇年を経し今日、神は眞澄別を遣はしてこれを實現せしめられたのである。茲に活佛の現狀に關し簡單なる説明を添へる事とする。

喇嘛教即ち佛陀教が國教となつてゐるのは、西藏、内蒙及び外蒙の大庫倫地方以西である。其他に喇嘛廟のある主なる地方は、山西省の五臺山及び北京である。而して四人の活佛がこれを四分して、各其管内を統轄してゐる。活佛の下には、ザスク、カンブ、大喇嘛、ツオングワン、クワンジャ等の階級があり、各王公爺廟の主宰者は主としてカンブ以下であるが、俗に此等をも活佛と稱するのである。西藏の前藏は達賴活佛、後藏は班禪活佛の管掌に屬し、猶山西省五臺山にも所管廟を各有してゐる。

章嘉活佛は内蒙全部、外蒙の十個廟、五臺山の五個廟並に北京の喇嘛廟を統掌し、支那の大國師として尊崇せられてゐる。そして本來察哈爾の多倫に居るべきであるが、地方巡錫の時以外は、便宜上夏季は五臺山に、冬季は北京に駐在してゐる。

また外蒙を管掌してゐる 先年皇帝の宣言した大庫倫の活佛は、昨年歸幽して、今は缺員となつてゐる。缺員中は他の三活佛の中、何れかが兼掌する慣例であるが、外蒙は未だ赤露の勢力範圍を脱せず、如何とも施すべき策なき状態であ

る。而して活佛の後繼者は、各其遺言に従ひ、歸幽後三年以内に再生するのを待たねばならぬから、今後大庫倫に如何なる神の經綸が行はれるか、それは神業の進展と共に自ら闡明すべき問題である。

斯くして眞澄別一行は、支那に於ける各宗教の本部を訪ひ、各代表者に神意を傳へ、機は熟して、大正十四年五月二十日陰曆四月二十八日、北京悟善社に於て、世界宗教聯合會は發會式を擧げ、先づ東亞の聯盟を確實にし而して後西漸することに方針が定められたのである。従來三五教と提携し居りし、普天教、五大教の外、今回の聯合會に依り、三五教に結びしは、道教、救世新教、佛陀教、支那佛教、支那回教、支那基督教、儒教などである。

更に眞澄別は支那に於ける因縁の靈地五臺山を訪問して神勅を仰ぎ、日出雄の許に復命したのは、日出雄が昨年大坂刑務所に到着した時より十一ヶ月を経し六月二十七日であつたのも奇と云ふべしである。

(大正一四・八 筆録)

第三十九章 入蒙拾遺

日出雄が洮南の平馬邸にて微笑し乍ら眞澄別に示した、

「呉佩孚をつかれ曹錕と逃げ出だし」

てふ一句は、半年経つか経たぬ間に實現された。張作霖が盧占魁を利用しようとして企てた第二回奉直戦は、其豫期に反して意外に早く火蓋を切る事になり、今更の如く盧を追懐したとさへ傳へられた。幸か不幸か人の從軍と馮玉祥のクーデターのお蔭で張作霖は戦に負けて、勝負に勝つた結果となり、呉佩孚は一時失脚し、曹錕は一旦は逃出し、今は捉はれの身となつてゐる。

昨夏白音太拉に於ける惨劇の前夕、形勢非なりと感じ、部下を取纏めて逸出し、途中王府の兵に包圍せられ、數十名の部下を失ひ、身を以て免れたる劉陞山は、右奉直戦の混雑中大連に身を遁れ、更に自轉倒島に渡り、暫し綾の聖地に身を寄

世再擧の時期をまつてゐたが、神の攝理を計りかね、今は奉天の日本租界に身を潜めて使命の降下を鶴首してゐる。隆光彦が渡支の途次訪問すると、劉は夫人と共に款待を極めたといふ。

眞澄別が北京に滞在せるを傳へ聞き、懐かしさと憧憬の餘り訪ね来た中に、王昌輝、揚巨芳、包春亭、金翔宇などがある。皆索倫山の司令部に参じてゐた人々で、各自思ひ思ひの述懐を語る。

王昌輝は其後井上兼吉を伴ひ、胡景翼軍に顧問として馳せ参じ、胡の役後、嶽維峻を輔けて、依然河南軍中に居る。彼は曰く、

「實際あんな馬鹿な結果になつて、日出雄先生に申譯がありませぬ。私が胡景翼の許へ身を寄せると、胡が……君は何故日出雄先生を自分の處へ御案内せなかつたか、自分ならば飽く迄も安全に護衛し、且自由に活動して頂けるのに……と叱られました。本當に多數の犠牲者を出し、残念で堪りませぬ。兔に角暫時放任しておいて下さい。必ず目醒しい結果を招來して御覽に入れますから……日出雄先生に然るべく御取なし願ひます」

と腕を撫し、更に白音太拉事件を追懐し、

「無事に免されて歸つた馬副官の話に依ると、盧占魁は就寢中用事ありとて二名の兵士に引起され、玄關口に待構へて居た四名の兵士に短銃を向けられ、悔しさに地團駄を踏み乍ら、營庭の露と消えたさうです。他の連中は身に寸鐵も帯びざる事とて何れも狼狽し、中には見苦しく逃げ惑うた者もあつたさうですが、例の賈孟卿は未だ寝もせで、手紙を認めてゐる最中だつたさうですが、取圍む兵士を睥睨し、……騒ぐな手紙を書き了る迄待てつ……と大喝し、悠悠として銃殺を受けたさうです。惜しい男でしたなア。……それから盧占魁の奴、噂の如く御用金を隠して居つたと見え、昨秋鄒秀明が憲兵隊や警察署長と打合せ、北京の盧夫人の隠家を取調べ、數萬圓を沒收し、入蒙の結果未亡人となつて、北京に佗しく寄食してゐる連中に夫れ夫れ、數百圓宛分配し、殘金は私したらしいです。其報いでせう、鄒は今年の正月、奉天軍の連長となつて居乍ら、佛租界にある武器を押收しようとし、條約違反で銃殺された相です。云々」

と憮然たること久しかつた。また揚巨芳は索倫本營に於て、盧の參謀長揚萃廷と

衝突し、恨を遺して引上げ、今は奉天軍の憲兵少佐に任ぜられ、奉直間の列車監督長となつてゐる。

揚巨芳「大先生は何して居られますか、昨年は苛い目にお會ひでしたなア。大體揚萃廷と云ふ奴は密偵同様で、盧司令が情實に絡まれ、あんな者を參謀長にしたのが破綻の大原因です。……張作霖は盧司令等を銃殺の意志は實際なかつたのです。あれは闕旅長の越權の處置でした。しかし劉陞山に對しては好感情を持つて居りませぬ。實際劉團の趙營長が部下を使曠し、蒙古地内で強姦、掠奪などを逞しうして、討伐令の原因を作つたのですから仕方がありません。種々の點から私は入蒙事業の破綻の責任者は揚萃廷、劉、趙、佐々木、大倉の五人だと思つてゐます。どうか日出雄先生に宜しく御取なしを願ひます。當方面で御用の節は何時でもお使い下さいませ」

と丸々した、そして脂切つた面に笑を湛へてゐた。

包春亭は包金山の代理として金翔宇と共に眞澄別を訪問したのである。包春亭は、

「大先生外皆様御壯健で結構で△います。二先生がお越しと聞き包金山が伺ふ積で居りましたが、據所ない都合で、私を代理に寄越ししました。包金山も一時は奉天側から疑の眼で睨まれ、困つてゐましたが、間もなく諒解され、今は黒龍江省督軍吳峻陞の顧問をしてゐます。併し御用とあれば、少くも三千の蒙古兵を率ゐて、何時でも立ちます。……包金山は昨年索倫出發以來、盧司令の方針が危険味を帯びてゐるのを氣遣ひ、岡崎先生と相談して、應援軍を組織する爲め、六月八日途中から手兵の大部を劉陞山に預け、奉天へ向つた折、私は其後護衛長として隨行し、途中屢々危険に遭遇し乍ら、漸く奉天に着くと間もなく、あの悲報に接しましたので、包金山共々聲をあげて泣きました」

「と今更の如く涙ぐむ。金翔宇は後を受けて、

「私は索倫から、募兵の爲め黒龍江へ派遣せられたのですが、盧司令の旅費手當が餘り少額で困つてゐると、岡崎先生が別に心付けをして下さつた時の嬉しさは今に忘れませぬ」

「と言へば、傍に居た岡崎は、

「あれは皆大先生から頂いたのを、君方に取次いだまでだ」と言葉を挟む。金翔宇は更に語を繼ぎ、

「あゝさうでせう、兔に角あれで漸く使命を達し洮南迄歸ると、既に討伐隊が索倫山へ向つた所なので、私も其一味として投獄せられ、危く銃殺せられる所を、豫て洮南の旅長張海鵬と知合であつた爲、首がつかまりました。併し大先生のお側近く仕へてゐた者は皆助かりましたね。白凌閣は素より、温長興、秦宣、王瓚璋、王通譯等皆さうです。それが夫々危地を脱れたのは、畢竟大先生の特別の御加護としか思へませぬ。時に蒙古の青年も追々目醒めて來ますから、お役に立つ者も漸次殖えて參ります」

と意氣軒昂たるものがある。眞澄別は何れの人にも 昨年の蒙古人は君方の思ふ様、單純な失敗でない事、神様の方から云へば深いお思召のある事や、世界的神劇の序幕とも云ふべきもので、其後引續いての活動の結果、今回世界宗教聯合會が成立した事などを説明し、發起人連名簿や寫眞など見せると、各人一樣に感謝の聲を洩らし、前途の祝福を忘れなかつた。殊に蒙古人は章嘉との提携を非常

に喜よろこんだ。

（大正一四・八 筆録）

入蒙餘録にふもつよろく

大本の經綸と滿蒙おほもと けいりん まんもう

愈々いよいよ大本は開教四十周年を迎へる様になりました。教祖様の御筆先には、三十年で世のきり替へをすると出てゐますが、それが餘り世の亂れ様がひどいので更に十年延びたといふ事が書いてあります。本年が開教四十年に相当しますから、十年引いて見ると本年がまる卅年であるから、立替立直しの時期になつた事と信ずるのであります。

卅さんじふと書かくと世界せかいの『世せ』といふ字じになる。外國ぐわいこくでは百年ひゃくねん一世紀いつせいきといつて居ゐるが、日本にっぽんでは卅年さんじふねんが一世紀いつせいきであります。世界せかいの『世せ』といふ字じは十じふを三みつよせたのである。で人間にんげんの一代いちだいといふのは約つまり卅年さんじふねんで、三十歳さんじつさいで世帯しやたいを持つて六十ろくじふになつて隠居いんきよするといふ事ことになる。隠居いんきよする時分じぶんには殆ほとんど子が三十歳さんじつさいになる。かういふ工ぐあ合ひに人間にんげんの一世紀いつせいきといふものは、文字もじの上うへから見みても卅年さんじふねんときまつて居ゐるのであります。

本年ほんねんは壬申みづのえさるの年としであります。結婚けっこんなんかについでよく迷信家めいしんかは今年ことしは申さるの年としで『去さる』だからいかぬと云いふ。然しかしこれは總すべての禍わざはひをみづのえさる 水みづに流ながし去さる年としであつて非常ひじやうに結構けつこうな年としである。佛法ぶつぽふの法ほふは水偏みづへんに去さるである。今年ことしは壬申みづのえさるの年としであるから、佛法ぶつぽふがすたれて神かみの御教みをしへの發展はつてんすべき時ときになつたのであります。印度いんどの言葉ことばで法ほふのことをダルマと云いひますが、達磨だるまさまといふのは、本來ほんらい抽象ちやうじやう的てきの佛ほとけであつて、眼めを大おほきく描かくのはこの法ほふを表徴へうちやうしたものである。そして無茶むぢや苦茶くぢやに大おほきな眼めを描かくのは日月じつげつに譬たとへたのである。これは天地日月てんちじつげつの法ほふであるといふ意いから達磨だるまといふので、ダルマは即すなはち印度いんどの言葉ことばである。今年ことしは所謂いはゆるダルマ

の年であり、彌勒の年であるのであります。この滿四十周年に際して、神様が豫て御警告になつて居りましたシベリヤ線を花道とするといふ事が愈々實現して來たのでありますから、吾々はジツとして居られない、日本臣民として袖手傍觀する事が出来ない場合になつて來たのであります。兔も角吾々の頭の上に火の粉が落ちて來たのであります。この火の粉をどうしても拂はねばならぬ。この事あるを私は神様から始終聞いて居りましたので、大正元年頃から今の中に蒙古を日本のものにして置きたい。蒙古に行つて蒙古を獨立さして置いたならば、日本は假令外國から經濟封鎖をやられやうが、或は外國から攻めて來られようが、自給自足、何處迄も日本の本國を保つ事が出来る。かういふ考へをもつて大正元年から馬の稽古をやつたのであります。本當にやりかけたのは大正五年からであります。何故馬の稽古を始めたかと云ふと、昔から支那では南船北馬と申してゐる通り南に行くには船でなければならず、北に行くには馬でなければならぬので、蒙古の大平原を行くのはどうしても馬術を知つて置くのが肝腎であると思つたがためであります。一時は金龍、銀龍、金剛、千早といふ馬を四頭も置き、その

他の馬にも乗り廻して馬術を稽古して居りましたが、愈々大正十年になつてこれから入蒙を執行しよう、節分祭から行かうと思つて居つた時に、あの十年事件が突發したため、滿州でなくて人の來られぬ様な所に一寸はいつて來たのであります。

それから大正十三年に愈々年來の素志を執行したのであります。所が、その時恰度蒙古のタークロンと云ふ所に偉い喇嘛が居つて、昔成吉思汗が蒙古に兵を擧げてから六百六十六年目に、ナランオロスからイホエミトポロハナが出て蒙古を助ける。即ちナランオロス（日出づる國）から生神が出て來て蒙古を救ふといふ豫言があつたのであります。それが恰度甲子の年、大正十三年が六百六十六年目に當つて居つたのであります。吾々はさういふ事は知らなかつたけれども、恰度さうなつて居つたのであります。しかもこの蒙古を救ふ人は年五十四歳と云ふのであります。その外色々な事が符號した爲に蒙古人に歓迎されまして、思ひの外にどんどんと進んだのであります。けれども結局は張作霖の裏切り及び赤軍との戦ひの疲れ、

呉佩孚軍との戦ひによつて携帶した所の食料も彈丸もなくなつて了ひ、已むを得ず白音太拉で吾々は捕へられ、銃殺されむとする迄に至つたのでありましたが、その當時には世間の人々及び大本の信者の人は大變に失敗をして來た様に感じて居つた。その時私一人が大成だとして云つて、自分一人で平氣で居りましたので、皆が負けをしみが強いと云つて笑つて居つたのであります。けれどもこれが一ツの種蒔きとなつて恰度今時がめぐつて來たのであります。

今皇軍は連戦連勝で東三省は殆ど平定された様な形であります。この東三省の民衆の心は未だ未だ服従して居らぬ。これをさせるにはどうしても宗教をもつて行かねばいけないのであります。

愛といふ事は基督も、マホメツトも説いて居る。佛教は慈悲心を説き、或は十善といふ事を説いてある。各神道、各佛教は皆愛と善との外に出てゐないのであります。併し今迄の宗教は國によつて皆垣を造つて居る、出雲八重垣を造つて居る。即ち猶太は猶太の神、支那は支那の神といふ風に自分一國の神様にして居る。この垣を、この出雲八重垣を破るには、人類愛善といふ大風呂敷を頭から被せ

て行くのが一番よいのであります。

ラテン語で云ふと「人類愛善」と云ふ言葉は「大本」といふ事になる。それで「人類愛善」も「大本」も精神は少しも違はない。併し乍ら「大本」は至粹至純なる日本の神様、日本の國體を闡明する所のものであり、「人類愛善會」は各思想團體及び各宗教一切の融合統一する所のもので、同じ名であつても異なつた働きをして居るのであります。で先般滿州へ日出磨をやりましたのも、さういふ精神からであります。先づ東三省の人心を統一する事が肝腎である。あらゆる宗教を人類愛善の大風呂敷で包んで了はねばならぬといふ考へで、人類愛善旗を翻して滿州の天地に活躍をして居るのであります。私自身でも滿州へ行つて活動したと思つて居ますが、それも餘り慌ててもいかぬし落付きすぎて機を逸してもいかぬ。恰度六月時分の柿は未だ澁いが、九月から十月頃になると熟して美味しくなつて柿の木の下に行くのと、何もしないでも味のよいのが落ちて来る。約り熟柿の落ちる迄待つのが一番賢明なやり方である、と云つても只ジツとして居るのではない。それ迄に總ての準備を整へて置かぬと熟柿も拾へないのであります。

それで信者の中には「もう行かれさうなものである。何時行かれるか何時行かれるか」と尋ねる人があるが、さう簡単なものではない、大きな仕事である。日本の明治維新でも當時内地人は三千万であつたが、矢張り憲法發布迄には廿三年かかつて居るのであります。同じく不思議にも三千万人の東三省の人、此處にはロシア人も居れば支那人も居る。西洋人も居れば日本人も居る、又朝鮮人も居る。かういふ様なゴチャゴチャの人種が集り面積は殆ど東三省だけで日本の三倍もあります。日本の同じ人種、同胞で廿年かかつた、それに今滿蒙を統一しようとするのですから、神様の徳によつて割とたやすく出来るとは思ふのであります。すが、皆様が考へて居られる様な容易な事ではないのであります。それに就ては私は非常に責任を感じて居るのであります。心は千々にはやつて居ります。心の駒は足掻してゐます。けれどもこの手綱を引きしめて愈々といふ時を考へるといふ事が最も必要な事でありまして、落付いて時の來るのを待つて居るのであります。

今日は出口澄子の誕生祭でもあります。又節分祭でもあります。この節分とい

ふ事はこれは冬から春にかはるのであるが、天の陽氣は節分が冬の眞中になつてゐるのであります。節分がすめば大寒になつて來る。皆は節分が來れば春と思ふけれども少しも暖かくならぬ。舊の二月にならぬと、梅の花が咲かぬ様に、矢張未だこれから寒くなる。然し、この冬といふものは萬物雌伏の時代である。人間も矢張り雌伏する時代であつて大いに考へねばならぬ時である。輕擧妄動をつつしんで極く着實に一年中の事或は將來の事を考へるのには今が最も適當な時期だと思ふのであります。で私もそれに倣つて非常に若槻さんぢやないが深甚の考慮を拂つて居るのであります。今迄は若槻さんを嘘つき禮次郎と云つて居るものがあつたが、今度は犬養首相は修練による心境の變化と云つて居る。嘘を云つても心境の變化と云へばすんでゐるといふ事は、今日の日本としては面白くない事と思ひますけれども、併しさういふ大臣の言葉は今の日本國民の精神を代表して居るのであります。併し吾々は始めから終始一貫何處迄も心境の變化をせない様に貫徹したいものであります。

かう云つて居りましても、時期の變化によつて、約り心境の變化ではなく時期

の變化によつて三月に飛び出すか、五月に飛び出すか、それとも本年中飛び出さないかも知れませぬ。そこをよく考へて貰はぬと、もどかしがつて貰ふと困りま  
す。今度の事は重大であるから沈黙を守つて居る。よい加減な事であつたならば、  
とうに騒いで行つたのである。この前に蒙古に行つた時と今度は違ふ。あの時は  
兔も角先鞭をつけて置きたい、成功するせぬは別として、日本國民に滿蒙といふ  
事を今の中に力強く意識させておかねば日本は滅びると思つたのであります。こ  
の點滿蒙問題に先鞭をつけた事は非常に効力があつたのであります。

蒙古人はかういふ事を云つて居る、  
「黒蛇が世界中を取巻くその時に愈々世の  
立替があつて彌勒佛が現れ蒙古の國を救はれる。その時は禽獸草木が人語を囀  
と。今日の世の中は木や草 民草と云へばこれは人間の事でありませぬ。木や草  
がものを云ふ、所謂普選になつて蛙切りでも、田子作でも、議員とか何とかい  
ふものになつて、ものを云ふ時になつて居る。黒蛇といふ事は鐵道といふ謎で、  
已にシベリヤ線が出来て蒙古を取り巻いて了つてゐる。かういふ豫言があり、然  
も初めて私が行つた時は六百六十六年目に當つてゐた。六百六十六の獸といふ事

があります。六六六といふ事は非常に意義のある事であり、六六六は三口であるから、家を建てるのにも天地上下が揃はないと駄目である。その時から本年は恰度八年になつて居ります。六六六十六年、六六七十四年になつて居る。吾々大本信者は云ふに及ばず、日本國民全體が鉢巻をして大いに考へ、大いに盡さねばならぬ時が來たのでありますから、吾々は世界の戦争が起る、或は日本は世界を相手に戦はねばならぬといふ悲壯なる覺悟を要する時だと思ふのであります。

（昭和七・二・四　みろく殿に於ける講演　三月號「神の國」誌）

## 世界經綸の第一歩

愈々本年は十二萬年に一度の甲子の年であります。人類が発生してから、學者の説によれば、十萬年とか五十萬年とか色々言つてゐる様ですが、實際は地球の修理固成が出來て最初に人間の形を以て現はれ玉ふたのが大國常立尊であります。

甲子かふしはすべてが更始かうしとなり元もとへもどることであり、良うしろは初はじめであり良かためでありまして、愈々いよいよ大神様おほかみさまの神徳しんとくが顯現けんげんされる時期じきであります。今日こんにち迄までは魂研たまみがきの時代じだいであり、練習れんしふの時代じだいでありましたが、愈々いよいよ甲子かふしの年としからは擧國きよこく一致いつちして事ことに當あたらねばならぬのであります。大本おほもとに因縁いんねんあつて集あつまられた人々ひとびとから、先まづ世界せかいの大立おほたて替かへ大立直おほたてなほしの型かたを出ださねばならぬ事ことになつて參まゐつたのであります。併しかし皆みなさまが協力けふりよく一致いつちせなくては大神業だいしんげふは成就じやうじゆせしない。たとへば一本いつぽんの矢やはごく弱よわいものであり、すぐ折をれるが、何本なんぽんか固かたまれば中々なかなかつよ強く容易よういに挫折ざせつせしないものです。今日こんにち迄までの大本おほもとは世界せかいの状態じやうたいが映うつつて個々こごご分立りつし、祝詞文中のりとぶんちゆうの「己おのが向々むきむき」で上うへを向むいたもの、下したを向むいたもの、或あるひは右みぎを、左ひだりを、天國てんごくを、地獄ぢごくを、良うしろを、坤ひつじやうをと云いつた具合ぐあひに個々こごご別々べつべつに向むかつてみたが、之これでは神業しんげふの完成くわんせいどころか却かへつて妨害ぼうがいになる。祝詞文とぶんの中の「己おのが向々むきむき有あらしめず」の聖句せいぐの通り、信者しんじや一般いつぱんが協同けふどう一致いつちして事ことに當あたらねばなりません。

神諭しんゆに「誠まことの分わかつた役員やくいん三人さんにんあれば立派りつぱに神業しんげふが完成くわんせいされる」とお示しめしになつてゐますが、小ちひさい胡麻粒ごまつぶ一つひとつが元子げんしとなつて金米糖こんべいたうが出來でるやうに、役員やくいん三人さんにん

の心が合ひさへすれば、それが元になつて正義の團體が固まり追々と大きなものになり、どんなことでも成就するでせう。併し單に只三人だけでは最後の良めは刺せないので、神様は止むを得ざる場合を慮り玉ふて、三人でもとの意味をお示しになつてゐるのであります。

大本の内部も今迄は個々分立であつたが、今後は協同一致の習慣をつけねば一朝事が起つた場合に頭を外す様な事が出来てはつまらない。夫故いよいよ今回の大改革が斷行されたのであります。

本年（十三年）は甲子の年で、神様の仕組まれたる世界經綸の初まりとして、私は今春早々三人を引連れて遙々と蒙古入を始めたのであります。此事業は大きな仕事であつて、神様は少くとも一ヶ年位は歸國さして下さらないと思つてゐましたが、百二十六日で日本へ再び歸ることになつたのは神界の思召のある事で、大本が統一して居らぬ故、これを統一しておいて世界の經綸に着手すべく經綸されたものと考へます。私は歸國後神様に伺ひ、今日迄の諸種の陋習を打破して適材を適所に配し、出来る丈新しい空氣をつくる事にとめました。適材適所と言

つても絶対的に適當とは云へぬ。神様から見れば皆一様に不完全であるから、神様の命令で選ばれた人々が、何も出来ない、神様も目が見えないとか何とか不平や小言を云はないで、少時時節を待つて頂きたい。凡て物は不完全から段々と進むものでありますから、御神業が完成する様に努めてほしい。ついては責任の地位に立つ人をそれぞれお願いしたのでありますから、皆それぞれ助け合つてつとめて頂き度いものであります。

(大正一四・一・二五號「神の國」誌)

## 蒙古建國

ものいはぬ畜生ながら愛されし人のなやみを案じ居るらし  
金龍は行儀よき馬銀龍は道かけりつつ屁をひり放つ

寫眞機を携へ奉天城たちて萩原敏明進み來れり  
素人の萩原敏明わがために後の記念と寫眞にいそしむ  
白凌閣松村伴ひ洩兒河畔の森林深く入りて遊べり  
折もあれ人喰人種の一隊はわが目路近く騎乗すすみ來  
三人は柳の古木の朽穴に身をかくしつつ難を逃れし  
三人はてんでにモーゼルかざしつつよらばうたむと身がまへて居り  
食人種われらのあるを知らざるか五十騎ばかり通り過ぎゆく  
朽穴ゆわれと松村顔出して萩原技手のカメラに入りたり  
ゆけどゆけど際限もなきさ緑の山に匂へるあんずの紅花  
あかあかと匂ふあんずの花見つづ知らず知らずに山深く入る  
白凌閣温長興を従へてひづめの音も勇ましき夏  
新緑のもゆる川邊に大いなる館七八つ並びてありけり  
騎上ながら川を横ぎり何人の館か知らず門たたき見し  
白凌閣を通譯としておとなへば女馬賊の頭目の館

このあたり保安の權を握りたる女馬賊の蘿龍が家なり  
日支蒙の三人連れの遠の旅茶を與へよとかけ合ひにけり  
獐猛な面ざししたる馬賊連銃劍携へわれをとりまく  
大銀貨を百枚出して與ふればにはかに變る馬賊のたいど  
この人は日出づる國の聖者よと蒙古語もちて白凌閣のれり  
日本より聖者の來るこの年をまちしと馬賊合掌を爲す  
三千の馬賊率ゆる頭目はわが前にたちピストルを向くる  
其の方は日本人に非ずやと容易に日本語使ふ頭目  
われこそは日本の出口と答ふれば面くもらせてうつむく頭目  
ともかくもわが居間に來れと頭目はわれを導き一間に入れり  
うらわかき女馬賊の頭目に導かれつつ奥の間に入る  
白凌閣温長興を待たせおきて頭目とわれ語らひにけり  
日本の本國の聲名高き君にして蒙古に來ますは何故と問ふ  
日本の本の國の司にいれられず蒙古に國を建てむと來れり

なつかしも日本人と聞く上はわが素性をば明さむといふ  
 わが父は王文泰と名乗りつつ北清事變に働きし人  
 われもまた王文泰と假名すと名刺を出して彼に示せり  
 不思議なる事よと女頭目はつくづく名刺に目を注ぎ居り  
 わが父は日本の生れ事情ありて日かげの身よとうち伏して泣く  
 わが父は日清戦争のありし時臺灣島より逃れ來し人  
 わが父は蘿の身にしあれば蘿清吉とぞ名乗りゐたりき  
 わが胸にあたるは日清戦争と清吉といふ名にぞありける  
 若しや若しわれの尋ぬる人にもやと思へば胸はかき亂れつつ  
 わが父は朝な夕なを日の本の空に向ひて合掌したりき  
 われも亦日本の空のなつかしく朝陽に向ひ手を合すなり  
 わが母は蒙古の生れ蘿水玉よ七年以前にこの世を去れり  
 巴布札布の獨立軍に三千騎父は率ゐて加勢なしたり  
 わが父は張作霖の奸計にあざむかれつつ殺されにけり

わが父ちちの殺ころされし時ときは苗草なへぐさの未まだ十六じふろくの春はるなりにけり  
三千騎さんぜんきの部ぶ下かを率ひきゐてわが父ちちのあとおそひつつ頭目とうもくとなりぬ  
何處どことなく初はじめて見みたる心地こころせす語かたらふうちに親したしくなりぬ  
われこそは未まだ二十一にじふいちの女盛をんなさかり父ちちの仇かたきを打うたむとてなく  
滅ほろび行く蒙古もうちを興おこし國建くにたつる雄々ををしき君きみに從したがはむと願ねがふ  
蒙古もうちには生うまれたれども父ちちの血ちの流ながる大和撫子やまとなでしこといふ  
いろいろと心盡こころづくしの御馳走ごちそうにわれほだされて一夜いちやを泊とまれり  
白凌閣バイリンクワンチャンシン温長興もろともも諸共もろともにわが隣室りんしつを守りつつねむる  
軍犬ぐんけんの聲裏山こゑうらやまにこだましていと騒さわがしき夜半よはを起おき出いづ  
何事なにこととわれたづぬれば微笑ほほえみつ蘿龍ラリウは部下ぶかの歸かへりしと答こたふ  
月清つききよき庭にはにたち出いで蘿龍ラリウとわれ日出國ナランオロスの話はなしにふける  
夏の夜なつよは忽たちまちあけて向むかつ尾をのあんずの花はなに輝かがやく朝津陽あさつひ  
あかあかと山一面やまいちめんに咲さき匂におふあんずの花はなの目めにさゆる朝あさ  
庭先にはさきの限かぎりも知しらぬ芝しばの生ふに蘿龍ラリウは觀兵式くわんべいしきを行おこなふ

三千騎の駒のいななき高々と四圍の山々どよもしにけり  
頭目の蘿龍は馬上高くたちて吾に誓ひし事を傳へり  
わが歸り送らむとしていや先に頭目はたち部下と送り來る  
一齊に馬賊のうたをうたひつつ數百の騎士はわれを送れり  
わが前に進む蘿龍はふり返り日本は神の國よと叫べり  
何となく雄々しき君よなつかしと開けつ放しの蘿龍の言の葉  
われも亦蘿龍のやさしき言の葉に心の綱はゆるみ初めたり  
待てしばしわれは益良夫國建つるまでは動かじこの雄心を  
數百騎を從へ花の野邊をゆく蒙古のわれは華やかなりけり  
頭目の日本語覚えし馬賊等は聲も清しく歌ひ従ふ  
國遠み蒙古の空に日本語の歌聞くわれは心強かり  
みめかたち衆にすぐれてうるはしき蘿龍の案内を愛ぐしと思へり  
わが父に似ませる君とこの蘿龍つくづく見つつ涙ぐみ居り  
回天の君が事業に仕へむと胸を打ちつつ雄猛ぶ蘿龍

君が邊をしばし離れて從軍の用意爲さむと駒にまたがる  
駒の上にまたがり後をふり返り名残り惜しげにわかれゆきけり  
六月の一日軍事行動をいよいよわれは開始なしたり  
この蘿龍三千餘騎を從へて別働隊となりて働く  
パイインタラにわれ破れしと聞くよりも蘿龍は洮南縣を襲へり  
洮南縣縦横無盡に荒れ廻り遂に白音太拉に進めり  
蘿龍軍の馮河暴虎の勢も運命盡きて捕へられたり  
二十二の春も迎へずこの蘿龍甲子の冬を散り失せにけり  
蒙古馬賊頭部下を引きつれて索倫山に集り來る  
軍事一切盧占魁中將に任せおきてわれ奧蒙の山野に遊べり  
枯草の野に火を放てば山孔雀野兔驚き數多飛び出す  
奧蒙古の春はたけたり山野一面コルギホワラの花咲きみちて  
コルギホワラ處せきまで咲き匂ふ蒙古の野邊は樂しかりけり  
金龍にわれはまたがり名田大佐銀龍に乗りて山野に遊ぶ

名田大佐騎馬の達者をほこらひて蒙古の部落にひとりかけ入る  
かけ入りし名田氏の姿見るよりも數十頭のシーゴーにかこまる  
狼と犬と番ひしあひのこのシーゴーこそは猛犬なりけり  
シーゴーは馬の尻尾にかみつきて名田氏一人を取りまき吠ゆる  
群犬の吠えたつ聲に驚きて白凌閣したがへわれかけついたり  
シーゴーは鬼齒むき出し大口をあけて名田氏をとりまきにけり  
人を喰ふ猛犬シーゴーはわが姿見るより又も飛びつき来る  
金龍に鞭うちわれは猛犬の中にかけ入りふみにじらせり  
つぎつぎに聲をききつけシーゴーは波の如くに集り来る  
あやまちて名田氏は馬上より轉落しあやふく犬にかまれむとせり  
白凌閣猛犬の上に駒飛ばせかけり狂へるさま勇ましき  
漸くに名田氏あやふく馬に乗り一目散に逃げ出しけり  
吾が駒は勇みに勇みわが指揮のまま猛犬をけ散らし戦ふ  
シーゴーもわが勢におそれけむ次第々々に後しざりする

シーゴの群をのがれて白凌閣と一目散に駒かけ歸る  
上木局子わが假營に歸り見れば金龍の脚に犬のかみしあと  
シーゴにかみつかれたる脚のきず血潮したたるさまのあはれさ  
金龍を引つれ洩兒河の水に血潮洗ひて繃帶をなせり  
金龍は清き川水呑みながら聲勇ましくいななき初めたり  
金龍は勇ましき馬はしき馬よわが身邊に眼放たず  
言問ひはせねど雄々しき金龍はわが朝夕を仕へ怠らず  
ひそみゆくわが足音を聞きつけていななき喜ぶさま愛ぐしかり  
名田大佐馬上ゆ落ちたるその刹那臀部を打ちて痛みに惱めり  
銀龍は名田氏のなやめるさまを見て只悲しげにうつむきて居り  
蒙古野に屍さらすもいとほまじ天津乙女のしに行く思へば  
男子われ蒙古の荒野に果てむこそ大和魂の譽と思へり  
朝夕をわれ日の本に打ち向ひ御國の榮へ祈りつつあし

(昭和七・一〇・一五 一〇月號「昭和」誌)

蒙古の夢

その昔 忽必烈なる

蒙古の英雄 数千隻の戦艦と

十萬の精兵を以て 我邊境を脅かし

其勢ひ當る可らず 神州の上下

一時に震撼し 畏くも龜山上皇の

宸襟を悩ませ奉る 時の執權北條時宗の勇

力戦苦闘すれ共 目に餘る大軍

容易に退陣の氣配無し 日本全國の神明

膺懲の神軍を起して 敵を西海の波に没せしむ

ア、日本の稜威 神明の威力

遂に大國難を排除し玉ふ ア、ありがたきかな

皇天<sup>くわうてん</sup>皇土<sup>くわうど</sup>の守護<sup>しゆご</sup>  
敵軍<sup>てきぐん</sup>の無事<sup>ぶじ</sup>  
歸還<sup>きくわん</sup>せしもの  
僅<sup>わづか</sup>に三人<sup>さんにん</sup>と傳<sup>つた</sup>ふ

蒙古<sup>もうこ</sup>十萬<sup>じふまん</sup>の精兵<sup>せいへい</sup>  
大敗<sup>たいはい</sup>して僅<sup>わづか</sup>に三人<sup>さんにん</sup>を餘<sup>あま</sup>したるは是<sup>これ</sup>

日本<sup>にっぽん</sup>武人<sup>ぶじん</sup>の勇<sup>ゆう</sup>にはあらで  
畏<sup>かしこ</sup>くも龜山<sup>かめやま</sup>上皇<sup>じやうくわう</sup>の

岩清水<sup>いはしみづ</sup>八幡宮<sup>はちまんぐう</sup>へ  
御祈願<sup>ごきぐわん</sup>の結果<sup>けつこく</sup>

伊勢<sup>いせ</sup>の神風<sup>かみかぜ</sup>の佑助<sup>いうじよ</sup>なりと云<sup>い</sup>ふ  
呬<sup>ああ</sup>いづこに日本<sup>にっぽん</sup>武人<sup>ぶじん</sup>の力<sup>ちから</sup>あるか

この大國<sup>だいくこく</sup>辱<sup>じやく</sup>大國<sup>だいく</sup>難<sup>なん</sup>  
何れも主上<sup>しゆじやう</sup>と神明<sup>しんめい</sup>の力<sup>ちから</sup>のみ

日本<sup>にっぽん</sup>男子<sup>だんし</sup>としての武勇<sup>ぶゆう</sup>にあらざ  
吾等<sup>われら</sup>の祖先<sup>そせん</sup>は

この一大<sup>いちだい</sup>侮辱<sup>ぶじやく</sup>を受けて  
我國民<sup>わがこくみん</sup>の卑怯<sup>ひけふ</sup>さを

遺憾<sup>あかん</sup>なく發揮<sup>はつき</sup>せり  
後世<sup>こうせい</sup>の子孫<sup>しそん</sup>たるもの

豈<sup>あに</sup>この侮辱<sup>ぶじやく</sup>に對<sup>たい</sup>して  
會稽<sup>くわいけい</sup>の恥<sup>はぢ</sup>を

雪そそがざる可べけむや

日本にっほん男子だんしの氣骨きこつを示しめし 神國しんこく臣民しんみんの

勇俠ゆうけふしん心を發揮はつきし 歴史れきしの汚點をてんを

拂拭ふつしきせざるべからず 吾少年われせうねんの頃ころより

此この蒙古もうこ襲來しふらいに對たいして 雪辱せつじよくの擧きよに

出いでむと計はかるや 實じつに年久としひさし

ア、日本にっほん男子だんしの本領ほんりやうに對たいして

徒手としゆく空拳くうけん

吾われは三人みたりの同志どうしと共ともに

回天くわいてんの鴻圖こうとを抱いだいて 我國わがこく威ゐを顯彰けんしやうし  
 神州しんしう男子だんしの精神せいしんを 中外ちうくわいに暉かがさむが爲ため  
 萬里ばんり遠征えんせいの途とに上のぼりぬ 漠々ばくばくたる内外ないぐわい蒙古もうこの大原野だいげんや  
 三軍さんぐんを叱咤しつたして 東亞とうあ存榮そんえいの爲ために  
 雄圖ゆうとに就つき 一時いちじは  
 敵軍てきぐんの爲ために 空むなしく歸國きこくの止やむなきに至いたりぬ  
 ア、去されど去されど 吾われは再ふたび  
 ア、惟かむながらたたまちちはへまませせ 惟神靈かむながらたたまちちはへませ幸倍坐世ちちはへませ

(大正一三・一二・一〇號「神の國」誌)

靈界物語 特別篇 山河草木 入蒙記

終り

底本

『靈界物語 入蒙記』愛善世界社

2004（平成16）年04月04日 第一刷発行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』（オニド）

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。図表などのレイアウトは完全に再現できないので適宜変更した。

編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

印刷発行 愛善苑熊野分苑